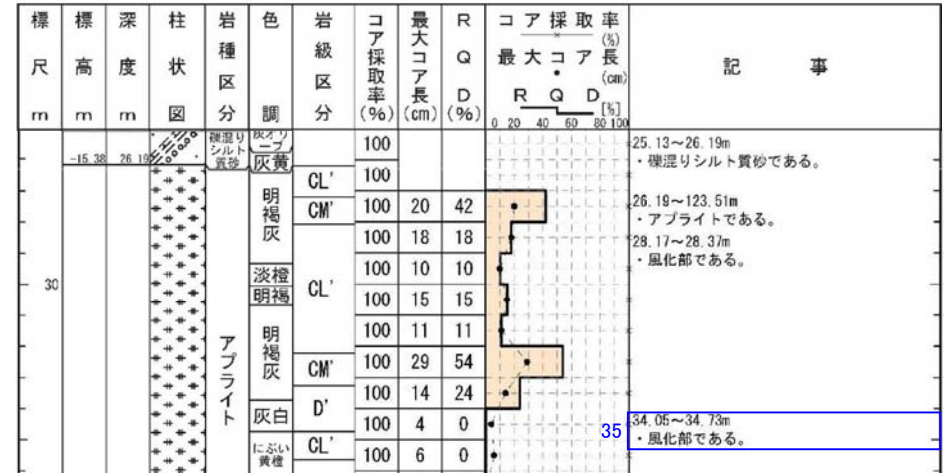


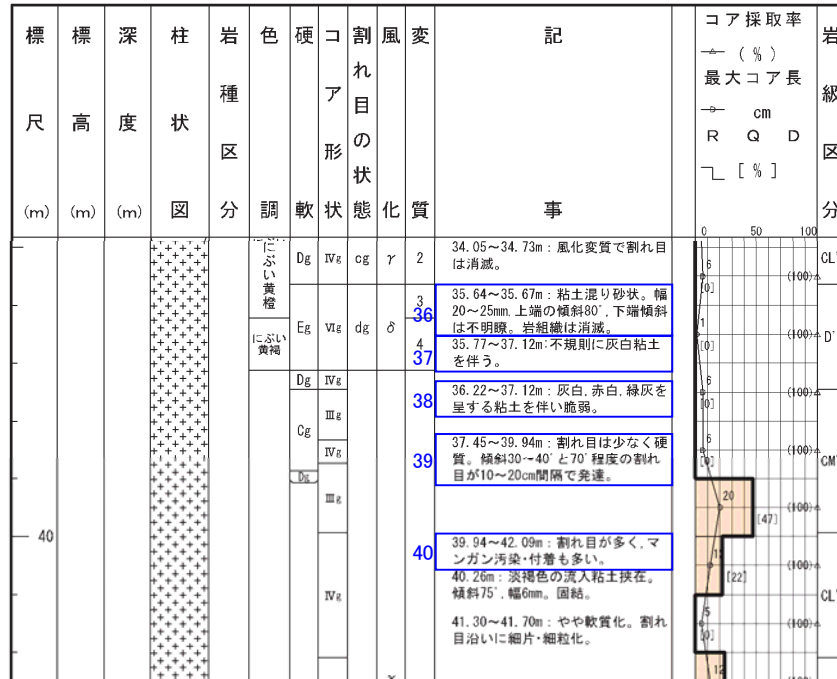
報告書作成用柱状図
(H26年12月)

申請書用柱状図

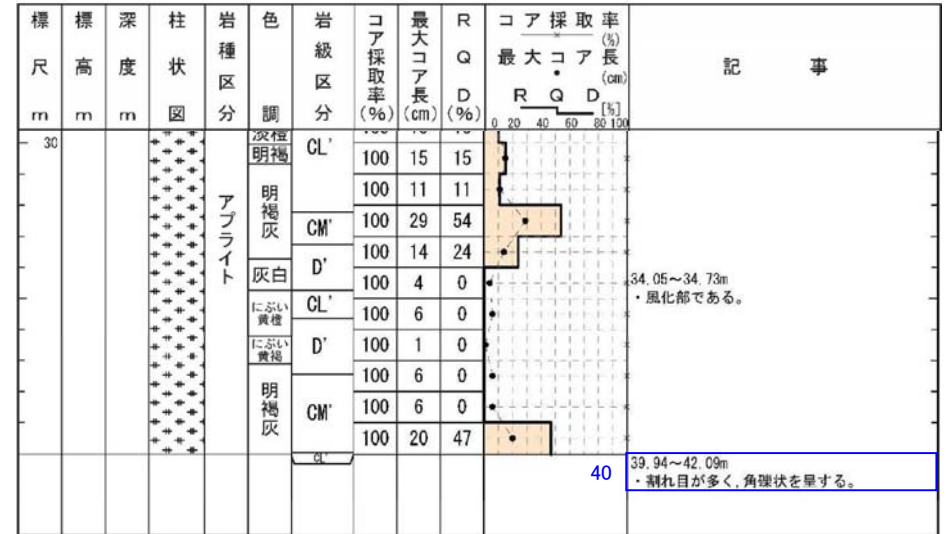


記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
29	・土砂の流入については、細粒分が割れ目を充填したものであり、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・マンガンについては、補足的なものであるため削除。
30	・砂・有機物の流入については、細粒分が割れ目を充填したものであり、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
31	・粘土の流入については、細粒分が割れ目を充填したものであり、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
32	・粘土を挟在するが、直線性や連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
33	・粘土の流入については、細粒分が割れ目を充填したものであり、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
34	・傾斜や割れ目沿いの変色については、補足的なものであるため削除。
35	・“風化”欄に基づき風化部と記載。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

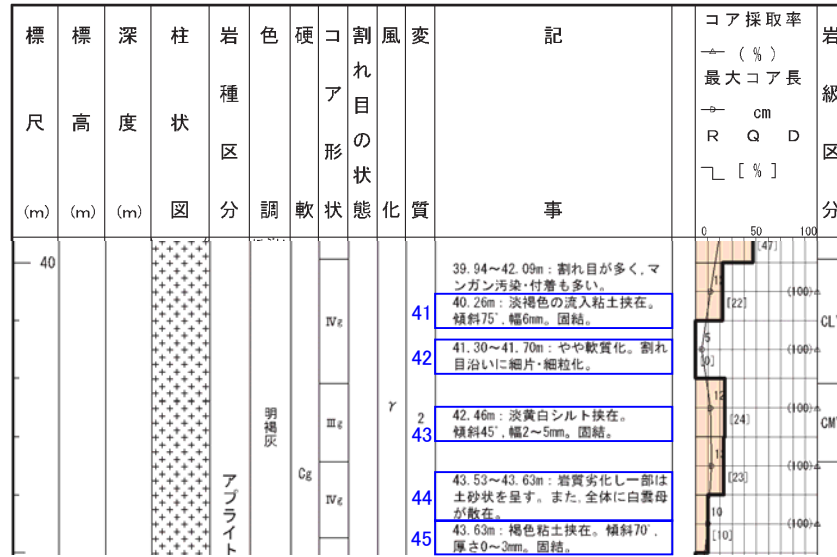


申請書用柱状図

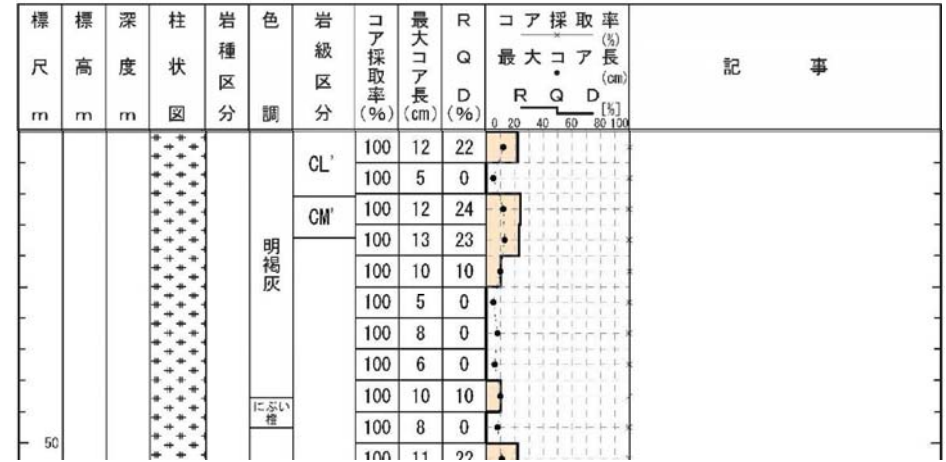


記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
36	・粘土混じり砂状の下面は直線性がなく、礫の周囲に不規則に充填しており、礫にも定向配列が認められないことから削除。
37, 38	・一部で粘土を挟在するが、系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。 ・脆弱化の程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
39	・硬軟や割れ目の発達の程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
40	・割れ目の発達の程度については、“コア形状”欄に基づき角礫状と追記。 ・割れ目沿いのマンガンについては、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)



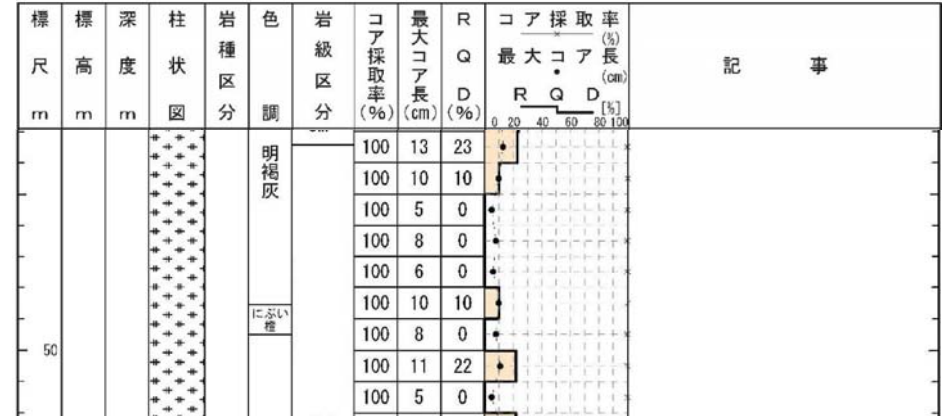
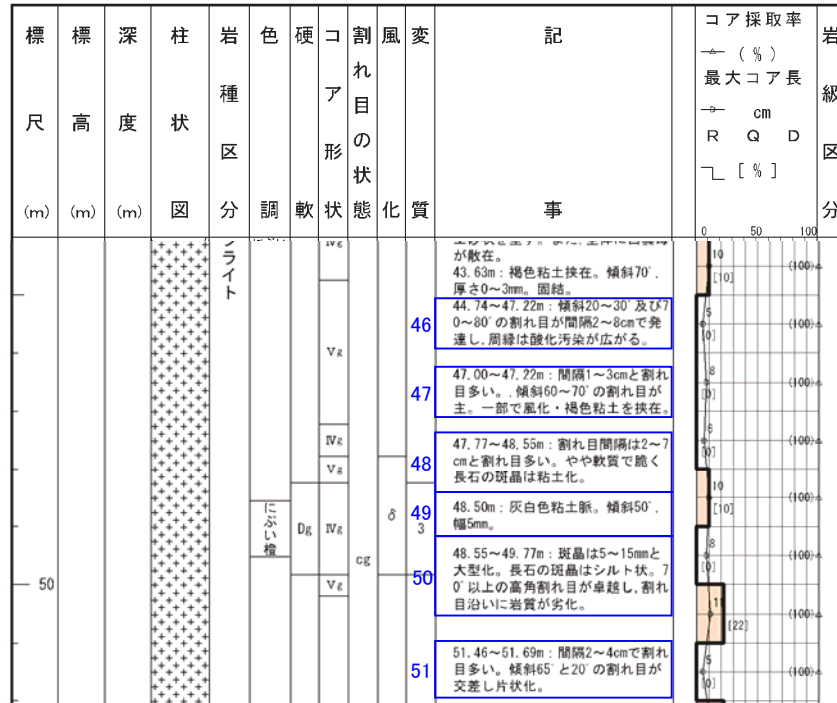
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
41	・流入粘土の挟在については、細粒分が割れ目を充填したものであり、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
42	・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・割れ目沿いに細片化しているが、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。
43	・シルトを挟在するが、直線性や連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
44, 45	・一部で土砂状を呈し粘土を挟在するが、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

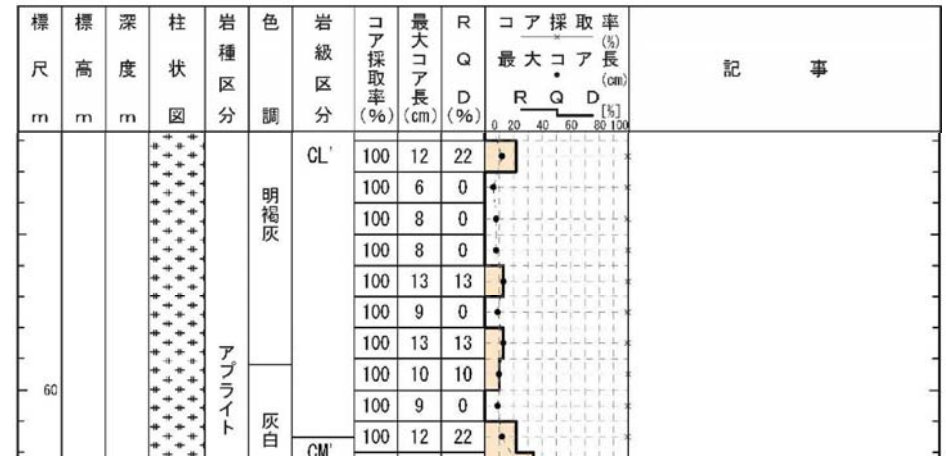
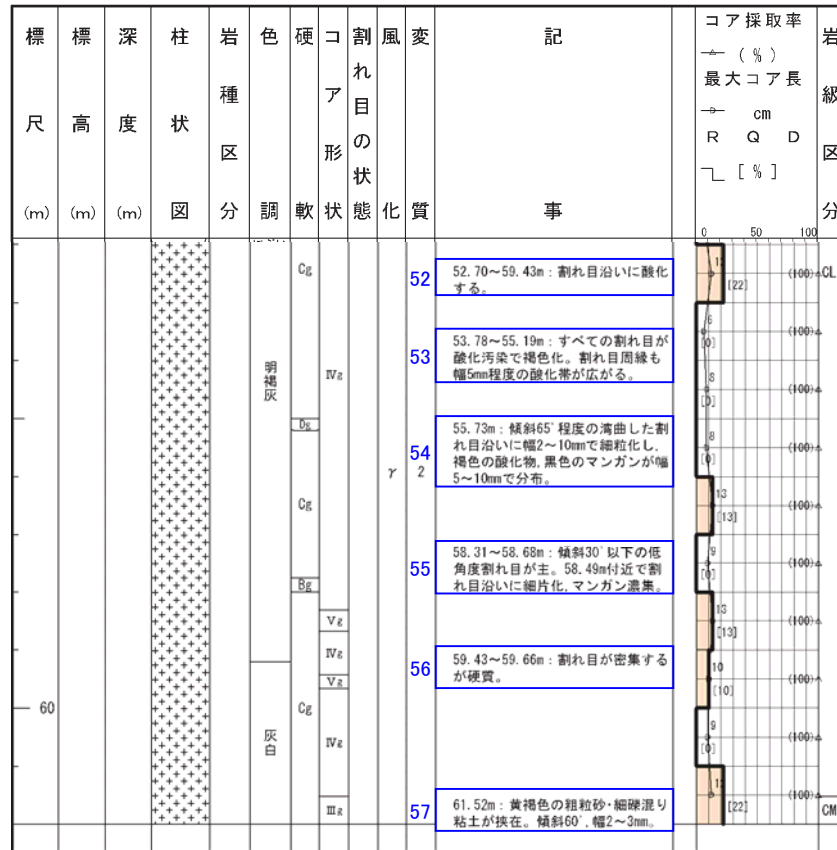
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
46	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・酸化汚染については、補足的なものであるため削除。
47	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部で粘土を挟在するが、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・割れ目沿いの風化については、補足的なものであるため削除。
48	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・長石の粘土化については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。
49	・粘土脈を挟在するが、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
50	・一般的な岩相であり、斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。 ・劣化及び割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
51	・割れ目沿いに片状化しているが、掘削時の機械割れと判断し削除。

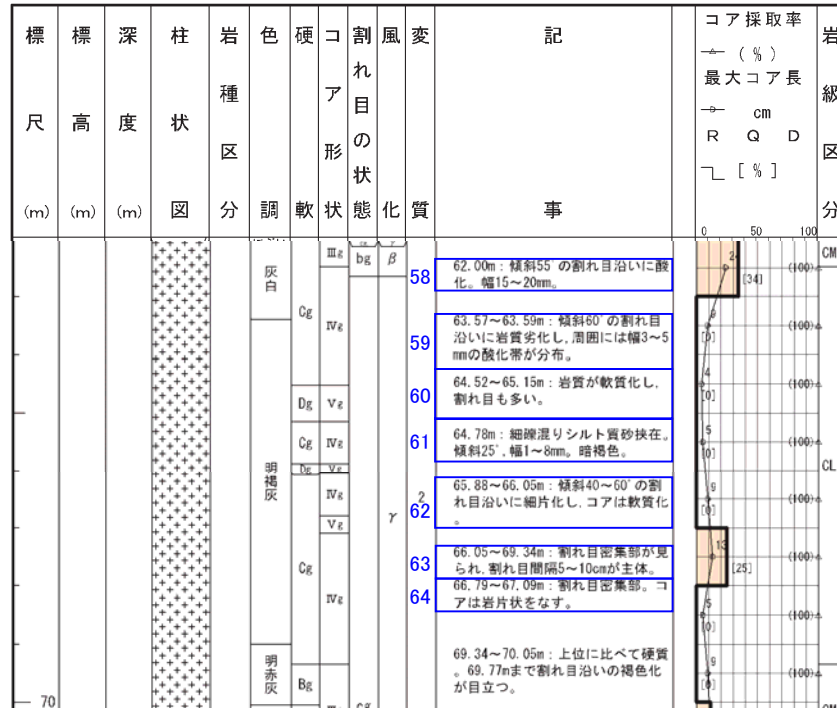
報告書作成用柱状図
(H26年12月)

申請書用柱状図

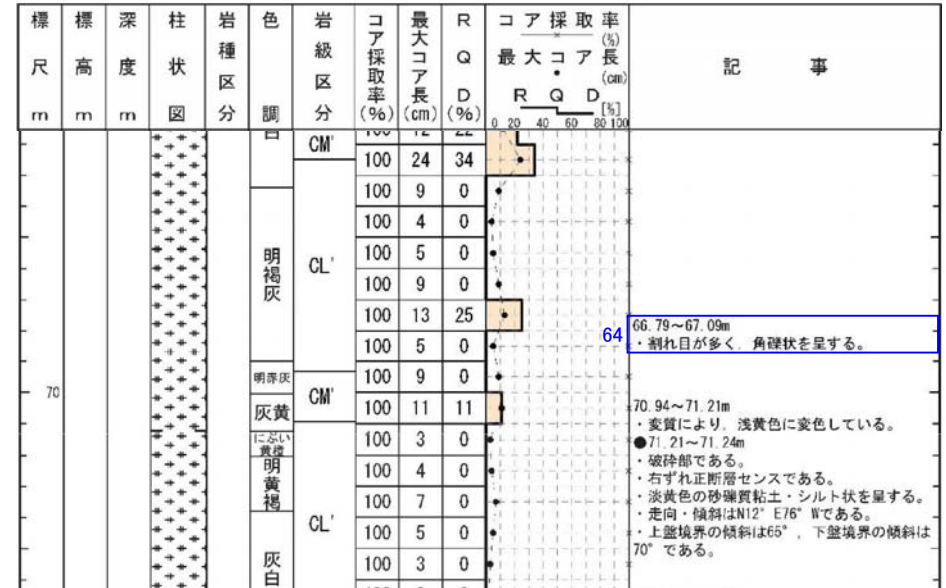


記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
52	・割れ目沿いの酸化については、補足的なものであるため削除。
53	・割れ目沿いの酸化については、補足的なものであるため削除。
54	・割れ目沿いに細粒化するが、直線性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・割れ目沿いの酸化物、マンガンについては、補足的なものであるため削除。
55	・割れ目沿いに細片化するが、直線性に乏しく、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。 ・割れ目の傾斜、割れ目沿いのマンガン濃集については、補足的なものであるため削除。
56	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
57	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

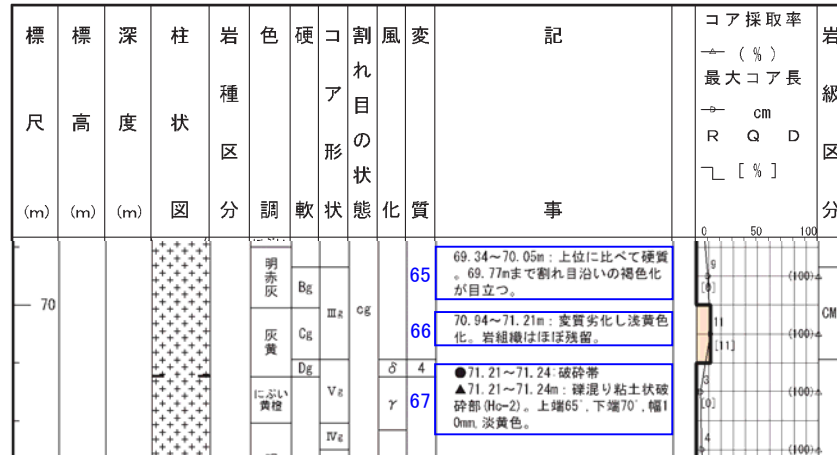


申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
58	・割れ目沿いの酸化については、補足的なものであるため削除。
59	・割れ目沿いに劣化するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・割れ目沿いの酸化については、補足的なものであるため削除。
60	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
61	・細礫混りシルト質砂を挟在するが、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
62	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
63	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
64	・“コア形状”欄に基づき角礫状と追記。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)



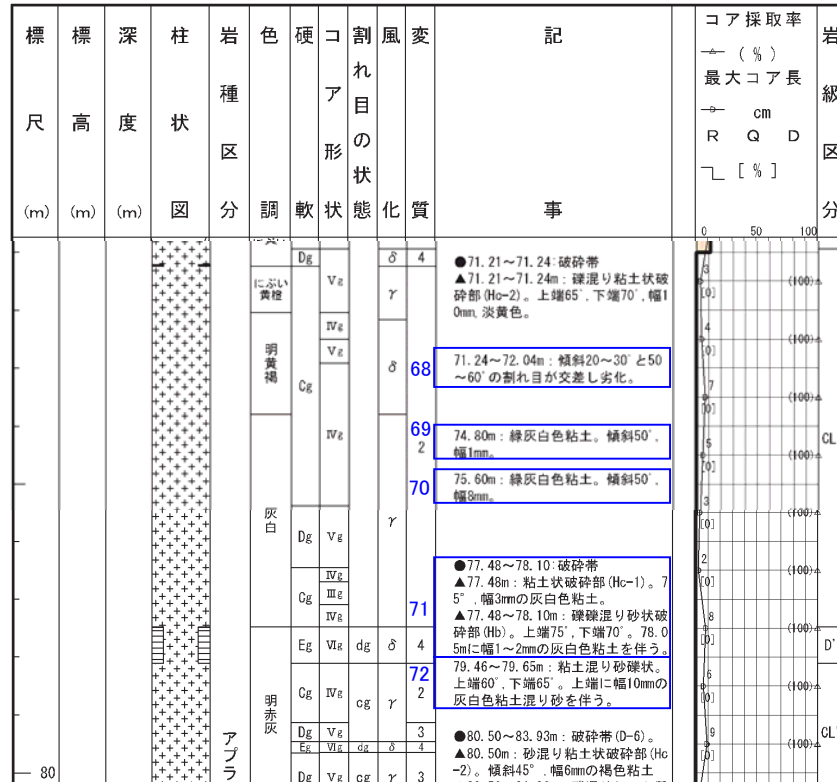
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
65	・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・割れ目沿いの変色については、補足的なものであるため削除。
66	・変質を伴う岩盤の劣化については、岩級区分で示しているため削除。 ・原岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
67	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・色調・粒度について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

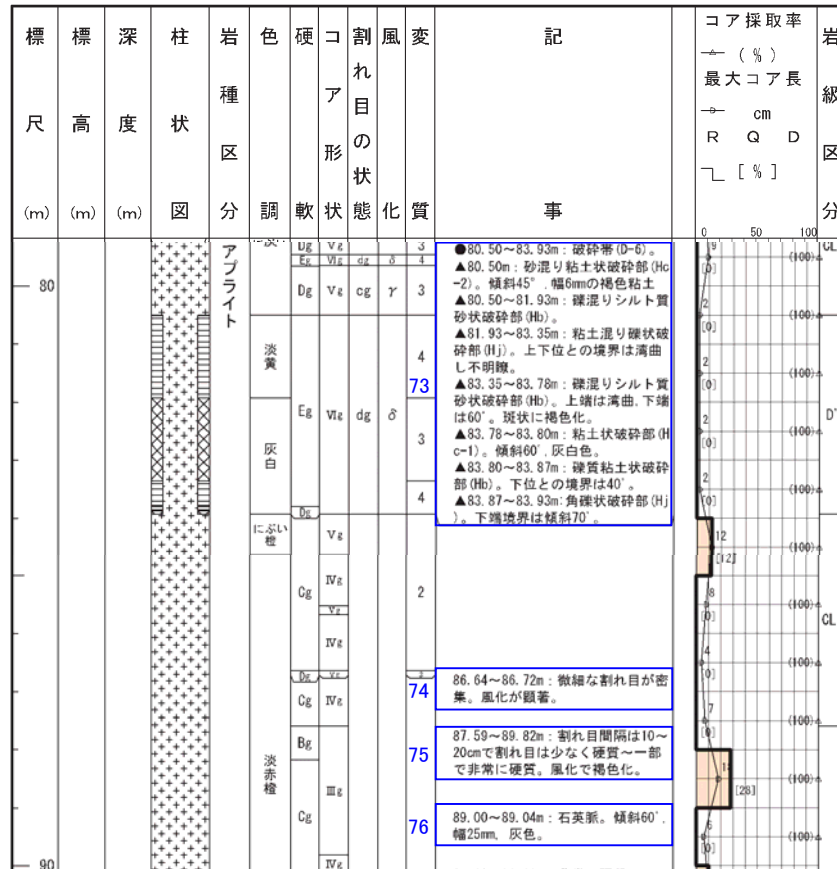
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
68	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
69	・粘土を挟在するが、直線性や連続性に乏しいことから削除。
70	・粘土を挟在するが、直線性や連続性に乏しいことから削除。
71	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・粘土の色調、累計幅については、報告書作成用柱状図の幅の最大値の合計を記載。 ・78.05mの粘土の色調を褐色に見直し。 ・“色調”欄に基づき、明赤灰色と記載。 ・申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき、砂質粘土・シルト状～粘土混じり礫状と記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。
72	・粘土混り礫状を呈し、粘土混り砂を挟在するが、連続性に乏しいことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

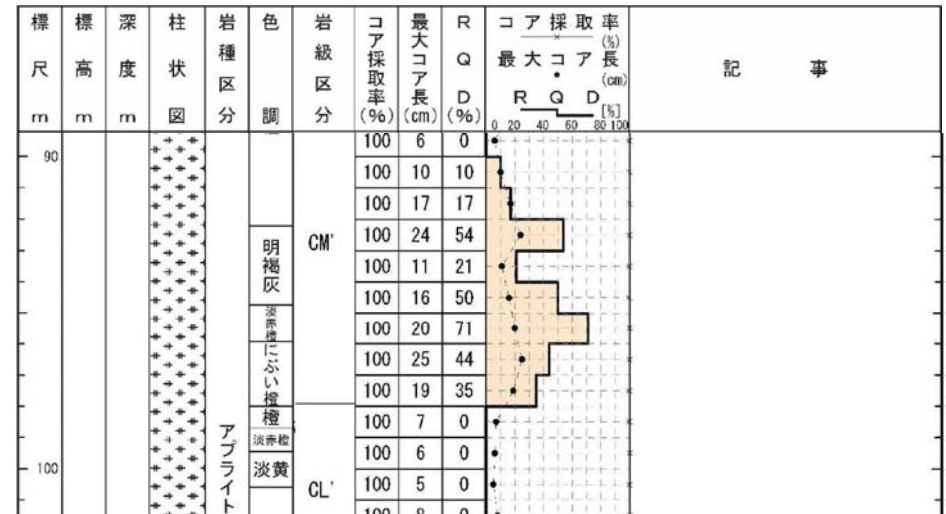
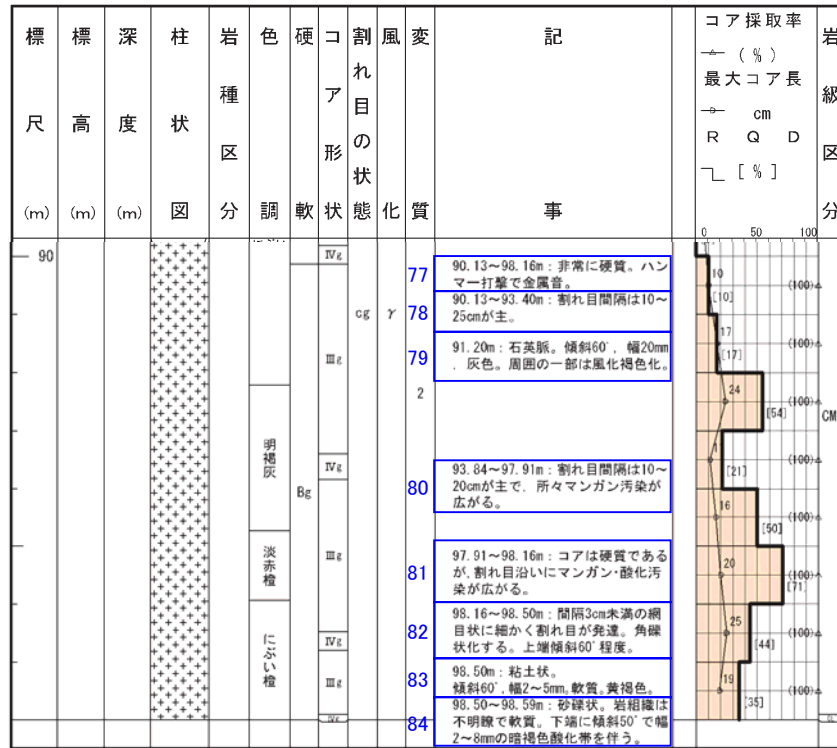
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
73	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・粒度、色調、粘土の累計幅について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破碎部の再観察の結果に基づき記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。
74	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・風化程度については、当該区間の周囲と明瞭な差が認められないため削除。
75	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・風化程度については、当該区間の周囲と明瞭な差が認められないため削除。
76	・鉱物脈については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

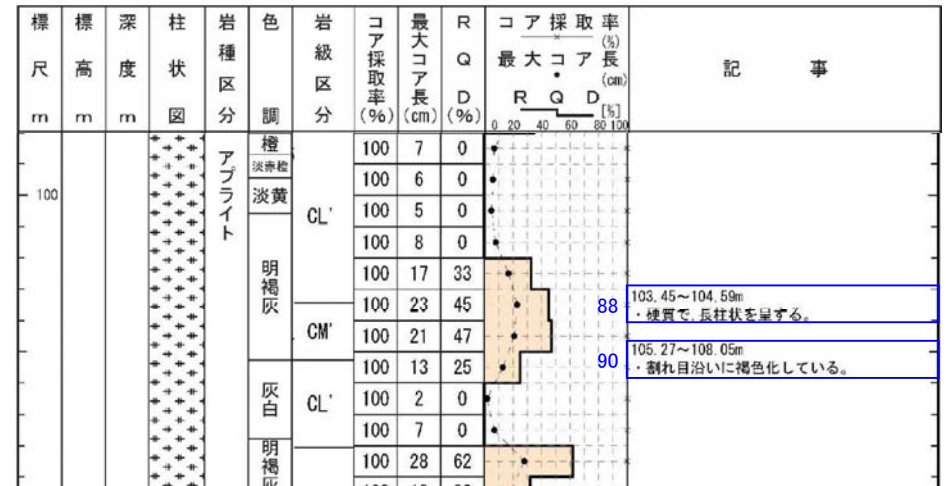
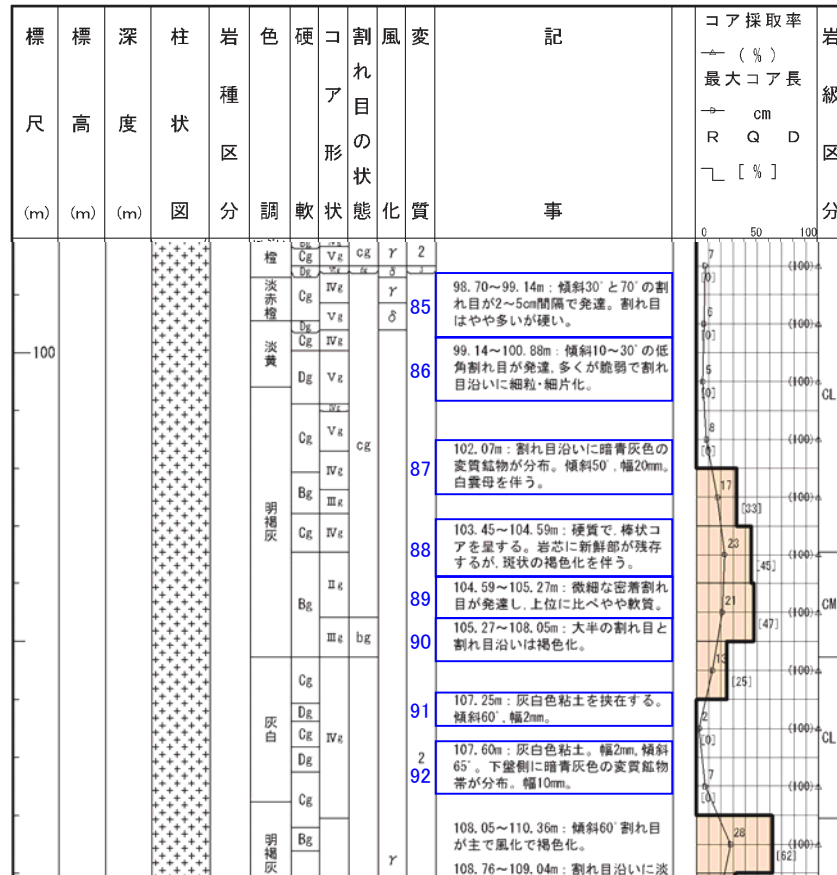
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
77	・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
78	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
79	・鉱物脈については、補足的なものであるため削除。 ・風化程度については、周囲と明瞭な差が認められないため削除。
80	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・マンガン汚染については、補足的なものであるため削除。
81	・割れ目沿いのマンガン・酸化汚染については、補足的なものであるため削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
82	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
83, 84	・砂礫状を呈し、一部で粘土を挟在するが、砂礫状部の原岩組織が残留し、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

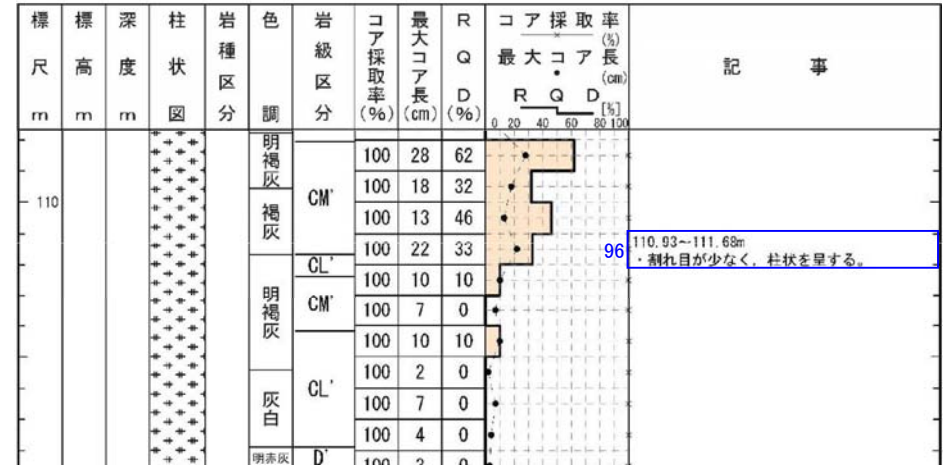
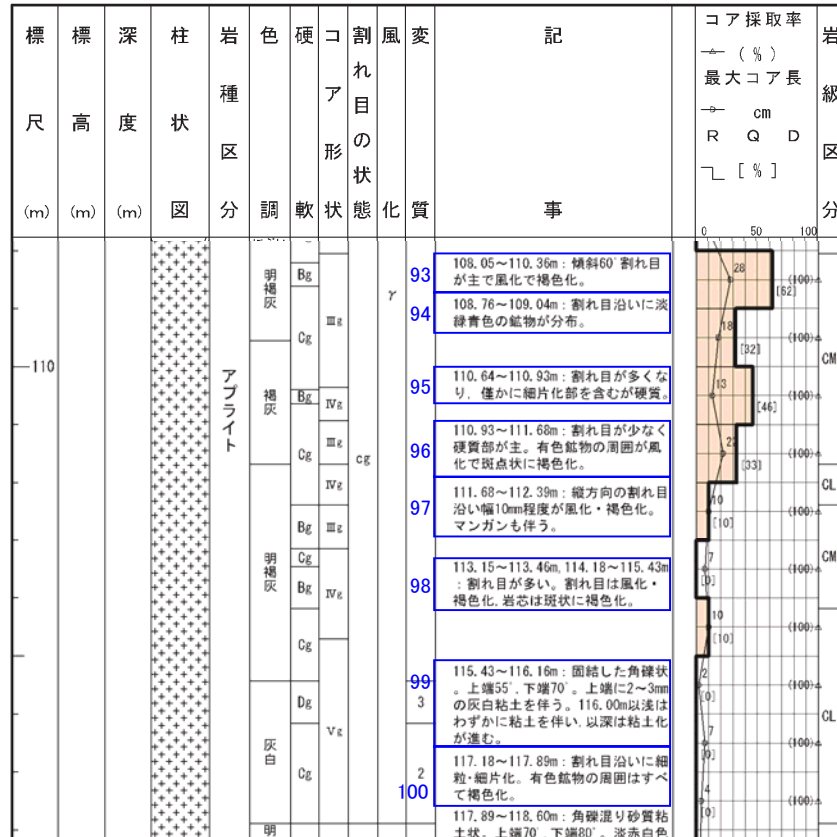
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
85	・硬軟や割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
86	・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いで細粒・細片化するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
87	・割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
88	・割れ目の発達の程度については、“コア形状”欄に基づき長柱状と記載。 ・変色については、補足的なものであるため削除。
89	・硬軟や割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
90	・変更なし
91	・粘土を挟在するが、連続性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
92	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・変質鉱物については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

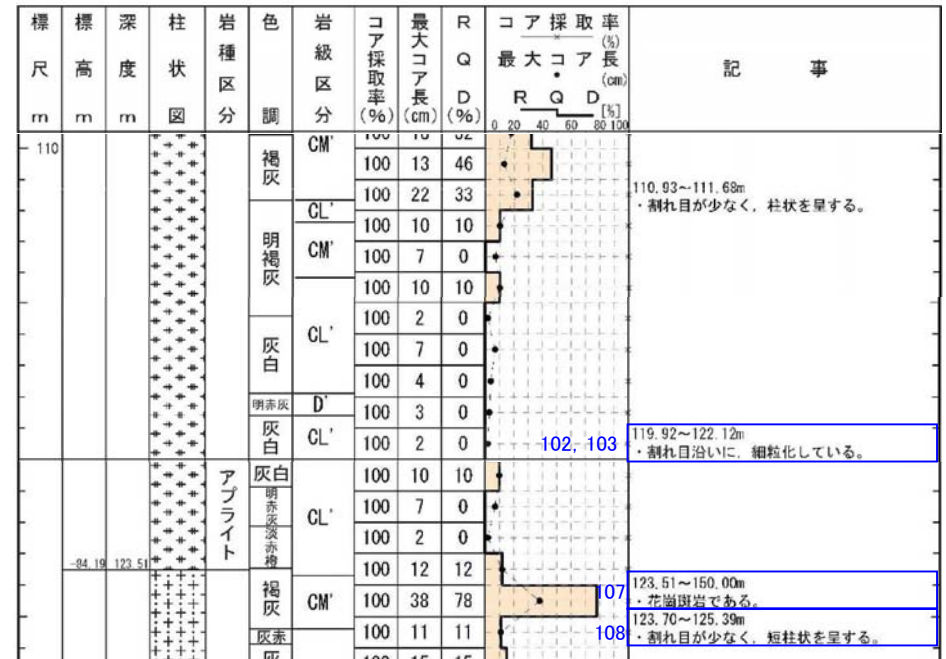
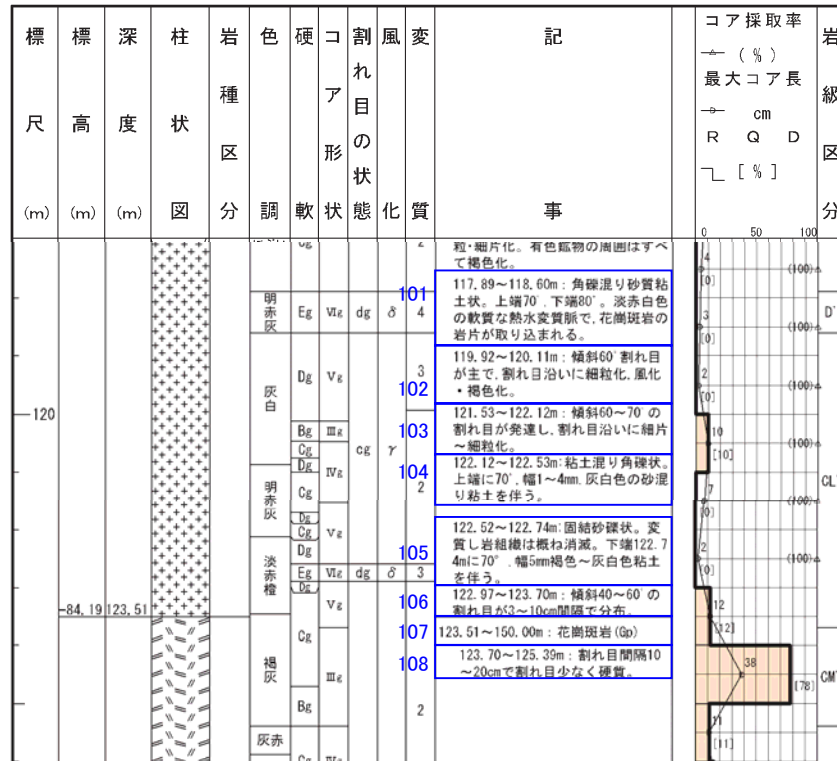
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
93	・割れ目の傾斜, 割れ目沿いの褐色化については, 補足的なものであるため削除。
94	・割れ目沿いの鉱物晶出については, 補足的なものであるため削除。
95	・硬軟や割れ目の発達程度については, RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
96	・割れ目の発達程度については, “コア形状”欄に基づき柱状と記載。 ・硬軟については, 岩級区分に含めて示しているため削除。 ・風化程度については, 当該区間の周囲と明瞭な差が認められないため削除。
97	・割れ目沿いの風化・褐色化, マンガンについては, 補足的なものであるため削除。
98	・割れ目の発達程度については, RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いの風化・褐色化については, 補足的なものであるため削除。
99	・上端に粘土を挟在するが, 周囲の岩盤の劣化が認められないことから削除。 ・角礫状の区間は, 掘削時の機械割れと判断し削除。 ・116m以深の粘土は, 連続性や直線性に乏しく, 周囲の岩盤の劣化が認められないことから削除。
100	・割れ目沿いの細粒・細片化については, 掘削時の機械割れと判断し削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

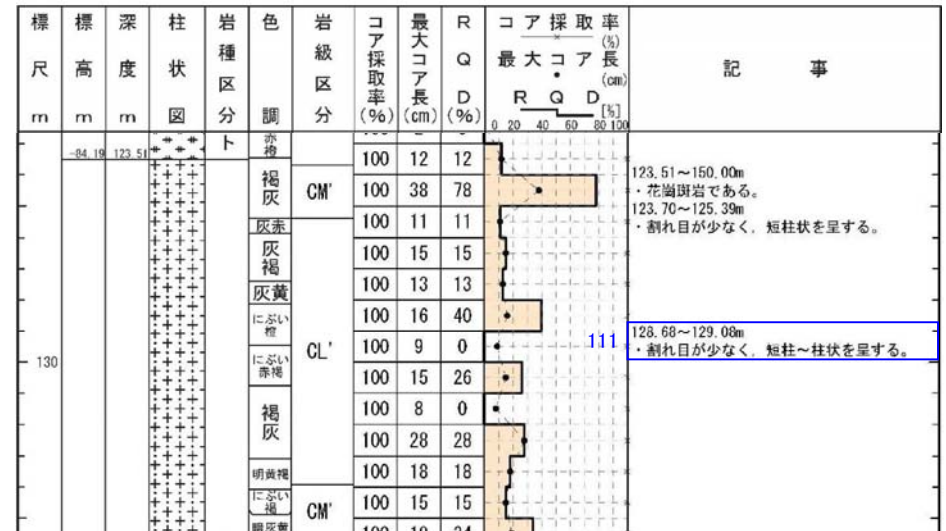
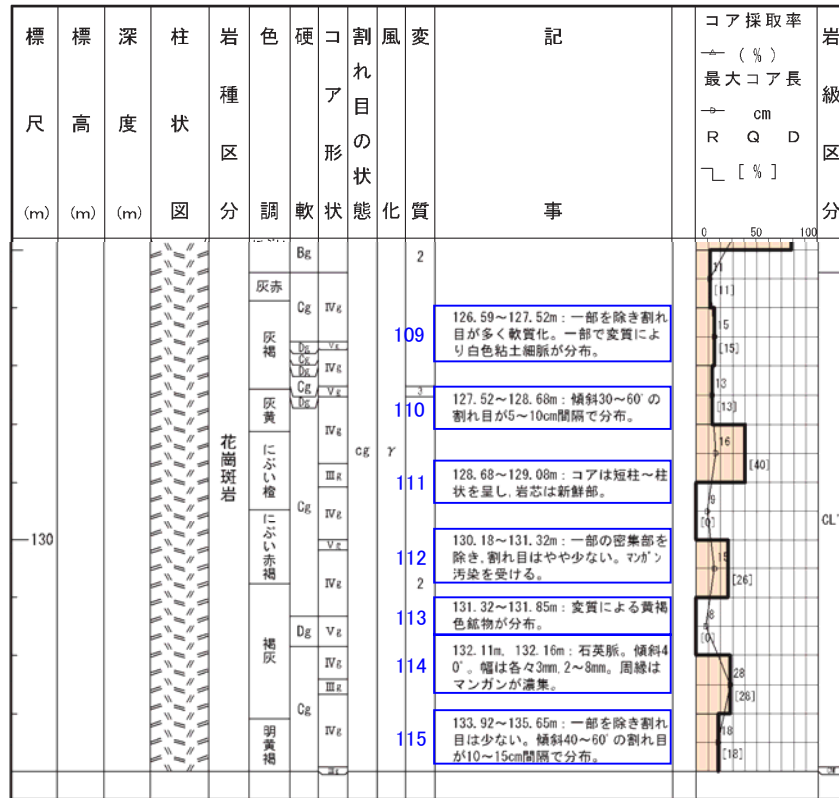
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
101	・網目状に粘土脈が分布しているが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
102, 103	・割れ目沿いの風化, 褐色化については、補足的なものであるため削除。
104, 105	・粘土混じり角礫状及び固結砂礫状を呈し、一部で粘土を挟在するが、粘土が系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。
106	・割れ目の発達程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
107	・変更なし
108	・割れ目の発達程度については、“コア形状”欄に基づき短柱状と追記。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

申請書用柱状図

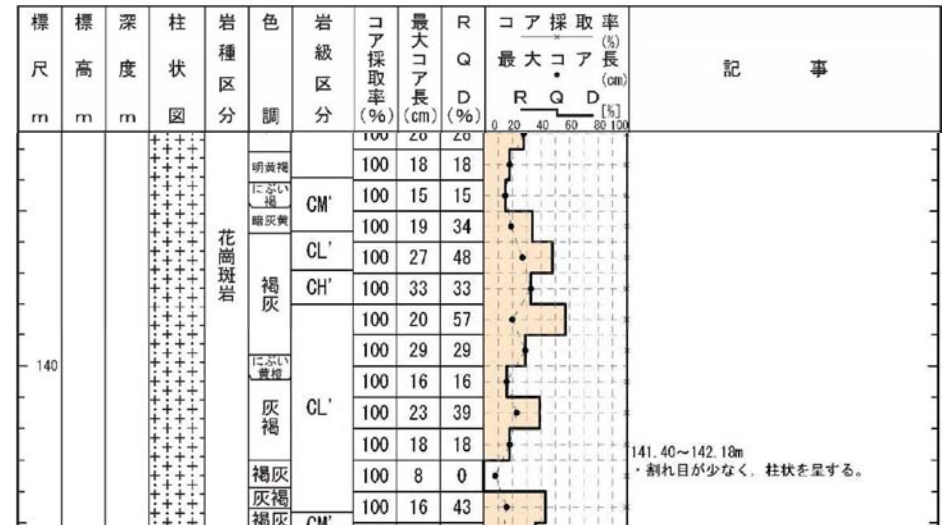


記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
109	・硬軟や割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部に粘土細脈を伴うが、系統的でなく連続性や直線性に乏しいことから削除。
110	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
111	・風化については、岩級区分に含めて示しているため削除。
112	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・マンガン汚染については、補足的なものであるため削除。
113	・鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
114	・石英脈、マンガン濃集については、補足的なものであるため削除。
115	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

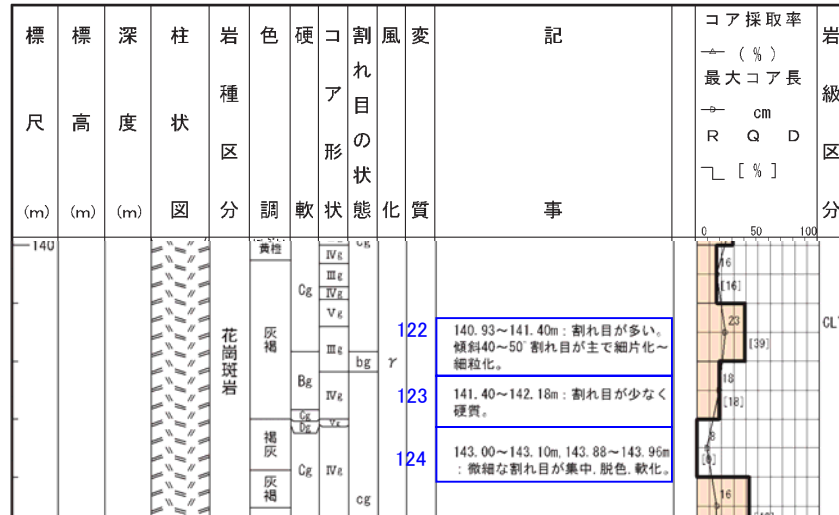


申請書用柱状図

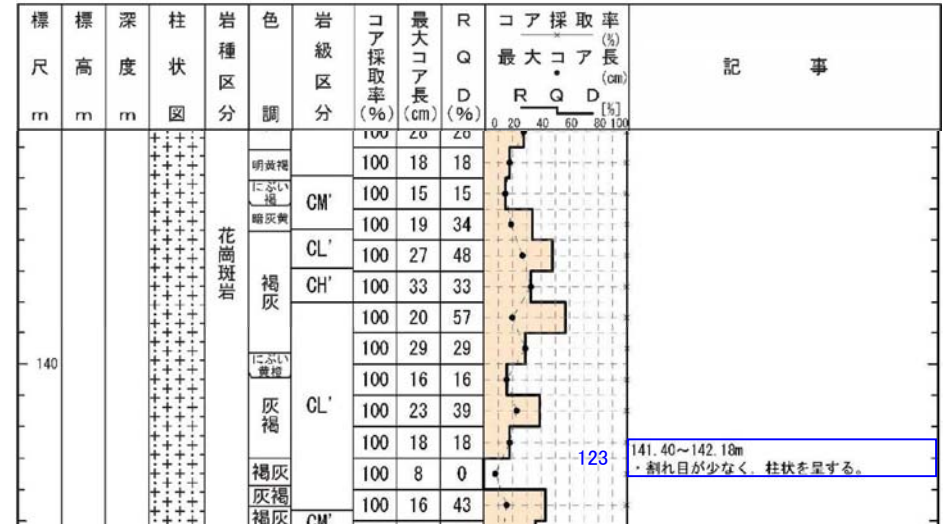


記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
116	・細片化しているが、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。 ・色調については、補足的なものであるため削除。
117	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
118	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
119	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
120	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いのマンガン汚染については、補足的なものであるため削除。 ・割れ目に細粒物質を挟在するが、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。
121	・割れ目沿いに変質し劣化するが、粘土等の系統的な配列が認められず、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

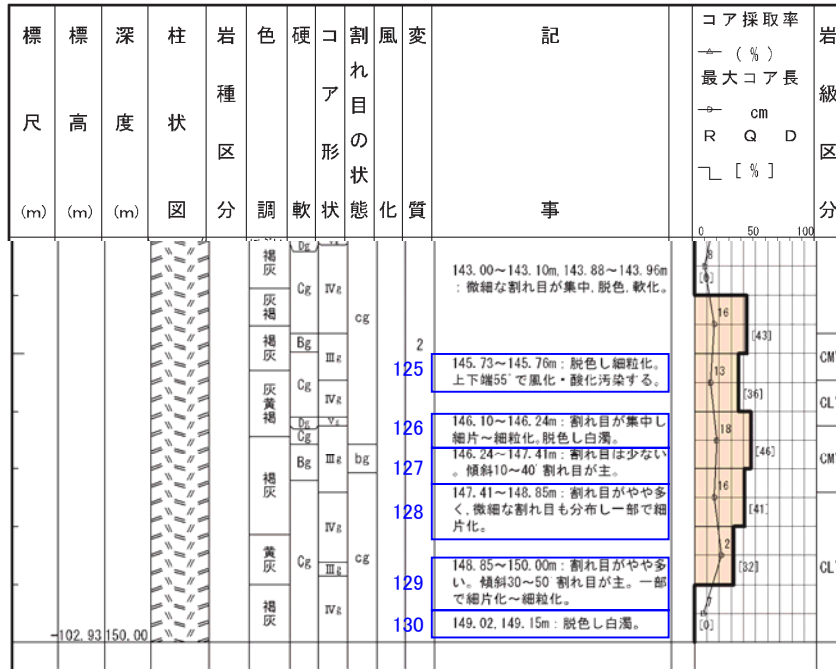


申請書用柱状図

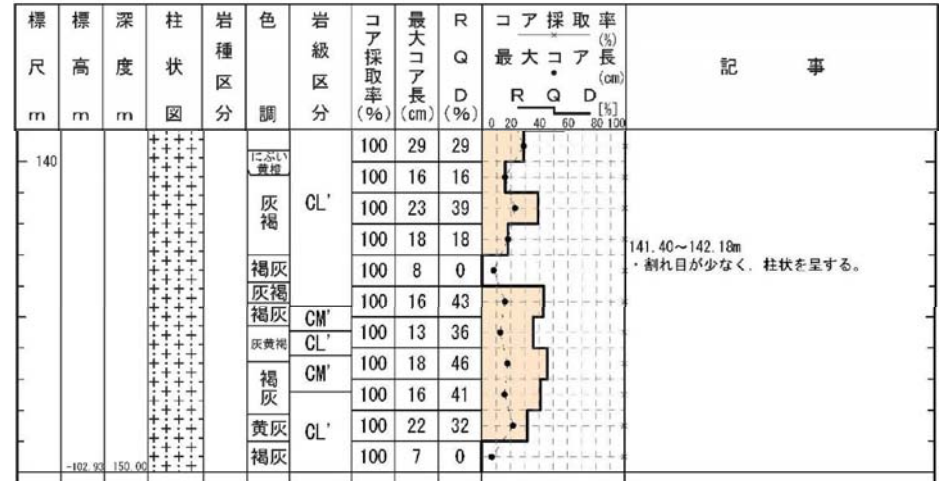


記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
122	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 割れ目沿いの細片~細粒化については、掘削時の機械割れと判断し削除。
123	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の発達程度については、“コア形状”欄に基づき柱状と記載。 硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
124	<ul style="list-style-type: none"> 硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 脱色については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)



申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
125	・細粒化するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
126	・割れ目の発達程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 ・白濁については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。
127	・割れ目の発達程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
128	・割れ目の発達程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 ・一部で細片化しているが、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。
129	・割れ目の発達程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 ・一部で細片~細粒化しているが、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。
130	・白濁については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。

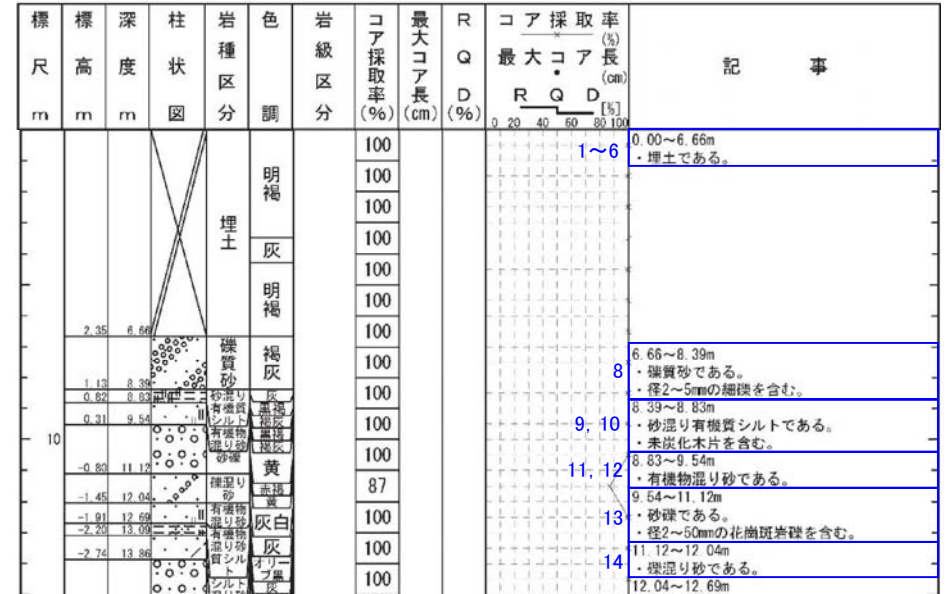
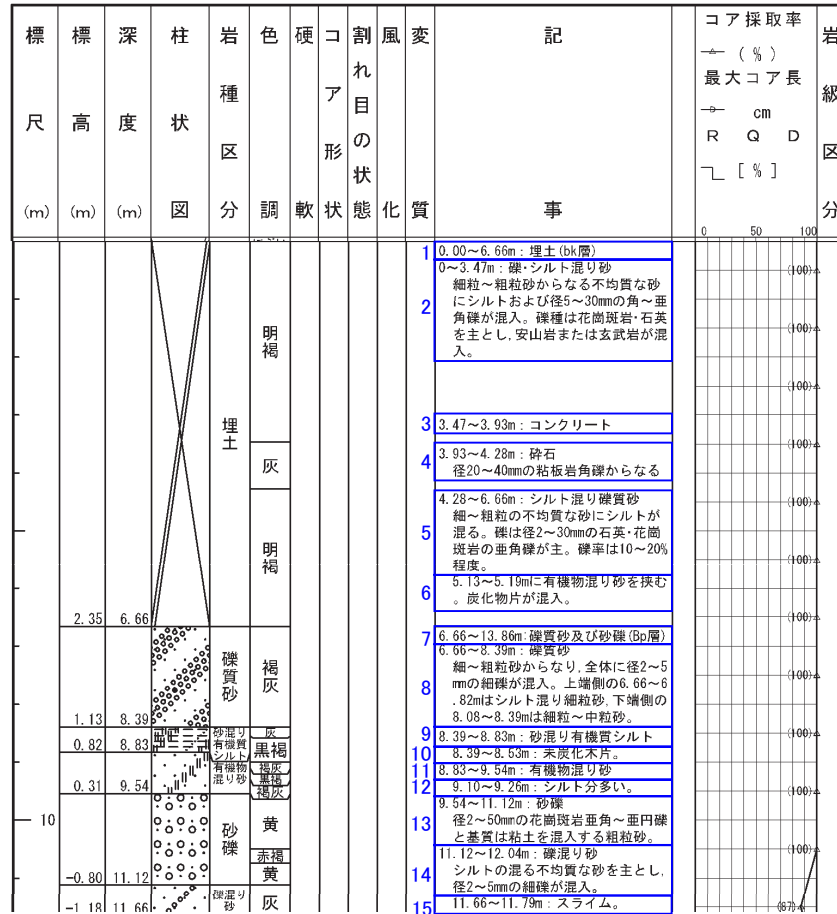
余白

H24-B14-2

余白

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

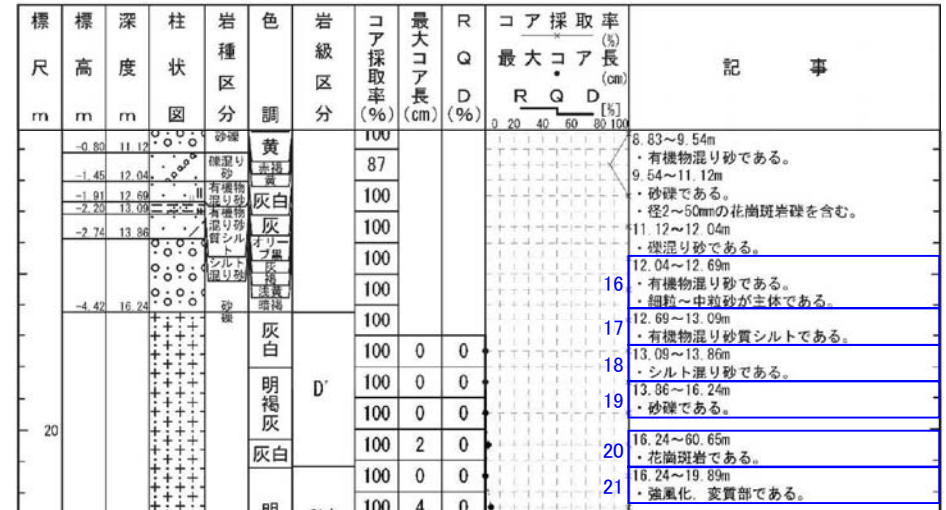
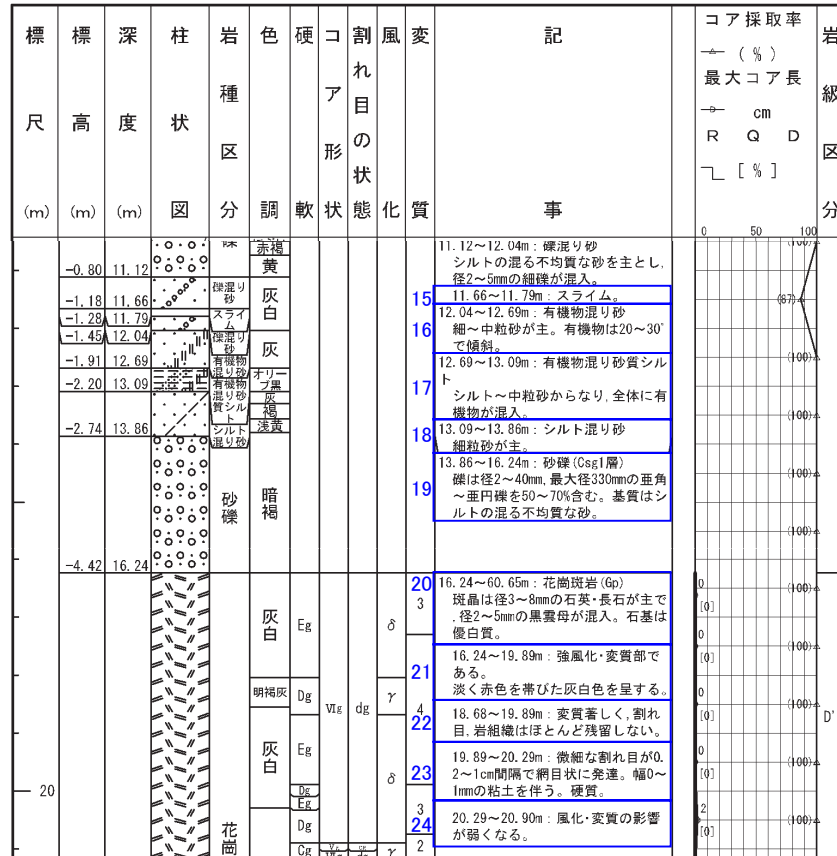
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
1~6	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
7	・区間毎の性状を個別に記載しているため、礫質砂及び砂礫とのまとめ書きについては削除。
8	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。 ・周囲に比べ礫の含有量が多く、目立つことから、礫の特徴として、粒度、礫径を記載。
9, 10	・変更なし
11, 12	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
13	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。 ・周囲に比べ含まれる礫が大きく、目立つことから、礫の特徴として、礫径、礫種を記載。
14	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
15	・スライム区間については、幅が狭いことから、上位、下位の礫混り砂状部に含めて削除。

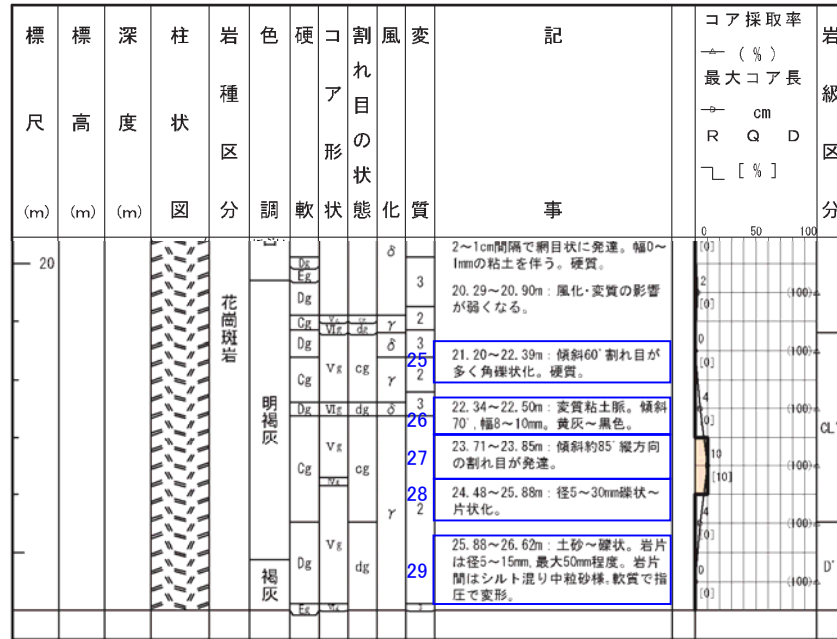
報告書作成用柱状図
(H26年9月)

申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
16	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。 ・上位層との境界付近では、粒度の違いが見かけ上顕著ではないため、上位層と区別できる特徴として、細粒～中粒砂が主体であることを記載。
17	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
18	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
19	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
20	・一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間ではないため削除。
21	・色調については、補足的なものであるため削除。
22	・変質の程度については、当該区間の周囲と差異が認められないことから削除。
23	・硬軟や割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部に粘土を挟在するが、系統的でなく連続性や直線性に乏しいことから削除。
24	・変質の程度については、当該区間の周囲と差異が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図 (H26年9月)

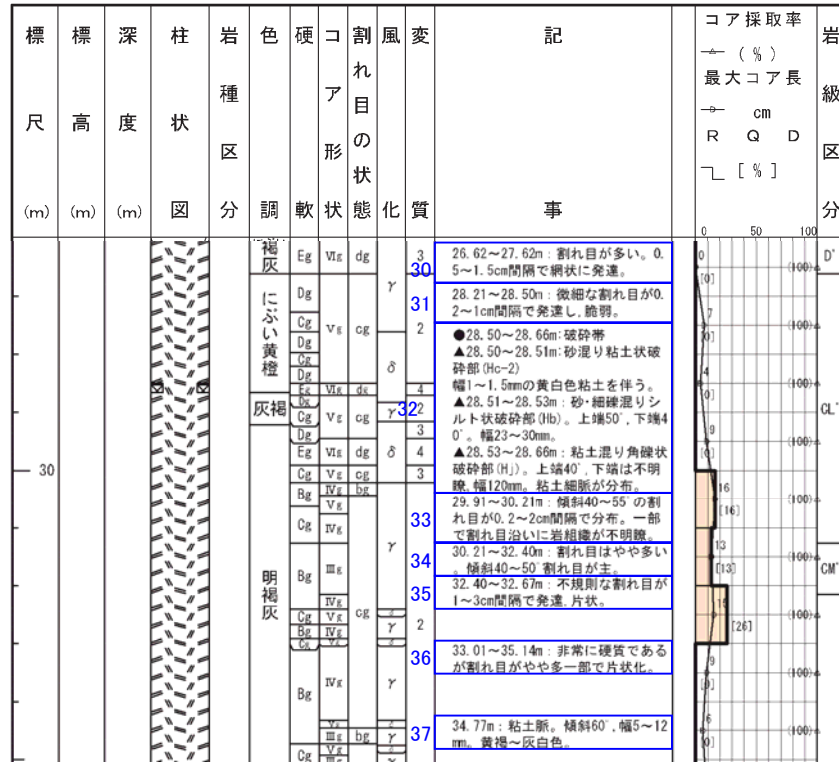


申請書用柱状図

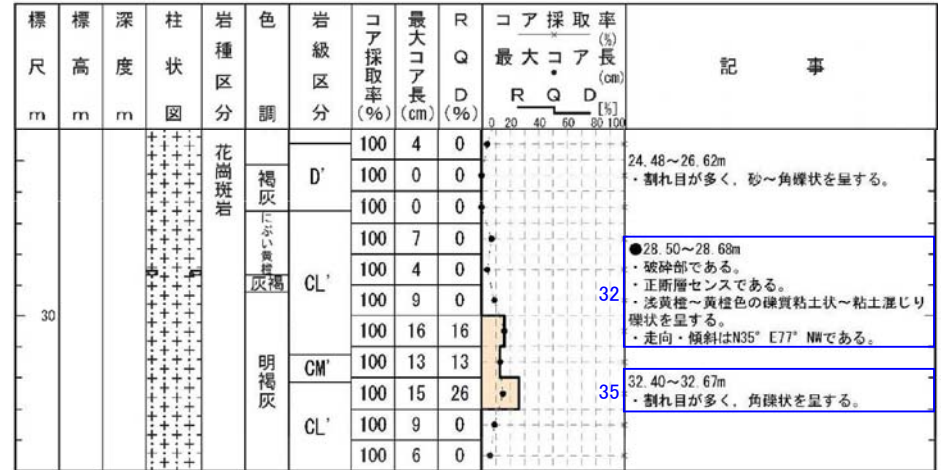


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
25	・硬軟や割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
26	・変質粘土脈を挟在するが、連続性に乏しいことから削除。
27	・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
28, 29	・“コア形状”欄に基づき砂状~角礫状と記載。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。

報告書作成用柱状図 (H26年9月)

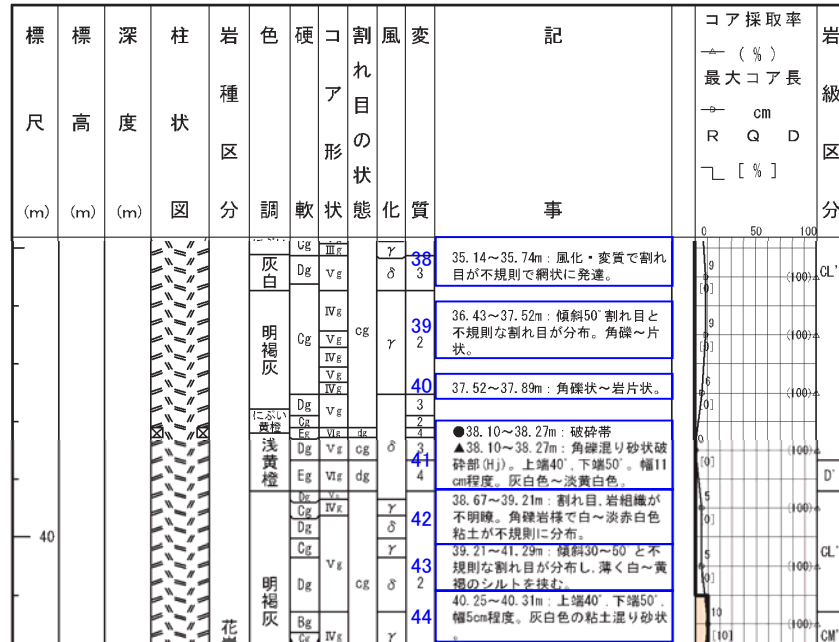


申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
30, 31	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
32	・色調、粒度について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ・下端深度28.66m→28.68m※2、※4 ・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。
33	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
34	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
35	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
36	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
37	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に同方向の劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

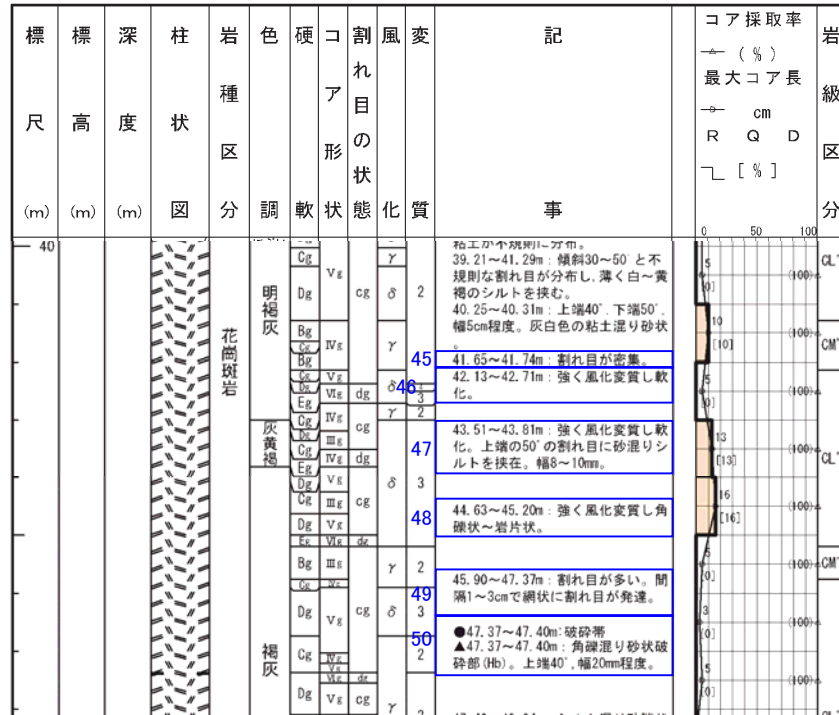


申請書用柱状図

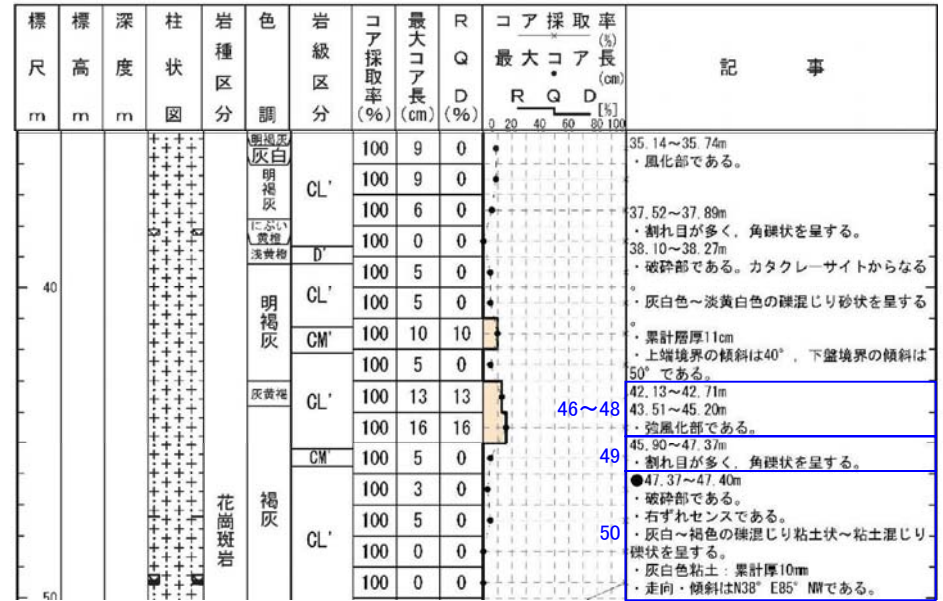


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
38	<ul style="list-style-type: none"> ・風化と熱水変質の両方を受けた区間について、風化による褐色化が顕著であることを踏まえ、風化部として記載。 ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
39	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
40	<ul style="list-style-type: none"> ・“コア形状”の欄に基づき角礫状と記載。
41	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなること記載。
42, 43	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部に粘土やシルトを挟在するが、連続性や直線性に乏しいことから削除。
44	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土混じり砂状を呈するが、連続性に乏しいことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

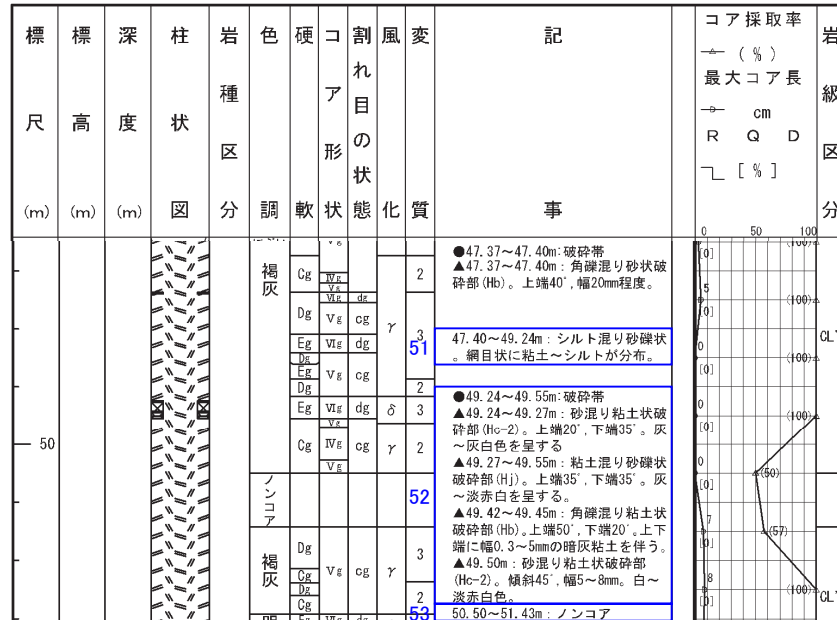


申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
45	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
46～48	・“風化”欄に基づき強風化部と記載。 ・一部に砂混じりシルトを挟在するが、周辺の岩盤に同方向の劣化が認められないことから削除。
49	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
50	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・粒度、色調、粘土の累計幅について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

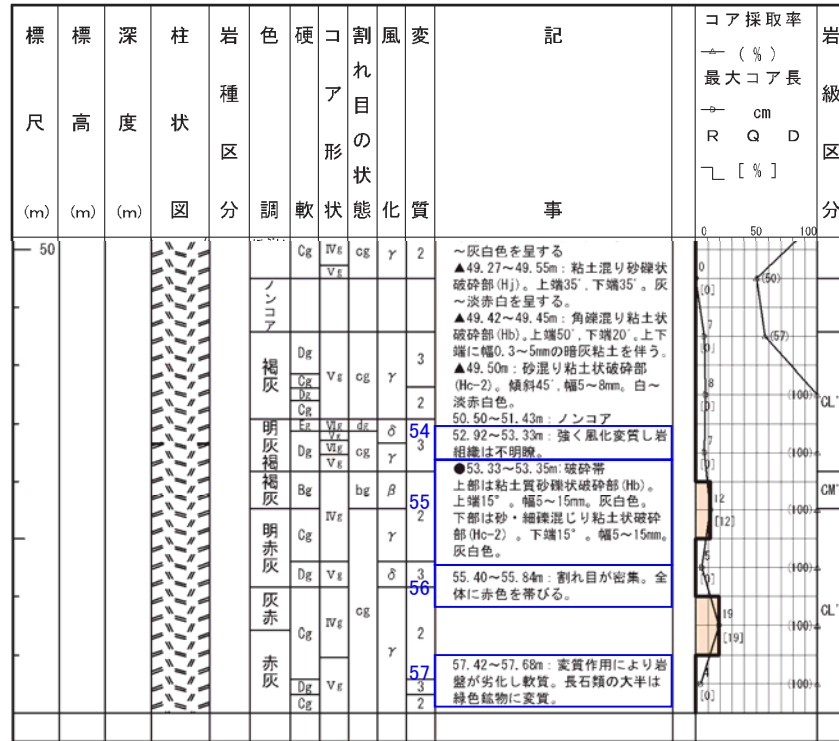


申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
51	・シルト混じり砂礫状を呈し、一部で粘土やシルトを含むが、網目状に分布し系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。
52	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・粒度、色調、粘土の累計幅、見かけ傾斜について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。
53	・ボアホールテレビの解析結果を踏まえ、破砕部がないことを確認と記載。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

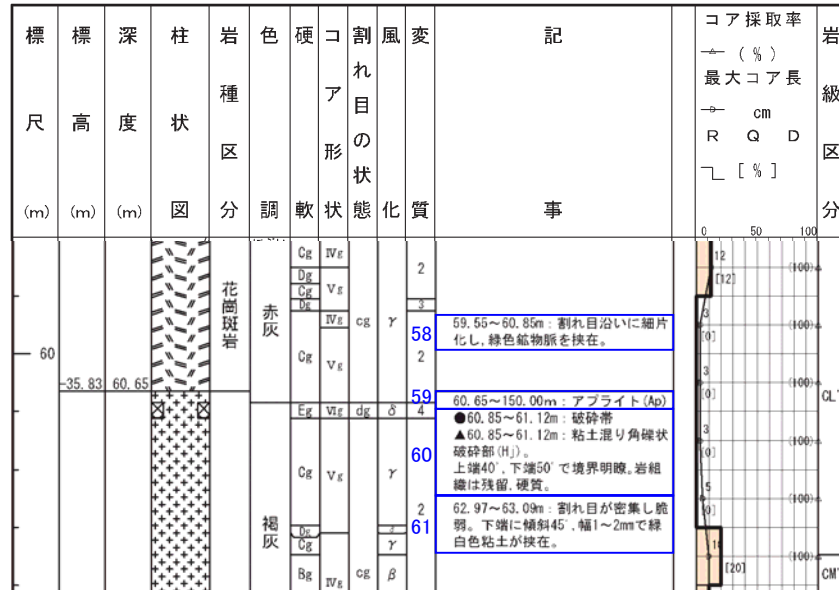


申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
54	・“風化”欄に基づき強風化部と記載。
55	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・破砕部の深度、粒度、色調、粘土の累計厚、見かけ傾斜について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ・礫状部の幅については、申請書では記載しないこととしているため、幅5～15mmとの記載については削除。
56	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・色調については、補足的なものであるため削除。
57	・軟質化については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・変質鉱物については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

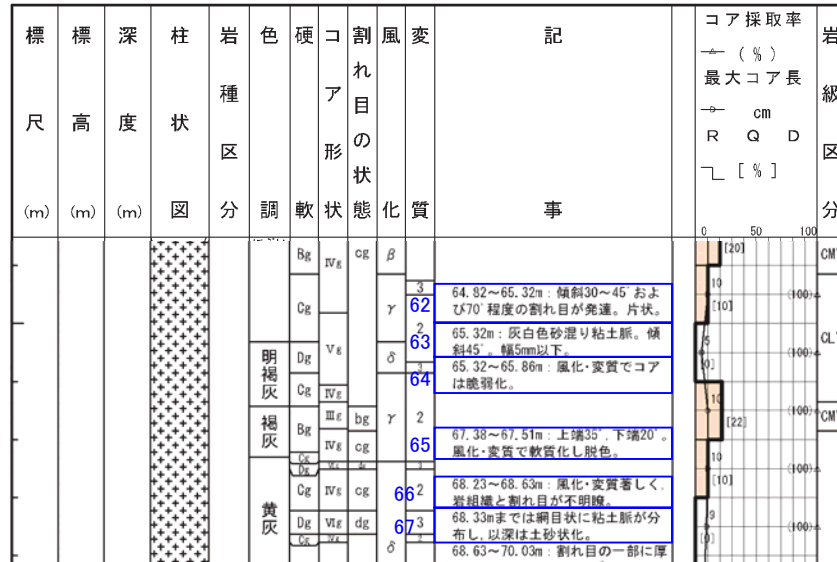


申請書用柱状図

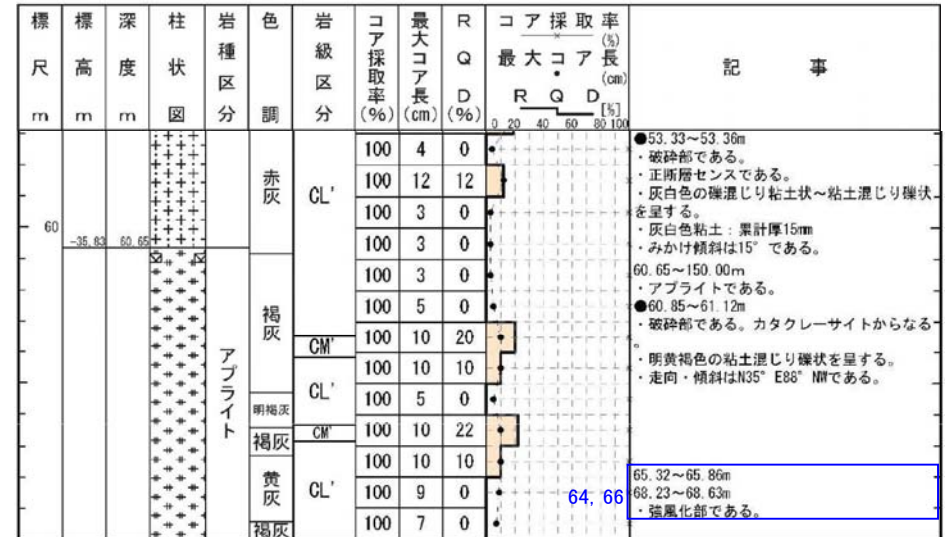


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
58	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
59	<ul style="list-style-type: none"> ・変更なし
60	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・粒度、色調については、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。
61	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部で粘土を挟在するが、粘土の連続性に乏しいことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)



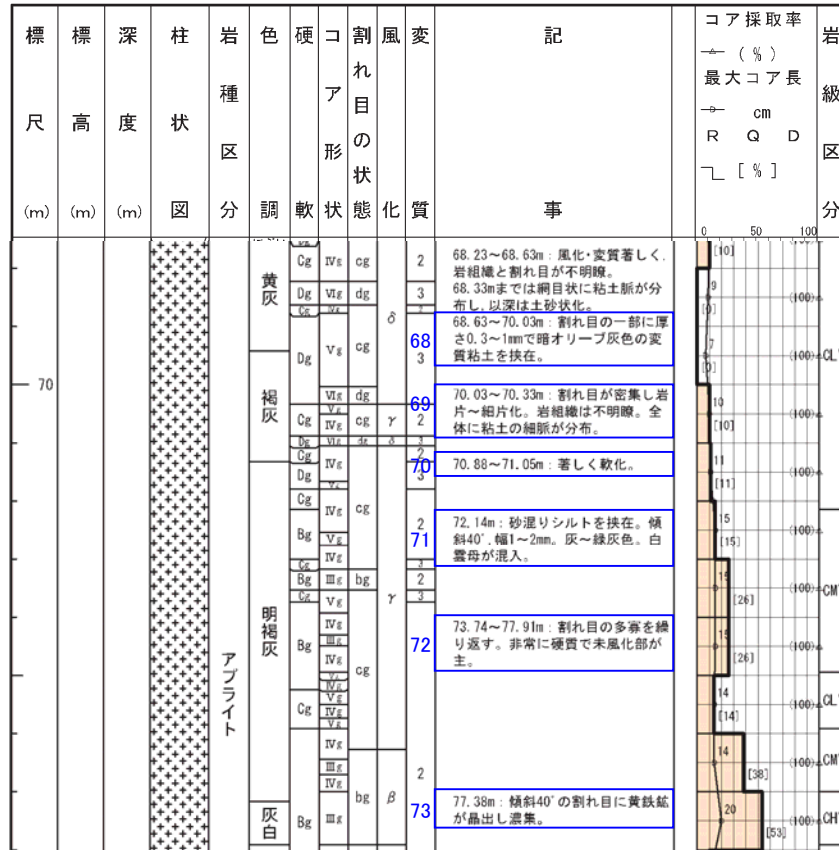
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
62	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
63	・粘土を挟在するが、連続性に乏しいことから削除。
64	・“風化”欄に基づき強風化部と記載。 ・風化と熱水変質の両方を受けた区間について、風化による褐色化が顕著であることを踏まえ、強風化部として記載。
65	・風化、変質に伴う軟質化については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・脱色については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。
66, 67	・風化と熱水変質の両方を受けた区間について、風化による褐色化が顕著であることを踏まえ、強風化部として記載。 ・網目状に粘土脈が分布しているが、系統的でなく連続性や直線性に乏しいことから削除。 ・土砂状の区間については、周囲との境界が一部不明瞭であり、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

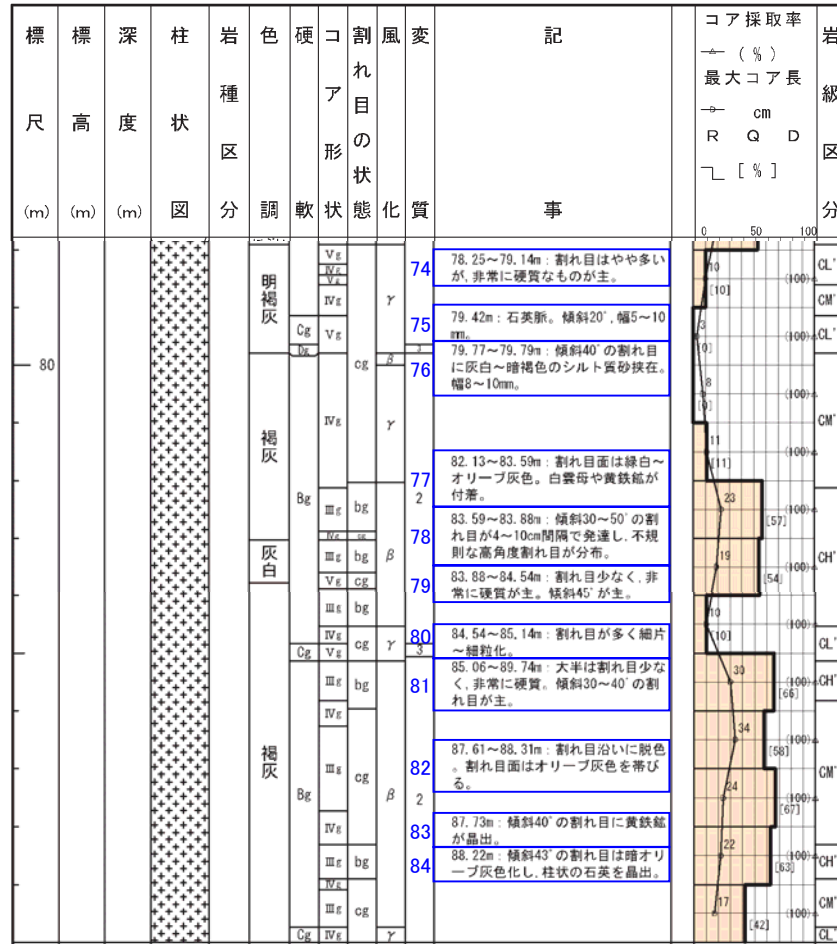
報告書作成用柱状図
(H26年9月)

申請書用柱状図

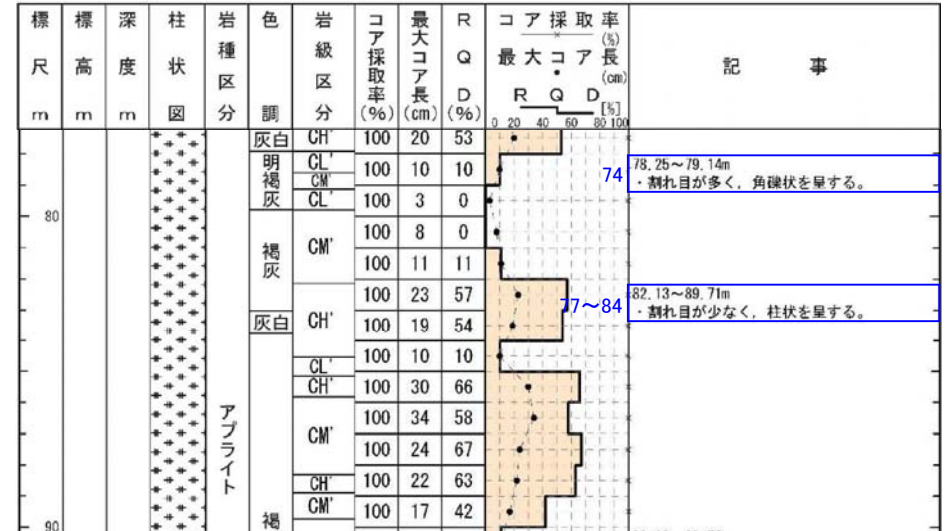


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
68	・一部に粘土を挟むが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
69	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。 ・原岩組織の残留の程度については、劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・一部に粘土を含むが、系統的でなく、直線性や連続性に乏しいことから削除。
70	・軟化については、岩級区分に含めて示しているため削除。
71	・砂混じりシルトを挟むが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
72	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
73	・割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

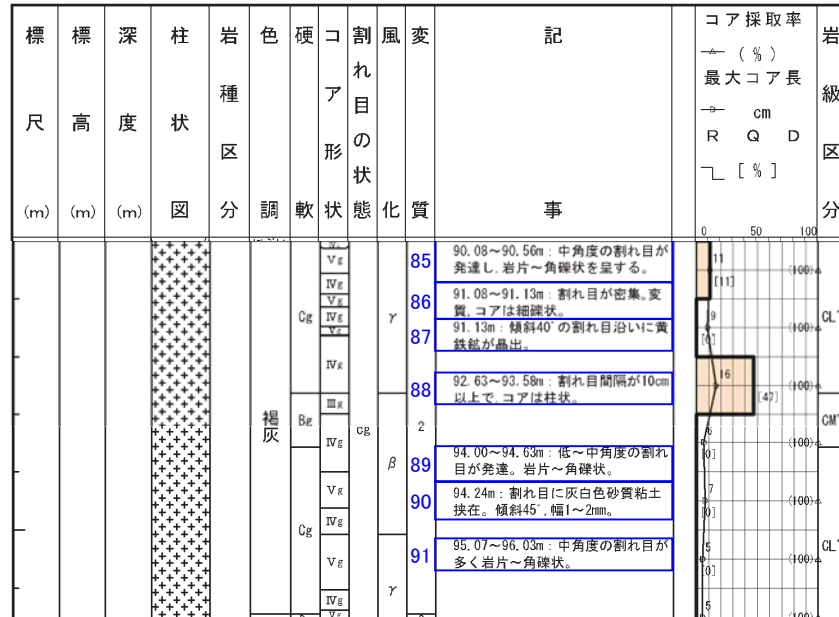


申請書用柱状図

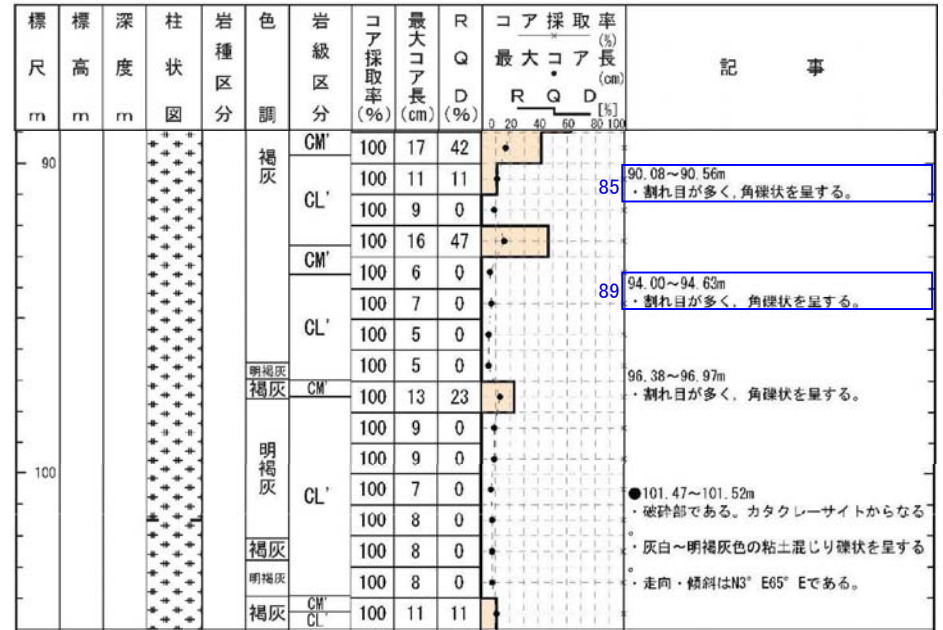


記事	報告書作成用柱状図 (H26年9月) ⇒ 申請書用柱状図
74	<ul style="list-style-type: none"> “コア形状”の欄に基づき角礫状と記載。 硬軟については岩級区分に含めて示しているため削除。
75	<ul style="list-style-type: none"> 鉱物脈については、補足的なものであるため削除。
76	<ul style="list-style-type: none"> シルト質砂を挟在するが、周辺の岩盤に劣化が認められないことから削除。
77~84	<ul style="list-style-type: none"> 下端深度89.74m⇒89.71m※1 硬軟や割れ目が4~10cm間隔で発達との記載については、割れ目の発達程度を、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 割れ目の変色、鉱物晶出、傾斜については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

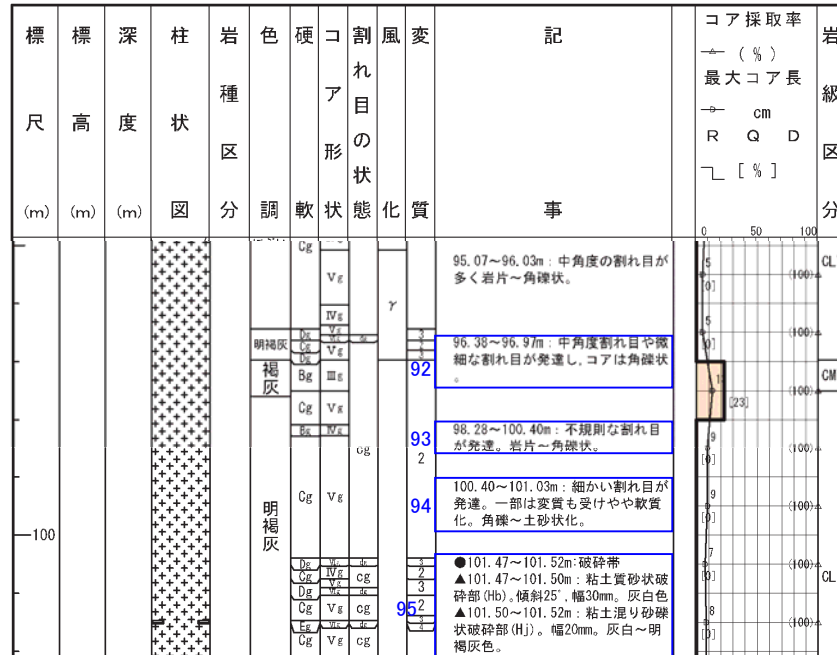


申請書用柱状図

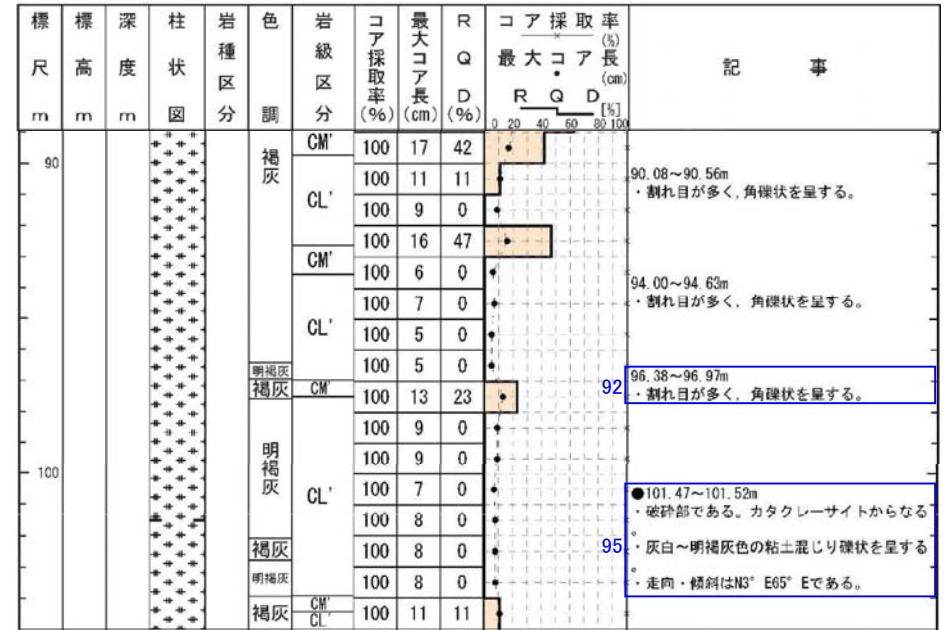


記事	報告書作成用柱状図 (H26年9月) ⇒ 申請書用柱状図
85	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
86, 87	・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
88	・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
89	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
90	・砂質粘土を挟在するが、連続性や直線性に乏しいことから削除。
91	・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)



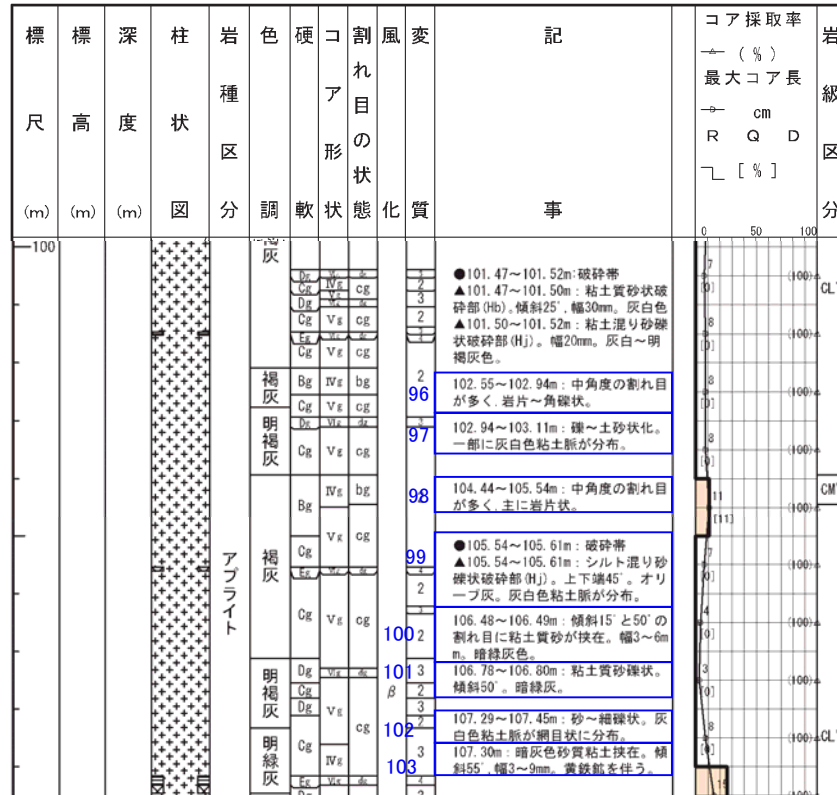
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
92	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
93	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
94	・割れ目の発達、変質程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
95	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・粒度として「粘土質砂状」の記載漏れ。※1 ・粒度、色調については、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

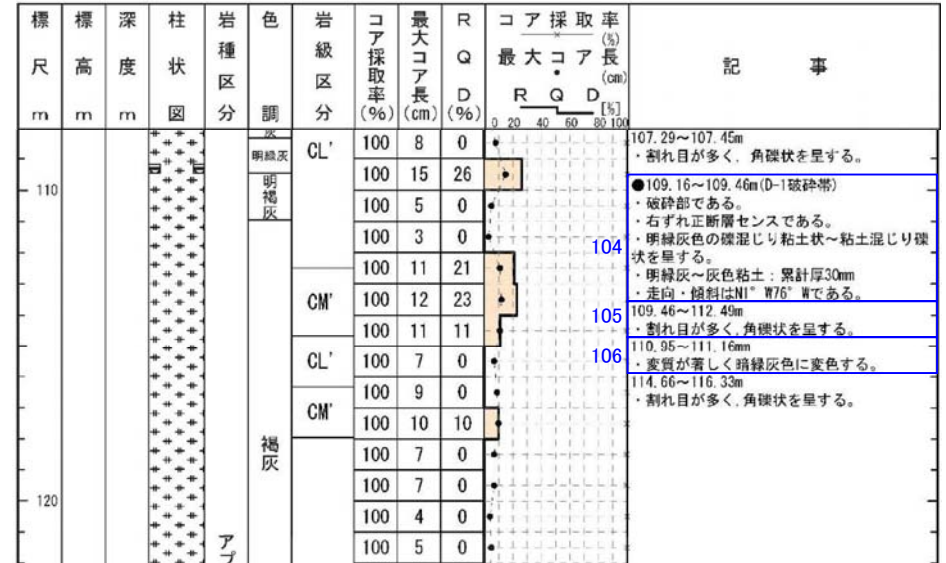
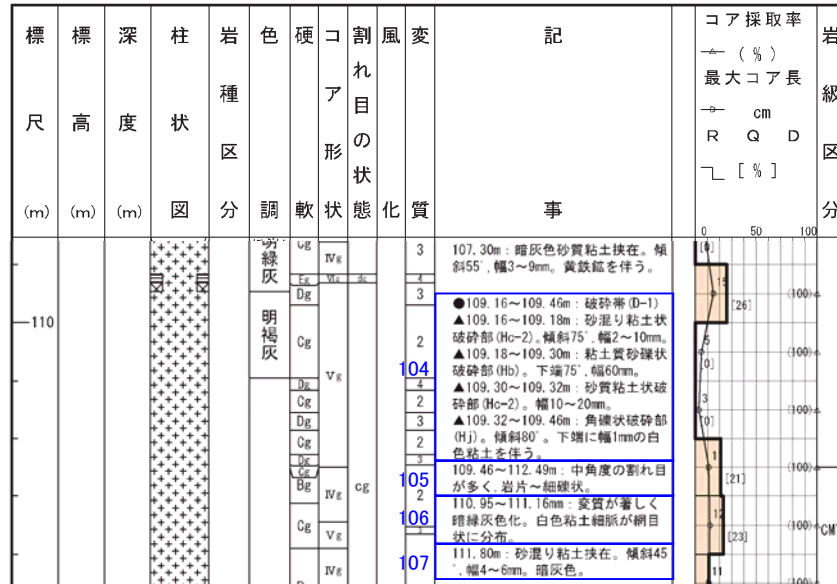
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
96	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
97	・礫~土砂状を呈し一部に粘土を含むが、系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。
98	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
99	・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなること記載。 ・オリブ灰色のシルト混り砂礫状を呈するの記載漏れ。 ^{※1} ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破碎部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。
100	・粘土質砂を挟在するが、連続性や直線性に乏しいことから削除。
101	・粘土質砂礫状を呈するが、連続性や直線性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
102	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。 ・一部に粘土を挟在するが、系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。
103	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図 (H26年9月)

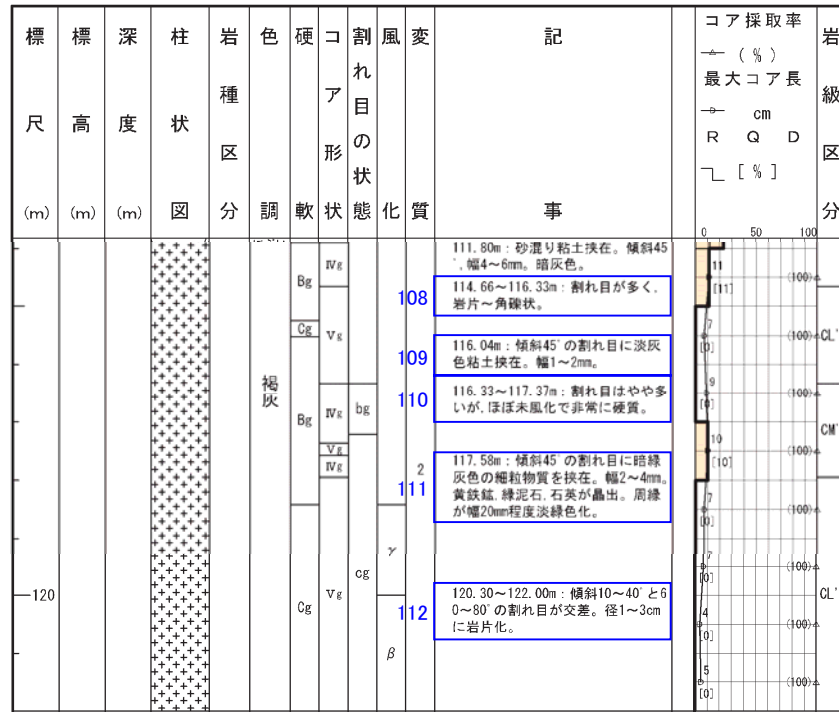
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
104	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 破砕部の深度、粒度、色調、粘土の累計幅について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。
105	<ul style="list-style-type: none"> “コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
106	<ul style="list-style-type: none"> “コア形状”欄に基づき角礫状と記載。 一部に粘土を含むが、系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。 110.95～111.16mmは110.95～111.16mの誤り。※2
107	<ul style="list-style-type: none"> 砂混じり粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

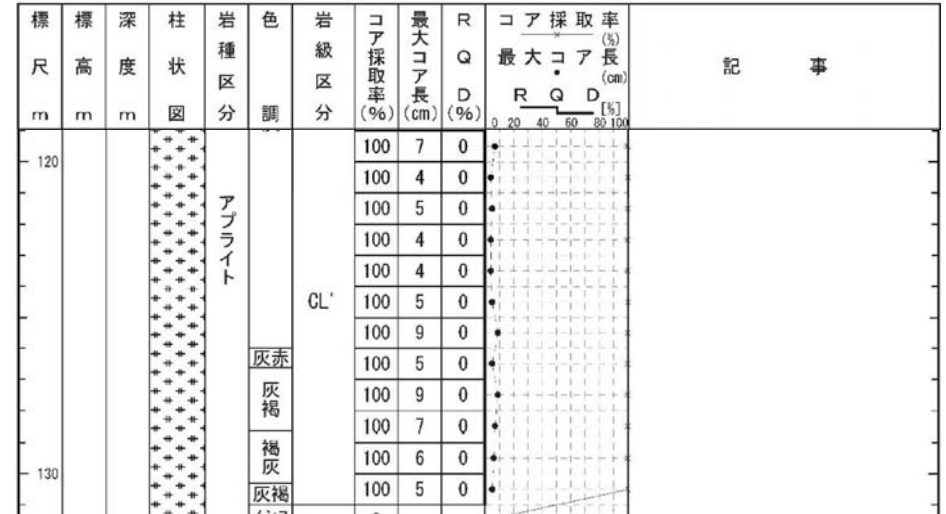
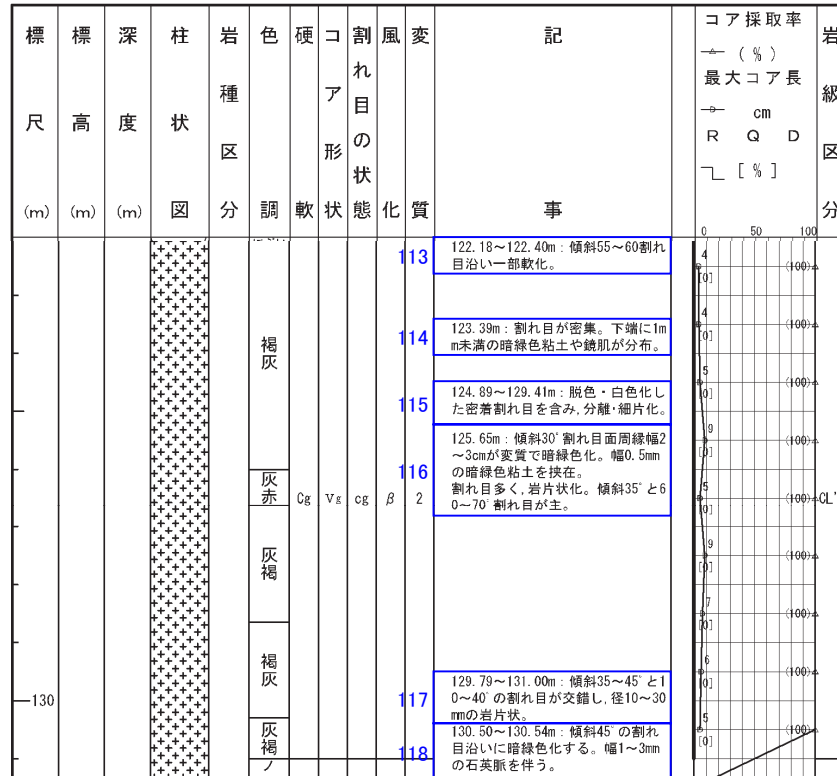
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
108	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
109	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
110	・硬軟や割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
111	・細粒物質を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・割れ目沿いの鉱物晶出、変色については、補足的なものであるため削除。
112	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

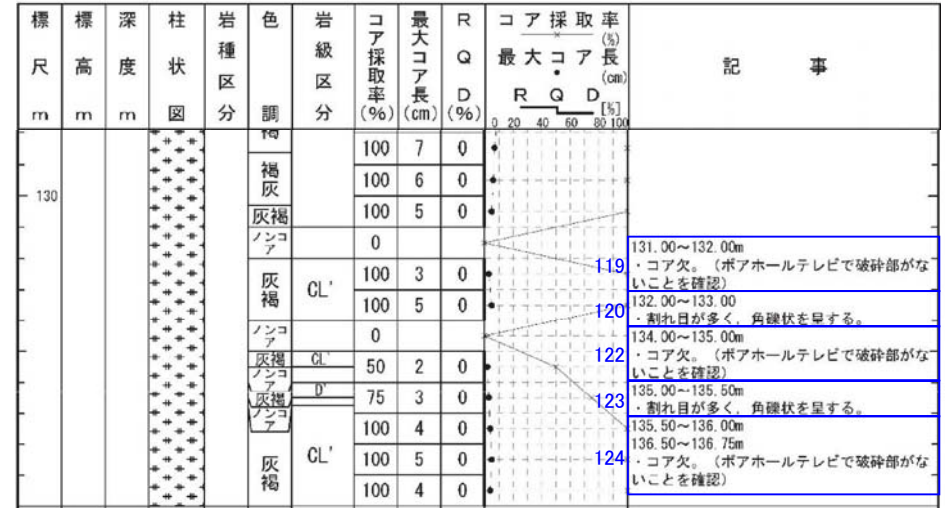
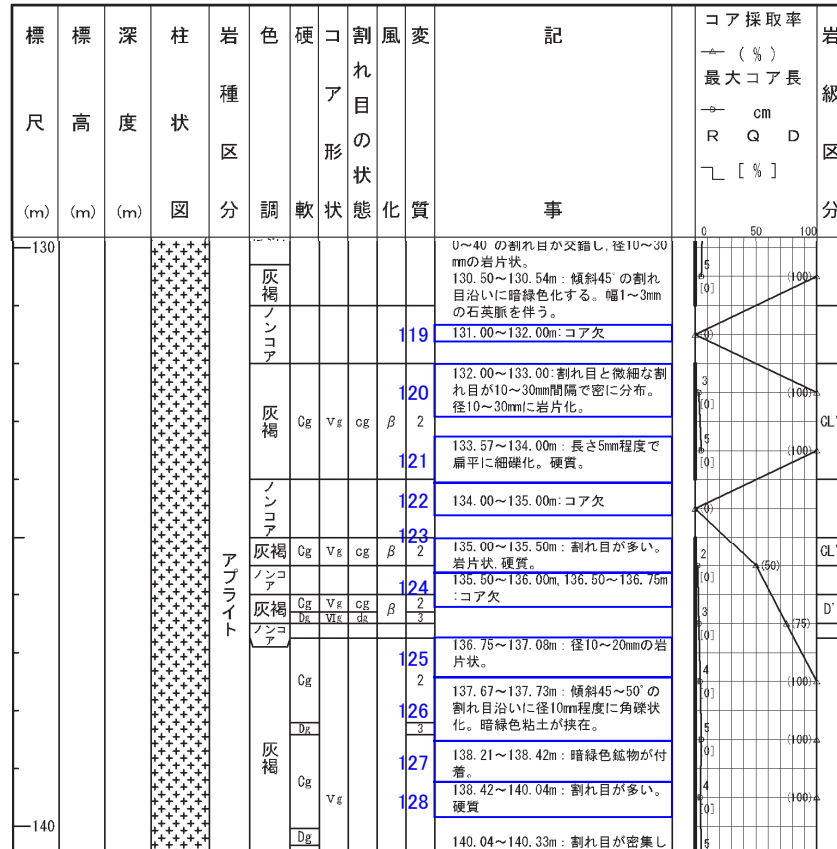
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
113	・割れ目治いに軟質化しているが、連続性や直線性に乏しいことから削除。
114	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部で粘土や鏡肌を伴うが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
115	・変色については、補足的なものであるため削除。 ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
116	・割れ目の発達、変質の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目治いの変色については、補足的なものであるため削除。 ・割れ目が発達し粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
117	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
118	・割れ目治いの変色や鉱物脈については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

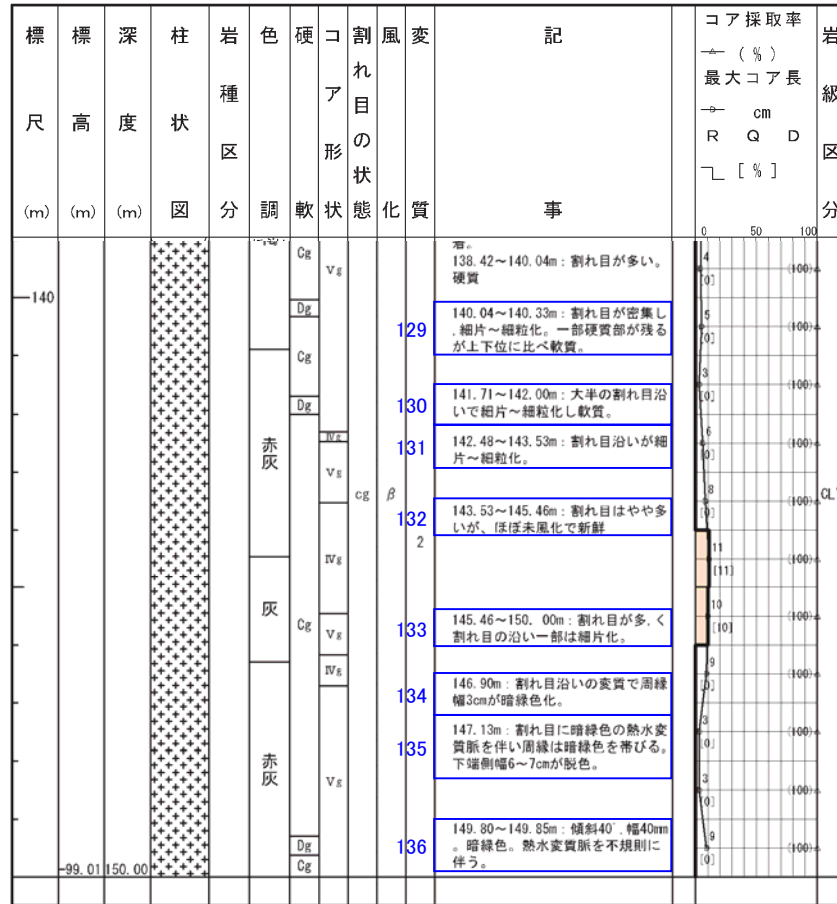
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
119	・ポアホールテレビの解析結果を踏まえ、破砕部がないことを確認と記載。
120	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。 ・132.00~133.00は132.00~133.00mの誤り。※2
121	・細礫化しているが、掘削時の機械割れと判断し削除。
122	・ポアホールテレビの解析結果を踏まえ、破砕部がないことを確認と記載。
123	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
124	・ポアホールテレビの解析結果を踏まえ、破砕部がないことを確認と記載。
125	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
126	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いに角礫状化し粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
127	・鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
128	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
129	・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
130	・割れ目沿いで細片~細粒化しているが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
131	・割れ目沿いで細片~細粒化しているが、掘削時の機械割れと判断し削除。
132	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
133	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
134	・割れ目沿いの変色については、補足的なものであるため削除。
135	・熱水変質脈を伴うが、変色部やその周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
136	・熱水変質脈を伴うが、変色部の周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

H27-B-1

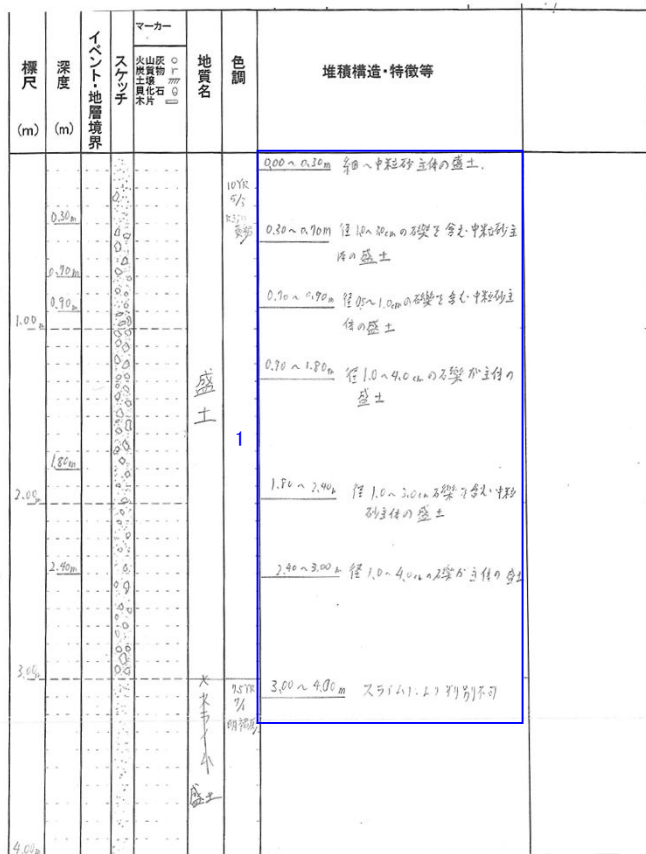
余白

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



スケッチ: 礫はクサリ ● 半クサリ ○ 硬質 ○ 礫種は黒雲母花崗岩Gr. 花崗斑岩Gp. アプライトAp 等
境界 明瞭 — 不明瞭 - - - 亀裂は赤線、角度、赤線等

記事内容
0.00~0.30m 細~中粒砂主体の盛土
0.30~0.70m 径1.0~3.0cmの礫を含む中粒砂主体の盛土
0.70~0.90m 径0.5~1.0cmの礫を含む中粒砂主体の盛土
0.90~1.80m 径1.0~4.0cmの礫が主体の盛土
1.80~2.40m 径1.0~3.0cmの礫を含む中粒砂主体の盛土
2.40~3.00m 径1.0~4.0cmの礫が主体の盛土
3.00~4.00m スライムにより判別不可

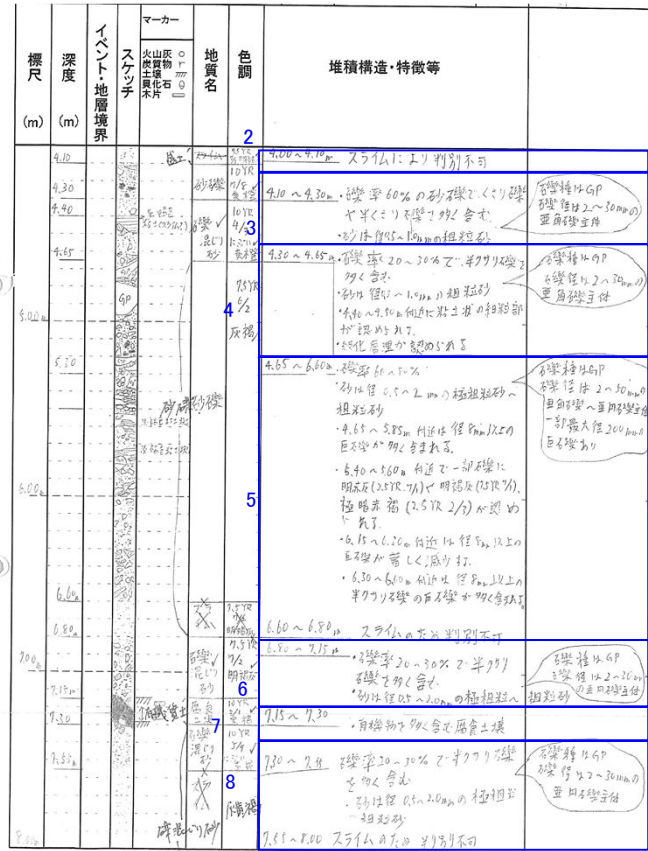
標尺	標高	深度	柱状	岩種	色調	岩級	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	記事
m	m	m	図	盛土	に ぶ い 黄 褐 細粒質	分	100					0.00~4.10m 盛土である。
							100					1, 2
							100					
							100					

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
1, 2	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



スケッチ: 礫はクサリ● 半クサリ○ 硬質○ 礫種は黒雲母花崗岩Gr, 花崗斑岩Gp, アブライトAp 等
境界 明瞭—— 不明瞭---

記事内容
2 4.00~4.10m スライムにより判別不可
4.10~4.30m ・礫率60%の砂礫でくさり礫や半くさり礫を多く含む ・砂は径0.5~1.0mmの粗粒砂 礫種はGP 礫径は2~30mmの垂円礫主体
3 4.30~4.65m ・礫率20~30%で半くさり礫を多く含む ・砂は径0.5~1.0mmの粗粒砂 ・4.40~4.50m付近に粘土状の細粒部が認められる ・級化層理が認められる 礫種はGP 礫径は2~30mmの垂円礫主体
4 4.65~6.60m ・礫率60~80% ・砂は径0.5~2mmの極粗粒砂~粗粒砂 ・4.65~5.85m付近は径8mm以上の巨礫が多く含まれる ・5.40~5.60m付近で一部礫に明赤灰(2.5YR7/1)や明褐灰(7.5YR7/1)、極暗赤褐(2.5YR2/3)が認められる ・6.15~6.30m付近は径8mm以上の巨礫が著しく減少する ・6.30~6.60m付近は径8mm以上の半くさり礫の巨礫が多く含まれる 礫種はGP 礫径は2~50mmの垂円礫から垂円礫主体一部最大径200mmの巨礫あり 6.80~6.80m スライムのため判別不可
5 6.80~7.15m ・礫率20~30%で半くさり礫を多く含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 礫種はGP 礫径は2~30mmの垂円礫主体
6 7.15~7.30 ・有機物を多く含む腐植土壌
7 7.30~7.55 ・礫率20~30%で半くさり礫を多く含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 礫種はGP 礫径は2~30mmの垂円礫主体
8 7.55~8.00 スライムのため判別不可



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
1, 2	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
3	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
4	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
5	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・周囲に比べ含まれる礫が大きく、目立つことから、礫の特徴として、最大礫径を記載。
6	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
7	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・周囲との違いが見かけ上顕著ではないため、周囲と区別できる特徴として、分解途中の有機物を多く含むことを記載。 ・表現の見直し(有機物を多く含む腐植土壌→分解途中の有機物を多く含む)
8, 9	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	イベント 地層境界	スケッチ	地質名	色調	堆積構造・特徴等
	8.60			9		8.60~8.60m スライムのため判別不可
	9.50			9		8.60~9.50m ・礫率30~40%でクサリ礫や半クサリ礫を多く含む ・砂は径0.5~1.0mmの粗粒砂 ・9.25~9.35m付近に黒色土(土壌)に挟まれた砂層が認められる黒色土層砂層 共55°傾斜し全体の幅は10cm(黒色土2cm砂4cm下2cm) ・黒色土層(上下)中に植物片が認められる 礫種GP 礫径2~30mmの垂円礫主体 9.50~10.00m スライムのため判別不可 10.00~10.65m ・礫率70~80%で半クサリ礫を一部含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる 礫種GP一部AP含む 礫径2~100mmの垂角礫~垂鉛礫主体一部最大径200mmの巨礫あり 10.65~11.05m スライムのため判別不可 11.05~11.85m ・礫率50~60%でクサリ礫~半クサリ礫を含む ・砂は0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる 礫種GP 礫径2~100mmの垂角礫~垂円礫主体 11.85~12.00m スライムのため判別不可
	10.00			10		9.50~10.00m スライムのため判別不可
	10.50			10		10.00~10.65m ・礫率70~80%で半クサリ礫を一部含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる 礫種GP一部AP含む 礫径2~100mmの垂角礫~垂鉛礫主体一部最大径200mmの巨礫あり
	11.00			10		10.65~11.05m スライムのため判別不可
	11.20			10		11.05~11.85m ・礫率50~60%でクサリ礫~半クサリ礫を含む ・砂は0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる 礫種GP 礫径2~100mmの垂角礫~垂円礫主体 11.85~12.00m スライムのため判別不可

スケッチ: 礫はクサリ● 半クサリ○ 硬質○ 礫種は黒雲母花崗岩Gr, 花崗斑岩Gp, アブライトAp 等
境界 明瞭—— 不明瞭--- 亀裂は赤線、角度、赤線等

記事内容
9 8.00~8.60m スライムのため判別不可
8.60~9.50m ・礫率30~40%でクサリ礫や半クサリ礫を多く含む ・砂は径0.5~1.0mmの粗粒砂 ・8.75~8.85m付近はスライムのため判別不可 ・9.25~9.35m付近に黒色土(土壌)に挟まれた砂層が認められる黒色土層砂層 共55°傾斜し全体の幅は10cm(黒色土2cm砂4cm下2cm) ・黒色土層(上下)中に植物片が認められる 礫種GP 礫径2~30mmの垂円礫主体 9.50~10.00m スライムのため判別不可 10.00~10.65m ・礫率70~80%で半クサリ礫を一部含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる 礫種GP一部AP含む 礫径2~100mmの垂角礫~垂鉛礫主体一部最大径200mmの巨礫あり 10.65~11.05m スライムのため判別不可 11.05~11.85m ・礫率50~60%でクサリ礫~半クサリ礫を含む ・砂は0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる 礫種GP 礫径2~100mmの垂角礫~垂円礫主体 11.85~12.00m スライムのため判別不可
10 10.00~10.65m ・礫率70~80%で半クサリ礫を一部含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる 礫種GP一部AP含む 礫径2~100mmの垂角礫~垂鉛礫主体一部最大径200mmの巨礫あり

標尺 (m)	深度 (m)	柱状 図	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R Q D (%)	コア採取 率 (%) 最大 コア 長 (cm)	記事
10	8.60					100				最大径200mmの礫を含む。 6.80~7.15m ・確認済み砂である。 7.15~7.30m ・確認済みである。 ・分級途中の有機物を多く含む。 7.30~8.60m ・確認済み砂である。 8.60~12.15m ・砂である。 ・一部有機質土の薄層を含む。
	9.50					100			8, 9	
	10.00					100			10, 11	
	10.50					100				
	11.00					100				
	11.20					100				
	11.80					100				
	12.00					100				

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
9	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
10, 11	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・区間内で特異な色調を示し、目立つことから、有機質土の薄層について記載。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	イベント・地層境界	スケッチ	地質名	色 色 11	堆積構造・特徴等
	12.10					12.00~12.10m スライムのため判別不可
	12.49					12.10~12.50m 礫率5%未満?、クサリ礫を 含む。 砂は0.5~1.0mmの粗粒砂 礫種GP 礫径2~30mmの亜円礫主体 (着岩)
	13.00					
	14.00					
	15.00					

スケッチ: 礫はクサリ ● 半クサリ ○ 硬質 ○ 礫種は黒雲母花崗岩Gr, 花崗斑岩Gp, アブライトAp 等
境界 明瞭 — 不明瞭 - - - 亀裂は赤線, 角度, 条線等

記事内容
11 12.00~12.10m スライムのため判別不可
12 12.10~12.50m 礫率5%未満でクサリ礫を含む 砂は0.5~1.0mmの粗粒砂 礫種GP 礫径2~30mmの亜円礫主体 (着岩)

標尺 m	標高 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色 調	岩 級 区 分	コ ア 採 取 率 (%)	最 大 コ ア 長 (cm)	R Q D (%)	コ ア 採 取 率 (%)	最 大 コ ア 長 (cm)	記 事
10							100					
11							100					
12							100	1	0	10, 11		・有機質土である。 ・分解途中の有機物を多く含む。 ・7.30~8.60m ・堆積しは砂である。 8.60~12.10m ・砂礫である。 ・一部有機質土の層層を含む。 12.10~12.49m ・砂である。 ・少量のくさり礫を含む。 12.49~14.00m ・花崗斑岩である。 ・12.49~14.00m ・炭酸化層である。 ・土砂状を呈するが、層理層は残っている。 ・灰白色の粘土層を挟み、間層である。 17.4m ・割れ目沿いに、幅10~40mm砂状化している。
13							100	11	11	12		
14							100	2	0			
15							100	8	0			
16							100	10	10			
17							100	4	0			
18							100	14	14			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
10, 11	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
12	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・下端深度12.50m→12.49m※3 ・少量含まれる礫が比較的大きく、目立つため、くさり礫について記載。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

層番号	層名	深度 (m)	地質	色	細区分				岩級区分	備考
					砂	粘	礫	その他		
11										
12										
13										12.49~14.84m: D 強く風化した土砂状を呈するが、岩組織は残留する 割れ目は一部消滅しているが、多くは残留している また処々灰白色の粘土が脈状に分布する 割れ目は10~30°の低角度系が主体
14										14.84~24.44m: CL

記事内容
(着岩)
12.49~14.84m: D 強く風化した土砂状を呈するが、岩組織は残留する 割れ目は一部消滅しているが、多くは残留している また処々灰白色の粘土が脈状に分布する 割れ目は10~30°の低角度系が主体
14.84~24.44m: CL

標尺	標高	深度	柱状	岩種	色	岩級区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	コア採取率 (%)			記事
												R	Q	D	
10				砂礫			100								
				砂礫			100								
				砂礫			100	1	0						
				砂礫			100	1	0						
				にふい			100	11	11						
				黄層			100	2	0						
							100	8	0						
							100	10	10						
20							100	4	0						

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
A	・“地質名”欄に基づき、花崗斑岩とその区間を記載。
13	・岩級については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
14	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深さ (m)	層名	地質記号	地質記号	地質記号	細区分				RQD	最大コア長 (cm)	岩級区分	記事
					硬質岩	軟質岩	砂質岩	粘土質岩				
15.00												15 15.00~15.22m 低角度割れ目主体で、一部で割れ目ぞいに風化で砂状化が進んでいる。 15.22~15.44m 硬さCの硬質岩片が残留している。
16.00												16 16.00~17.62m 割れ目周辺に硬さ「E」が部分的に分布する
17.00												17 17.44m 割れ目ぞいに幅10~40m/mが砂状化する
18.00												18 18.10~22.19m 上下に比べ割れ目少なくなる(IV)
19.00												19 18.31m 幅10m/mマンガン鉱染が脈状に分布、黒褐色化する
20.00												20 19.60m 割れ目ぞいに幅10m/m砂状化する

記事内容
15 ・全体に10~30°の低角度割れ目主体で、一部で割れ目ぞいに風化で砂状化が進んでいる。 18.30m以浅では処々マンガン鉱染伴う。 15.22~15.44mは硬さCの硬質岩片が残留している
16 16.00~17.62m間 割れ目周辺に硬さ「E」が部分的に分布する
16.75~16.84m φ30~40 m/mの硬さ「C」の硬質岩片が礫状に分布
17 17.44m 割れ目ぞいに幅10~40m/mが砂状化する
18 18.10~22.19m 上下に比べ割れ目少なくなる(IV)
19 18.31m 幅10m/mマンガン鉱染が脈状に分布、黒褐色化する
20 19.60m 割れ目ぞいに幅10m/m砂状化する

標準	深さ	柱状	岩種	色	岩級	コア	最大	R	コア	記事
尺	度	状	区分	調	区分	採取	コア	Q	採取	
m	m	図				(%)	長	D	率	
							(cm)	(%)	(%)	
						100	1	0		12.10~12.49m ・砂である。 ・少量のくさり礫を含む。 12.49~14.07m ・花崗岩である。 12.49~14.86m ・炭素化部である。 ・土砂を呈するが、黒鉄鉱は残っている。 ・灰白色の結晶を認め、礫状である。
						100	11	11		
						100	2	0		
						100	8	0		
						100	10	10		
						100	4	0		17.44m ・割れ目ぞいに、幅10~40mm砂状化している。
						100	14	14		
						100	7	0		21.16~22.01m ・割れ目ぞいに、一部幅10~30mm砂状化している。
						100	14	14		

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
15	・全体に砂状化が進んでいるとの記載があるが、顕著な劣化部については、個別に別途記載することとしているため削除。 ・マンガンについては、補足的なものであるため削除。
16	・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
17	・変更なし
18	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分に含めて示しているため削除。
19	・マンガンについては、補足的なものであるため削除。
20	・割れ目ぞいに砂状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	地質名	地層	細区分				岩級区分	硬軟度区分	基盤岩コア観察カード 記事・硬軟性状・詳細スケッチ等
				割れ目性状	割れ目の傾斜	割れ目の長さ	割れ目の幅			
21	21.16~22.01								21 21.16~22.01m間 割れ目ぞいに幅10~30m/mで砂状化する部分がある	
22	22.01~22.19								22 22.01~22.19m 硬さ「C」の硬質部が残留	
23	23.05~23.80								23 23.05~23.80m 20-30°と70-90° 割れ目が交差し一部で交差部周辺でφ10m/m程度に細片化。岩片も硬さ「E」まで軟化している	
24	24.16m以深								24 24.16m以深では硬さ「E」も含む全体に脆い岩片多い	
25	24.44~24.71								25 24.44~24.71m D 風化で土砂状を呈する 岩組織や割れ目はほぼ消滅している	
26	24.71~26.62								26 24.71~26.62m: CL	

記事内容
21 21.16~22.01m間 割れ目ぞいに幅10~30m/mで砂状化する部分がある
22 22.01~22.19m 硬さ「C」の硬質部が残留
23 23.05~23.80m 20-30°と70-90° 割れ目が交差し一部で交差部周辺でφ10m/m程度に細片化。岩片も硬さ「E」まで軟化している
24 24.16m以深では硬さ「E」も含む全体に脆い岩片多い
25 24.44~24.71m D 風化で土砂状を呈する 岩組織や割れ目はほぼ消滅している
26 24.71~26.62m: CL

標尺 (m)	深度 (m)	柱状 図	岩種 区分	色	岩級 区分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R Q D (%)	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R Q D (%)	記事
20												17.44m ・割れ目ぞいに、幅10~40m砂状化している。
												21.16~22.01m ・割れ目ぞいに、一部幅10~30m砂状化している。
												23.05~23.80m ・割れ目の交差部で、一部細片状を呈する。
												24.44~24.71m ・土砂状を呈する。
												27.10~27.60m ・砂状を呈する。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
21	・変更なし
22	・局所的に挟まれる硬質な岩片の記載については、補足的なものであるため削除。
23	・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示していることから削除。
24	・硬軟や脆弱さについては、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示していることから削除。
25	・岩級については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
26	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 上4 (m)	深度 (m)	岩種	色	岩級区分	細区分				備考
					割れ目	風化	結晶	その他	
27	26.62								26.62~27.60m: D 27.00m以浅では割れ目や岩組織は残留するが27.10m以深では両者ともほぼ消滅し砂礫状で採取されている。(27.00~27.10mは掘削時に流失)
28	27.60								27.60~28.00m: CL 一部で密着度の低い割れ目やゆる割れ目を含み細片化し易いものも含んでいる

記事内容
27 10~30° 割れ目が主体で割れ目ぞいの一部は砂状化する
28 26m以深では割れ目ぞいの砂状化が更に進む
29 26.62~27.60m: D 27.00m以浅では割れ目や岩組織は残留するが27.10m以深では両者ともほぼ消滅し砂礫状で採取されている。(27.00~27.10mは掘削時に流失)
30 27.60~28.00m: CL 一部で密着度の低い割れ目やゆる割れ目を含み細片化し易いものも含んでいる

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩級区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	記事
30	26.62		花崗斑岩		CL'	100	5	0					24.44~24.71m ・土砂状を呈する。
	27.60		花崗斑岩		D'	100	9	0					27.10~27.60m ・砂礫状を呈する。
	28.00		花崗斑岩		D	100	5	0					28.94~30.74m ・締まった砂礫状を呈する。
	31.05		花崗斑岩		D	100	4	0					31.05~31.23m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
27	・一部割れ目扱いで砂状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
28	・一部割れ目扱いに砂状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
29	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・27.00~27.10mのコア流失区間については、ポアホールテレビによる観察結果から、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないため、コア写真で示すこととし削除。 ・割れ目や原岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
30	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・割れ目の密着状態については、補足的なものであるため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 上(%)	標尺 下(%)	深度 (m)	標高 (m)	地層	細区分				RQD	岩級区分	破砕区分	基盤岩コア観察カード 記事・観察性状・詳細スケッチ等
					割れ目性状	割れ目の性状	風化	崩壊				
0.8	0.8	28.00									31	28.00~28.19m ノンコア(D)
0.5	0.5	28.19									32	28.19~28.61m:CL 割れ目ぞいの一部で砂状化する部分も含む
		28.61									33	28.61~28.68m ノンコア(D)
		28.68									34	28.68~28.84m:CL 割れ目ぞいで砂状化する
2.9	2.9	28.84									35	28.84~30.74m:D 締った砂状化を呈する φ10~30m/m程度の硬さ「D」岩片が礫状に締った砂状部中に分布し砂礫状を呈する 30m以深では岩片量が多くなる

記事内容
31 28.00~28.19m ノンコア(D)
32 28.19~28.61m:CL 割れ目ぞいの一部で砂状化する部分も含む
33 28.61~28.68m ノンコア(D)
34 28.68~28.84m:CL 割れ目ぞいで砂状化する
35 28.84~30.74m:D 締った砂状化を呈する φ10~30m/m程度の硬さ「D」岩片が礫状に締った砂状部中に分布し砂礫状を呈する 30m以深では岩片量が多くなる

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	RQD(%)	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	記事
			花崗斑岩		CL'	100	5	0			24.44~24.71m ・土砂状を呈する。
					D'	100	9	0			27.10~27.60m ・砂礫状を呈する。
					D	100	5	0			28.84~30.74m ・締まった砂礫状を呈する。
					D	100	3	0			31.05~31.23m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
31	・コア欠区間については、ボアホールテレビによる観察結果から、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないため、コア写真で示すこととし削除。
32	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・一部の割れ目沿いに砂状化するが、いずれの砂状化部も連続性に乏しいことから削除。
33	・コア欠区間については、ボアホールテレビによる観察結果から、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないため、コア写真で示すこととし削除。
34	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・割れ目沿いに砂状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
35	・岩級については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・岩片量の傾向については、当該区間の周囲と明確な差異がないため削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深尺 (m)	深度 (m)	地質 分類	地質 記号	相区分				RQD	岩級区分	硬軟区分	記事内容
				割れ目 の 数	割れ目 の 長さ	割れ目 の 傾斜	割れ目 の 形状				
30.17	30.17									36 30.17~30.50mはマンガン鉱染伴う。	
30.30	30.30									37 30.30~30.53m 石英多く晶出(一部は変質による2次石英と推定される)	
30.74	30.74									38 30.74~32.48m: CL 硬さ「D」主体だが部分的に硬さ「E」も含む 上端側の30.74~31.30m間は風化による黄褐色化が進むが軟化は伴わない	
31.05	31.05									39 31.05~31.23m 熱水変質による粘土化変質、珪化変質が著しく、前者では白色系粘土、後者では石英が脈状~晶洞状に晶出している。また、マンガン鉱染と風化も伴ない全体として黄褐色の濃い色調を呈する	
31.70	31.70									40 31.70~32.20m 割れ目ぞいの砂状化が進み「砂混じり岩片状」を呈する。岩片はφ10~30m/m程度の硬さ「D」で残留するが全体にやゝ上下に比べ脆くなる	
32.48	32.48									41 32.48~32.70m: D 岩組織と割れ目はほぼ残留している。	
32.70	32.70									42 32.70~34.54m: CL 割れ目ぞいに厚さ1~2m/m程度で薄く砂状化部をはさむ。一部で砂状化が進行する部分もある。白濁化した長石多い。割れ目は10~20°が主体、一部で70~80° 割れ目と交差	

記事内容
36 30.17~30.50mはマンガン鉱染伴う。
37 30.30~30.53m 石英多く晶出(一部は変質による2次石英と推定される)
38 30.74~32.48m: CL 硬さ「D」主体だが部分的に硬さ「E」も含む 上端側の30.74~31.30m間は風化による黄褐色化が進むが軟化は伴わない
39 31.05~31.23m 熱水変質による粘土化変質、珪化変質が著しく、前者では白色系粘土、後者では石英が脈状~晶洞状に晶出している。また、マンガン鉱染と風化も伴ない全体として黄褐色の濃い色調を呈する
40 31.70~32.20m 割れ目ぞいの砂状化が進み「砂混じり岩片状」を呈する。岩片はφ10~30m/m程度の硬さ「D」で残留するが全体にやゝ上下に比べ脆くなる
41 32.48~32.70m: D 岩組織と割れ目はほぼ残留している。
42 32.70~34.54m: CL 割れ目ぞいに厚さ1~2m/m程度で薄く砂状化部をはさむ。一部で砂状化が進行する部分もある。白濁化した長石多い。割れ目は10~20°が主体、一部で70~80° 割れ目と交差

標尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	D	記事
m	m	m	図	調	分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	
				灰		100	4	0			
				黄褐色	CL'	100	3	0			39 31.05~31.23m ・変質し、白色粘土化している。
				明褐色	D'	100	6	0			40 31.70~32.20m ・割れ目ぞいに砂状化し、砂混じり岩片状を呈する。
				明褐色	CL'	100	14	14			39.40m ・割れ目ぞいに幅20mm砂状化している。 ●34.54~34.56m ・破砕部である。カタクレサイトからなる。
				明褐色	D'	100	9	0			・にぶい黄褐色の粘土混り角礫状を呈する。 ・灰黄褐色砂混じり粘土: 厚さ約4mm ・走向・傾斜はN20° E40° である。 ・傾斜は11°である。 ・上盤境界の傾斜は10°~40°、下盤境界の傾斜は11°である。
				明褐色	CL'	100	7	0			
				明褐色	CL'	100	5	0			
				明褐色	CL'	100	4	0			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
36	・マンガンについては、補足的なものであるため削除。
37	・一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。
38	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・色調については、補足的なものであるため削除。
39	・鉱物の晶出やマンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・色調については、補足的なものであるため削除。
40	・砂混じり岩片状部の岩片の粒径、硬軟については、補足的なものであるため削除。
41	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
42	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・一部で砂状化が見られるが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・長石の白濁化については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。 ・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

標尺 30 (m)	深度 (m)	境界 位置	地層名	色	割れ目 の形状	割れ目 の傾斜	風化	変質	圧縮	その他	備考
											43
											44
											45
											46
											47
											48

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
43 33.17m で15° 割れ目が75° 割れ目を切っている(変位量10 m/m、右ズレ)
44 33.40m 15° 割れ目ぞいに厚さ20 m/m砂状化
45 33.76m 5° 割れ目ぞいに厚さ10 m/m砂状化 34.00m以深、密着度の低いゆる割れ目多くハンマーの打撃で細片化する。また、割れ目も消滅しかかっている 34.03m 40° 幅2~3 m/m石英脈、密着して連続
46 ●34.54~34.59m 破碎帯・主せん断面34.59m(11°) 34.54~34.59mHj 上端10~40° で大きく湾曲、下端11° で直線的に連続φ5m/mGp岩片主体で岩片間は粘土状~砂状で「粘土混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄橙(10YR6/3)厚さ40~50m/m 34.59m: Hc-2
47
48 上下端とも11° で直線的に連続。φ1m/m石英粒を10%程度含む、色調は灰黄褐(10YR5/2)厚さ3~4m/m

申請書用柱状図

標尺 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色	岩 級 区 分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R Q D (%)	最大 コア 長 (cm)	記事
					CL'	100	4	0		31.05~31.23m ・実質し、白色粘土化している。 31.70~32.20m ・割れ目沿いに砂状化し、砂混じり岩片状を呈する。
					CL'	100	6	0		
					CL'	100	14	14		44 33.40m ・割れ目沿いに幅20mm砂状化している。 ●34.54~34.59m ・破碎帯である。カタクレーサイトからなる。
					CL'	100	4	0		
					CL'	100	9	0		46~48 にぶい黄褐色の粘土混り角礫状を呈する。 ・灰黄褐色砂混じり粘土: 累計厚4mm ・歪曲・傾斜はN25° E45° である。 ・傾斜は11° である。 ・上盤境界の傾斜は10° ~40°、下盤境界の傾斜は11° である。
					CL'	100	7	0		
					CL'	100	5	0		
					CL'	100	4	0		

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
43	・15° 割れ目が75° 割れ目を切っているとの記載については、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
44	・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。
45	・割れ目沿いの砂状化については、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・割れ目の密着度、鉱物脈については補足的なものであるため削除。 ・割れ目も消滅しかかっているとの記載については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・石英脈については、補足的なものであるため削除。
46~48	・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混り角礫状) ・φ1mm石英粒を10%程度含むとの記載に基づき、砂混り粘土状と記載。 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破碎部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類については、補足的なものであるため削除。 ・破碎度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 ・境界の直線性については、申請書では記載しないこととしているため削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	境界 位置	地質 記号	細区分				R	Q	D	備考	破砕 区分	基盤岩コア観察カード 記事・破砕性状・詳細スケッチ等
				割れ目 性状	割れ目 径	割れ目 密度	割れ目 方向						
35.59	35.37											49	35.59~35.37m:CL 細片化し易いゆ着割れ目が多い
35.37	37.15											50	35.37~37.15m:D 軟化著しく硬さ「E」主体であるが岩組織や割れ目はほぼ残留している。部分的に硬質岩片を中石的に含む 33-36mコアなし(CTスキャン?)
36.09	36.26											51	36.09~36.26m、36.53~36.62mには硬さ「C」の硬質部が残留する。 36.70m以深でφ10~30m/mの硬さ「D」ないし「C」の岩片が礫状に残留する。
37.15	42.00											52	37.15~42.00m:CL 0~30° 割れ目主体で、割れ目ぞいの一部で砂状化する部分も含む。
37.80												52	37.80m 5° 割れ目ぞい幅10~20m/m砂状化、微細な黄鉄鉱が晶出している。
38.56	38.74											53	38.56~38.74m間、φ20~30mの硬さ「C」岩片が残留する。
39.26	39.70											53	39.26~39.70m 硬さ「C」のφ30~50m/m岩片が多く残留する。
39.90												54	39.90m 幅10~20m/m、0° で淡緑色部が分布(緑泥石濃集部と推定される)。

記事内容
34.59~35.37m:CL 細片化し易いゆ着割れ目が多い
35.37~37.15m:D 軟化著しく硬さ「E」主体であるが岩組織や割れ目はほぼ残留している。部分的に硬質岩片を中石的に含む 33-36mコアなし(CTスキャン?)
36.09~36.26m、36.53~36.62mには硬さ「C」の硬質部が残留する。
36.70m以深でφ10~30m/mの硬さ「D」ないし「C」の岩片が礫状に残留する。
37.15~42.00m:CL 0~30° 割れ目主体で、割れ目ぞいの一部で砂状化する部分も含む。
37.80m 5° 割れ目ぞい幅10~20m/m砂状化、微細な黄鉄鉱が晶出している。
38.56~38.74m間、φ20~30mの硬さ「C」岩片が残留する。
39.26~39.70m 硬さ「C」のφ30~50m/m岩片が多く残留する。
39.90m 幅10~20m/m、0° で淡緑色部が分布(緑泥石濃集部と推定される)。

標尺 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア 採取率 (%)	最大 コア長 (cm)	R (%)	Q (%)	D (%)	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	記事
			CL			100	4	0					●34.54~34.59m ・破砕部である。カタクレサイトからなる。
			D'			100	9	0					・にぶい黄褐色の粘土混り角礫状を呈する。
			CL			100	7	0					・皮黄褐色砂混じり粘土。累計厚4mm
						100	5	0					・走向・傾斜はN25° E40° である。
						100	4	0					・本層境界の傾斜は10° ~40°、下層境界の傾斜は11° である。
													50 52
													35.37~37.15m ・著しく軟質化している。
													37.80m ・割れ目ぞいに、幅10~20mm砂状化している。
													40.32~40.77m ・砂礫状を呈する。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
49	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・割れ目の密着状態については、補足的なものであるため削除。
50	・岩級については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度、中石的に含むとの記載については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
51	・33-36mコアなし(CTスキャンへ)との記載については、破砕部を含むコア箱を観察カード作成に先立ち、分析工程へ回したことをメモした補足的なものであるため削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・割れ目沿いに砂状化するが、いずれの砂状化部も連続性や直線性に乏しいことから削除。
52	・割れ目の傾斜、割れ目ぞいの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
53	・岩片が残留するとの記載については、軟質な区間中にみられる局所的な硬質部の存在を記述したものであり、補足的なものであるため削除。
54	・色調、鉱物の濃集については、補足的なものであるため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 4.0 (m)	深度 (m)	境界 ・異状位置	地質名	色調	細区分				RQD	岩質	岩種区分	軟弱区分	基盤岩コア観察カード 記事・取付状況・詳細スケッチ等
					割れ目の状況	風化	変質	その他					
4.0	39.8												55 40.32~40.77m 割れ目ぞいの砂状化進む。硬さ「D」ないし「C」の岩片がそのなかに残留し、全体として砂礫状を呈し、上下に比べやや脆くなる。
	41.50												56 41.50m 2° 割れ目ぞい幅30m/m淡緑色化(緑泥石化)し、φ0.5~1m/mの微細な黄鉄鉱が晶出している。
	41.95												57 41.95~42.00mはコアチューブ引上時に壊され礫状コア化したもの、硬さは「D」 42.00~42.41m: D 一部の割れ目と岩組織は残留している。
	42.24												58 42.24~42.28m、上端15°、下端18° 割れ目に囲まれ、厚さ30m/m軟質・淡黄色粘土化(変質度4)
	42.41												59 幅1m/m白色粘土脈も処々に点在する。

記事内容
55 40.32~40.77m 割れ目ぞいの砂状化進む。硬さ「D」ないし「C」の岩片がそのなかに残留し、全体として砂礫状を呈し、上下に比べやや脆くなる。
56 41.50m 2° 割れ目ぞい幅30m/m淡緑色化(緑泥石化)し、φ0.5~1m/mの微細な黄鉄鉱が晶出している。
57 41.95~42.00mはコアチューブ引上時に壊され礫状コア化したもの、硬さは「D」 42.00~42.41m: D 一部の割れ目と岩組織は残留している。
58 42.24~42.28m、上端15°、下端18° 割れ目に囲まれ、厚さ30m/m軟質・淡黄色粘土化(変質度4)
59 幅1m/m白色粘土脈も処々に点在する。

標尺 m	深度 m	柱状 m	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R Q D (%)	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	記事
					CL'	100	8	0	55	40.32~40.77m ・砂礫状を呈する。	
						100	4	0	58	42.24~42.28m ・変質し、淡黄色粘土化している。	
						100	2	0		42.41~42.41m ・磁鉄鉱である。 ・右側正断層センスである。 ・にぶい黄褐色の輝石り粘土状一次白色の微 質粘土状ににぶい黄褐色の粘土溜り層状を 呈する。 ・にぶい黄褐色輝石り粘土 累計厚15m ・走向・傾斜はN65° E36° Nである。 ・傾斜は54°である。 ・上層境界の傾斜は63°、下層境界の傾斜は 18°である。	
					D'	100	2	0			
						100	1	0			
						100	1	0			
						100	2	0			
					CL'	100	1	0			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
55	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目沿いに砂状化するが、いずれの砂状化部も連続性や直線性に乏しいことから削除。 砂礫状部を構成する岩片の硬軟については、補足的なものであるため削除。
56	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の傾斜、割れ目沿いの変色、鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
57	<ul style="list-style-type: none"> 礫状コア化については、掘削時の機械割れによるものと判断し削除。 岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 割れ目や岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
58	<ul style="list-style-type: none"> 変質している区間の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。 幅の記載については、区間長を記載しているため削除。
59	<ul style="list-style-type: none"> 一部で粘土脈を挟在するが、いずれも連続性や直線性に乏しいことから削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

層番号	深度	境界・異状位置	地質	細区分					層番号	深度	境界・異状位置	地質	備考
				粘土質	砂質	礫質	砂	礫					
60								60					
61								61					
62								62					
63								63					

基盤岩コア観察カード

記事・破砕性状・詳細スケッチ等

記事内容
60 ●42.41~42.49m:破砕帯(主せん断面42.43m) 42.41~41.43m:Hc-2 上下端各々63°、54°で波打って連続、φ1~2m/m石英粒はわずか、Gp岩片計10%程度含む軟質粘土(ガウジ)、色調はにぶい黄褐(10YR5/3)、厚さ10~15m/m
61 41.43~42.45m:Hb 上端54°、下端35°でいずれも波打って連続、φ1~2m/m石英粒、φ5~10m/m粘土化Gp岩片計20~30%含む軟質な礫質粘土状、色調は灰白色(2.5Y8/2)、厚さ5~10m/m
62 42.45~42.49m:Hj 上端35°、下端18°でいずれも波打って連続、下端の一部はやゝ不明瞭。φ5~20m/mの岩片からなり、岩片の一部は粘土状~砂状。全体的に「粘土混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄橙(10YR6/3)、厚さ40m/m
63 42.49~44.24m:D 著しく軟化するが岩組織と割れ目の一部は残留している。 43.45~43.48m 厚さ25m/m・23°の石英脈が硬質で分布

標尺	高度	柱状	岩種	色	岩級	最大コア長	R	Q	D	最大コア長	記事
m	m	区分	区分	区分	区分	(cm)	(%)	(%)	(%)	(cm)	
					CL'	100	8	0	0		40.32~40.73m ・砂礫状を呈する。 42.24~42.26m ・変質し、淡黄色粘土化している。
					CL'	100	4	0	0		●42.41~42.49m ・破砕帯である。 ・若干不連続面を呈する。 ・にぶい黄褐色の礫混り粘土状~灰白色の礫質粘土状~にぶい黄褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・にぶい黄褐色礫混り粘土 累計厚15m ・走向・傾斜はN65°E36°Nである。 ・傾斜は25°である。 ・上盤境界の傾斜は63°、下盤境界の傾斜は18°である。
					D'	100	2	0	0		●44.34~44.53m ・破砕帯である。カタクレーサイトからなる ・灰黄色の粘土状~灰黄~灰褐~淡黄色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰黄色粘土:累計厚0.8m ・走向・傾斜はN11°E89°Eである。 ・傾斜は35°である。 ・上盤境界の傾斜は5°~13°、下盤境界の傾斜は70°である。
					CL'	100	1	0	0		●44.53~44.53m ・破砕帯である。カタクレーサイトからなる ・灰黄色の粘土状~明赤灰~灰白色の礫質粘土状~にぶい橙~灰白~淡黄色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰黄色粘土:累計厚5m ・走向・傾斜はN66°Eである。 ・傾斜は65°である。 ・上盤境界の傾斜は70°~85°である。
					D'	100	1	0	0		●45.36~45.59m
					CL'	100	1	0	0		
					D'	100	1	0	0		
					CL'	100	2	0	0		
					D'	100	2	0	0		
					CL'	100	8	0	0		

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
60~62	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) Gp岩片計10%程度含むとの記載に基づき、礫混り粘土状と記載。 粘土の累計幅については、最大値を記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
63	<ul style="list-style-type: none"> 岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 割れ目や岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 石英脈については、補足的なものであるため削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深度 (m)	層名	色	状態	備考	細区分				備考
					細区分	細区分	細区分	細区分	
44.24									
44.31									
44.66									
44.68									
44.70									
44.83									

基盤岩コア観察カード	
記事・破砕性状・詳細スケッチ等	
64	44.24~44.31m: Hb 上端、幅1m/灰赤色軟質粘土で5~13°で湾曲して、下端35°で少し湾曲して連続。φ2~3m/m石英粒、φ5~10m/m(最大25m/m) Gp岩片を30%程度含む半固結状の「礫質粘土」、色調は灰黄(2.5Y7/2)、厚さ45~65m/m。
65	44.31m: Hc-1 上下端とも35°で直線的に連続、φ1m/mの石英粒をごくわずか(5%以下)含む軟質な粘土(ガウジ)。色調は灰黄褐色(10YR4/2)、厚さ1~2m/m
66	44.31~44.53m: Hj 上端35°で直線的に、下端70°で波打って連続。φ5m/m前後の粘土化したGp岩片と岩片間は白色軟質の脈状~網状粘土脈からなる粘土混じり岩片状からなる。色調は灰褐(7.5Y6/2)~淡黄(2.5Y8/3)、厚さ140~200m/m
67	44.53~44.66m: Hj 上端70°で波打って、下端65°で直線的に連続。φ5~10m/m粘土化岩片と岩片間の軟質白色粘土(脈状主体)からなり粘土混じり岩片状を呈する。色調はにぶい橙(7.5YR7/4)~灰白色(2.5Y8/2)、厚さ55m/m。
68	44.66~44.68m: Hc-1 55°で上端直線的、下端は一部で波打って連続。φ1m/m石英粒ごく少量(5%以下)含む軟質粘土(ガウジ)、上下端側に主せん断面と同方向に幅1~2m/m、長さ5~10m/mの脈状のマンガニ染染部を伴う。色調は灰黄褐色(10YR4/2)、厚さ4~5m/m
69	44.68~44.70m: Hb 上端65°で一部波打って、下端50~70°で湾曲して連続。φ2m/m石英粒φ3~5m/m粘土化岩片を計20~30%含む半固結状の礫質粘土状を呈する。色調は明赤灰(2.5Y7/2)~灰白色(5YR8/1)、厚さ10~20m/m
70	44.70~44.83m: Hj 上端50~70°、下端75~85°でいずれも湾曲して連続。下端は幅1m/m以下の灰黄褐色(10YR4/2)軟質粘土脈。φ5~10m/m粘土化岩片と岩片間の脈状~網状白色~浅黄色軟質粘土脈からなり、全体として、粘土混じり岩片状を呈する。色調は灰褐(7.5YR6/2)~淡黄色(2.5Y8/3)、厚さ20~50m/m。岩片間の基質部には黒褐色のマンガニ染染部が点在する。

記事内容	
64	●44.24~44.53: 破砕帯(主せん断面44.31m) 44.24~44.31m: Hb 上端、幅1m/灰赤色軟質粘土で5~13°で湾曲して、下端35°で少し湾曲して連続。φ2~3m/m石英粒、φ5~10m/m(最大25m/m) Gp岩片を30%程度含む半固結状の「礫質粘土」、色調は灰黄(2.5Y7/2)、厚さ45~65m/m。
65	44.31m: Hc-1 上下端とも35°で直線的に連続、φ1m/mの石英粒をごくわずか(5%以下)含む軟質な粘土(ガウジ)。色調は灰黄褐色(10YR4/2)、厚さ1~2m/m
66	44.31~44.53m: Hj 上端35°で直線的に、下端70°で波打って連続。φ5m/m前後の粘土化したGp岩片と岩片間は白色軟質の脈状~網状粘土脈からなる粘土混じり岩片状からなる。色調は灰褐(7.5Y6/2)~淡黄(2.5Y8/3)、厚さ140~200m/m
67	●44.53~44.66m: 破砕帯(主せん断面44.66m) 44.53~44.66m: Hj 上端70°で波打って、下端65°で直線的に連続。φ5~10m/m粘土化岩片と岩片間の軟質白色粘土(脈状主体)からなり粘土混じり岩片状を呈する。色調はにぶい橙(7.5YR7/4)~灰白色(2.5Y8/2)、厚さ55m/m。
68	44.66~44.68m: Hc-1 55°で上端直線的、下端は一部で波打って連続。φ1m/m石英粒ごく少量(5%以下)含む軟質粘土(ガウジ)、上下端側に主せん断面と同方向に幅1~2m/m、長さ5~10m/mの脈状のマンガニ染染部を伴う。色調は灰黄褐色(10YR4/2)、厚さ4~5m/m
69	44.68~44.70m: Hb 上端65°で一部波打って、下端50~70°で湾曲して連続。φ2m/m石英粒φ3~5m/m粘土化岩片を計20~30%含む半固結状の礫質粘土状を呈する。色調は明赤灰(2.5Y7/2)~灰白色(5YR8/1)、厚さ10~20m/m
70	44.70~44.83m: Hj 上端50~70°、下端75~85°でいずれも湾曲して連続。下端は幅1m/m以下の灰黄褐色(10YR4/2)軟質粘土脈。φ5~10m/m粘土化岩片と岩片間の脈状~網状白色~浅黄色軟質粘土脈からなり、全体として、粘土混じり岩片状を呈する。色調は灰褐(7.5YR6/2)~淡黄色(2.5Y8/3)、厚さ20~50m/m。岩片間の基質部には黒褐色のマンガニ染染部が点在する。

標高	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	R	最大コア長	コア採取率	最大コア長	記事
m	m	m	図	調	区分	(%)	(cm)	D	(%)	R	Q	D
	44.24			明赤灰	CL	100	8	0				40.32~42.7m ・砂礫状を呈する。 42.24~42.26m ・変質し、淡黄色粘土化している。
	44.31			にぶい橙	D	100	2	0				●42.41~42.49m ・破砕部である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・にぶい黄褐色の硬質粘土状~灰白色の硬質粘土状~にぶい黄褐色の粘土混じり層状を呈する。
	44.66			にぶい橙	D	100	1	0				・にぶい黄褐色硬質粘土 累計厚15mm ・走向・傾斜はN65°Eである。 ・上盤境界の傾斜は55°。下盤境界の傾斜は15°である。
	44.68			にぶい橙	D	100	2	0				●44.24~44.53m ・破砕部である。カタクレーサイトからなる ・灰黄褐色の粘土状~灰黄~灰褐~淡黄色の粘土混じり層状を呈する。
	44.70			明赤灰	D	100	5	0				・灰黄褐色粘土 累計厚2m ・走向・傾斜はN65°Eである。 ・傾斜は65°である。 ・上盤境界の傾斜は55°~13°。下盤境界の傾斜は70°である。
	44.83			にぶい橙	D	100	3	0				●44.33~44.53m ・破砕部である。カタクレーサイトからなる ・灰黄褐色の粘土状~明赤灰~灰白色の硬質粘土状~にぶい橙~灰白~淡黄色の粘土混じり層状を呈する。
	44.83			にぶい橙	D	100	6	0				・灰黄褐色粘土 累計厚5mm ・走向・傾斜はN65°Eである。 ・傾斜は65°である。 ・上盤境界の傾斜は70°。下盤境界の傾斜は75°~85°である。
	44.83			にぶい橙	D	100	5	0				●45.36~45.38m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
64~66	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなること記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
67~70	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなること記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率、マンガニについては、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	崩壊・亀裂位置	柱状図	色	細区分		R	Q	D	最大コア長 (cm)	R	Q	D	最大コア長 (cm)	R	Q	D	最大コア長 (cm)	
					崩壊	亀裂													
46	45.36																		
	45.39																		
	45.39																		
	46.12																		

記事内容	
71	44.83～45.36m: D
72	●45.36～45.39m: 破碎帯(主せん断面45.39m)
	45.36～45.39: Hj
73	<p>上端や不明瞭で62°で波打って、下端は65°で直線的に連続。φ5m/前後の細かい岩片からなり、岩片間の一部が粘土化。全体的に「粘土混じり岩片状」を呈する。色調はにぶい橙(7.5YR7/3)、厚さ5～10m/m。</p> <p>45.39m: Hc-2</p> <p>上下端とも65°で直線的に連続。一部で厚さ1m/mの2本のガウジに分枝～取れんする。φ1～2m/m石英粒5～10%含む軟質粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(7.5YR6/2)、厚さ2m/m</p>
74	<p>45.39～46.12m: D</p> <p>幅1m/前後の軟質な白色粘土脈が多い。</p>

標尺 (m)	深度 (m)	柱状図	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア 採取率 (%)	最大 コア長 (cm)	R (%)	Q (%)	D (%)	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	記事
50					D'	100	4	0					●44.74～44.53m ・破碎部である。カタクレーサイトからなる
					CL'	100	6	0					・灰褐色の粘土状～灰黄～灰褐～淡黄色の粘土混じり礫状を呈する。
					D'	100	5	0					・灰褐色粘土・累計厚2m ・走向・傾斜はN41°E69°である。 ・傾斜は35°である。
					D'	100	4	0					・上盤境界の傾斜は5°～13°、下盤境界の傾斜は70°である。
					CL'	100	3	0					●44.53～44.53m ・破碎部である。カタクレーサイトからなる
					D'	100	5	0					・灰褐色の粘土状～明赤灰～灰白色の硬質粘土状～にぶい橙～灰白～淡黄色の粘土混じり礫状を呈する。
					CL'	100	6	0					・灰褐色粘土・累計厚5m ・走向・傾斜はN66°Eである。 ・傾斜は65°である。
					CL'	100	8	0					・上盤境界の傾斜は70°、下盤境界の傾斜は70°～85°である。
60					D'	100	13	13					●45.36～45.39m ・破碎部である。カタクレーサイトからなる
					CM'	100	10	10					・灰褐色の砂質粘土状～にぶい橙色の粘土混じり礫状を呈する。
					CL'	100	10	10					・灰褐色砂質粘土・2m ・走向・傾斜はN43°E70°である。 ・傾斜は65°である。
					CM'	100	16	16					・上盤境界の傾斜は62°、下盤境界の傾斜は65°である。
					CL'	100	9	9					

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
71	・岩級とその区間については“岩級区分”欄に示しているため削除。
72, 73	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・φ1～2mmの石英粒5～10%含むとの記載があるが、より径の小さい砂粒子も含むため、砂質粘土状と記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破碎部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破碎度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
74	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・粘土脈については、いずれも直線性や連続性に乏しいことから削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	境界・層位位置	傾斜	細区分				RQD	岩質	基盤岩コア観察カード 記号・破砕性状・詳細スケッチ等
				粘土質岩片	粘土質岩片	粘土質岩片	粘土質岩片			
47									75 ●46.12~46.17m: 破砕帯(主せん断面46.17m) 46.12~46.17m: HJ 上端31°でやや不明瞭ながら直線的に、下端35~70°で大きく湾曲して連続。 φ5~10m/m粘土化岩片が粘土化基質中に礫状に分布。全体に「粘土質岩片状」呈する。主せん断面と平行して細かい割れ目や白色粘土細脈「厚さ1m/m」が分布。色調は淡黄色(2.5Y8/3)、厚さ35m/m	
									76 46.17m: Hc-2 上下端とも35~70°で大きく湾曲して連続。φ1~2m/m石英粒、φ3m/m粘土化岩片を20~30%含む半固結状の粘土(ガウジ)、色調は黒褐(10YR3/1)、厚さ2~10m/m	
									77 46.17~47.40m: D 46.73m、55°せん断割れ目: 幅1m/m赤褐色粘土伴う。	
									78 ●47.40~47.51m: 破砕帯(主せん断面47.40m) 47.40m: Hc-1 上下端とも58°で直線的に連続。φ1m/m石英粒を5%程度含むやや軟弱な粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(7.5YR5/2)、厚さ1~2m/m	
									79 47.40~47.51m: Hb 上端58°、下端55°でいずれも直線的に連続。φ2~3m/m石英粒を20~30%含む軟質な「礫質粘土状」を呈する。岩片は認められない。 色調は黄褐色(10YR5/6)、厚さ70m/m	

記事内容
75 ●46.12~46.17m: 破砕帯(主せん断面46.17m) 46.12~46.17m: HJ 上端31°でやや不明瞭ながら直線的に、下端35~70°で大きく湾曲して連続。 φ5~10m/m粘土化岩片が粘土化基質中に礫状に分布。全体に「粘土質岩片状」呈する。主せん断面と平行して細かい割れ目や白色粘土細脈「厚さ1m/m」が分布。色調は淡黄色(2.5Y8/3)、厚さ35m/m
76 46.17m: Hc-2 上下端とも35~70°で大きく湾曲して連続。φ1~2m/m石英粒、φ3m/m粘土化岩片を20~30%含む半固結状の粘土(ガウジ)、色調は黒褐(10YR3/1)、厚さ2~10m/m
77 46.17~47.40m: D 46.73m、55°せん断割れ目: 幅1m/m赤褐色粘土伴う。
78 ●47.40~47.51m: 破砕帯(主せん断面47.40m) 47.40m: Hc-1 上下端とも58°で直線的に連続。φ1m/m石英粒を5%程度含むやや軟弱な粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(7.5YR5/2)、厚さ1~2m/m
79 47.40~47.51m: Hb 上端58°、下端55°でいずれも直線的に連続。φ2~3m/m石英粒を20~30%含む軟質な「礫質粘土状」を呈する。岩片は認められない。 色調は黄褐色(10YR5/6)、厚さ70m/m

標尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(㎝)	R	Q	最大コア率(%)	記事
70											●46.12~46.17m ・破砕部である。カタクレーサイトからなる ・黒褐色の硬質じり粘土状～淡黄色の粘土混じり礫状を呈する。 ・黒褐色硬質じり粘土: 累計厚10m ・走向・傾斜はN47°E 70°である。 ・傾斜は35°~70°である。 ・上盤境界の傾斜は31°、下盤境界の傾斜は25°~70°である。
											●47.40~47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の粘土状～黄褐色の硬質粘土状を呈する。 ・灰褐色粘土: 2m ・走向・傾斜はN21°E 84°Eである。 ・傾斜は58°である。 ・上盤境界の傾斜は58°、下盤境界の傾斜は65°である。
											●49.17~49.20m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・明黄褐色の砂質じり粘土状～灰白～明黄褐色の硬質粘土～粘土混じり礫状を呈する。 ・明黄褐色砂質じり粘土: 累計厚15m ・走向・傾斜はN47°E 45°である。 ・傾斜は35°~70°である。 ・上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23°である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
75, 76	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・表現の見直し(粘土質岩片状→粘土混じり礫状) ・φ1~2mmの石英粒、φ3mm粘土化岩片を20~30%含むとの記載があるが、粘土化岩片と基質の粘土との境界が不明瞭であることから、礫混じり粘土状と記載。 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
77	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級とその区間については「岩級区分」欄に示しているため削除。 ・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 ・粘土を挟在するが、直線性に乏しいことから削除。 ・せん断割れ目については、粘土の連続性に乏しく、変位基準も不明瞭で、周囲の割れ目と差異が認められないことから削除。
78, 79	<ul style="list-style-type: none"> ・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hb区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

深度 (m)	深度 (m)	境界 番号	地層 名	色	細区分				R	Q	D	C	備考
					割れ目 の形状	割れ目 の長さ	割れ目 の角度	割れ目 の方向					
47.51	47.80												80
47.80	48.80												81
48.80	49.17												82
49.17	49.22												83

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
47.51～47.80m: D 岩組織と多くの割れ目は消滅せずに残留している。 砂、マンガンなどの挟在物をもつ割れ目が多い。
47.80～48.80m: CL 20～30° 割れ目ぞいに著しく軟化した硬さ「E」も処々に分布する。 白色粘土細脈やマンガン鉱染を伴う。
48.80～49.17m: D 著しく軟化するも岩組織と割れ目の一部が残留している。 ・49.06mに62° のせん断割れ目(sj)が分布。挟在物のない平滑な割れ目。
●49.17～49.27m: 破砕帯(主せん断面49.20m)
49.17～49.20m: Hb 上端25° で波打って、下端30～36° で湾曲して連続。φ2～3m/m石英粒、 φ5m/m粘土化岩片を計20～30%含む軟質な「礫質粘土状」呈する。 色調は灰白(2.5Y8/2)～明黄褐(10YR7/6)、厚さ10～25m/m。
49.20～49.22m: Hc-2 上端30～36°、下端35～60° でいずれも湾曲して連続。φ1～2m/m石英粒を 5～10%含む軟質粘土(ガウジ)、色調は明黄褐色(10YR7/6)、厚さ7～15m/m
49.22～49.27m: Hj 上端35～60° で湾曲し、下端23° で波打って連続。φ2～4m/m石英粒、φ5 ～10m/m岩片(硬さ「D」「C」と岩片間の粘土～砂状部からなり、全体として 「粘土-砂混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄橙(10YR6/4)、厚さ50m/m (コア長)

申請書用柱状図

標尺	高さ	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	最大コア長	記事
m	m	m	区分	調	区分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(cm)	
				灰褐色		100	6	0			●47.40～47.51m ・破砕部である。 ・下部層に於ける。 ・灰褐色の粘土状～黄褐色の礫質粘土状を呈する。
				灰褐色		100	8	0			・灰褐色粘土 2m ・走向・傾斜は約1° E34° Eである。 ・傾斜は55° である。 ・上層境界の傾斜は58°、下層境界の傾斜は59° である。
				灰褐色		100	3	0			●49.11～49.20m ・破砕部である。 ・右ずれセンスである。 ・明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の礫質粘土～粘土混じり層状を呈する。 ・明黄褐色砂混じり粘土、累計厚15m ・走向・傾斜は約4° E45° Eである。 ・傾斜は30° ～36° である。 ・上層境界の傾斜は25°、下層境界の傾斜は27° である。
				灰褐色		100	4	0			81～83
				灰褐色		100	5	0			
				灰褐色		100	7	0			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
80	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級とその区間については「岩級区分」欄に示しているため削除。 ・割れ目や岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・一部で砂や粘土を挟在するが、いずれも連続性に乏しいことから削除。 ・割れ目の傾斜、マンガン、割れ目の挟在物の有無については、補足的なものであるため削除。 ・せん断割れ目との記載があるが、割れ目が不明瞭で、周囲の岩盤の劣化に系統性も認められないことから削除。
81～83	<ul style="list-style-type: none"> ・深度49.17～49.27m→49.17～49.20m(ただし、申請後の再観察で49.17～49.22mが正。*2深度の見直しに伴い、下端境界の傾斜も修正。*4) ・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・表現の見直し(粘土・砂混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・φ1～2mm石英粒を5～10%含むとの記載に基づき、砂混じり粘土状と記載。 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、破砕部の硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深度 (m)	層名	地層の 色調	割れ目 形状	細区分				備考
				割れ目 形状	風化	変質	備考	
49.27								
49.40								
51.06								
51.24								
51.63								
51.94								
52.16								
52.32								
52.50								

記事内容
49.27～49.40m: D 20～30° 割れ目が多く残留するが割れ目ぞいに風化・砂状化が進む
49.40～51.94m: CL 硬さ「C」の岩片が主体で一部に軟化した「D」も含む、30°前後の割れ目が主体で、一部でこれに直交～斜交する60°前後の割れ目が分布 51.06m以深では風化と変質は軽微となる。硬さ「B」と堅硬な岩片も混える。
51.06～51.94m 割れ目や密着度が低いゆ着割れ目が多い、ゆ着割れ目も褐色化している。
51.24～51.62mでは割れ目挟雑物は殆んど分布しない。 これ以外では割れ目ぞいに1m/m砂状化するものが多い。 処々に幅0.5～1m/mで密着した石英脈が分布。
51.63m、15° 割れ目ぞい厚さ10m/mが砂状化
51.94～52.72m: D 著しく軟化するが岩組織と割れ目は残留している。 52.16m、23° 厚さ30m/mの軟質褐色粘土脈、上端にマンガン伴う。 52.32～52.50mは硬さ「D」が主体。

標尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R (%)	Q (%)	D (%)	最大コア長 (cm)	記事
	49.27		灰褐色		D	100	6	0				●47.40～47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の粘土状～黄褐色の硬質粘土状を呈する。
	49.40		灰褐色		D	100	8	0				・灰褐色の粘土状～黄褐色の硬質粘土状を呈する。 ・傾斜は25°である。
	51.06		灰褐色		D	100	6	0				・灰褐色粘土 2mm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・上層境界の傾斜は58°、下層境界の傾斜は55°である。
	51.24		灰褐色		D	100	3	0				●49.17～49.20m ・破砕部である。 ・正断層センスである。
	51.63		灰褐色		D	100	4	0				・明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の硬質粘土～粘土混じり層状を呈する。 ・明黄褐色砂混じり粘土 累計厚15mm ・走向・傾斜はN47° E45° Eである。 ・傾斜は29°～36°である。
	51.94		灰褐色		D	100	5	0				・上層境界の傾斜は25°、下層境界の傾斜は23°である。
	52.16		灰褐色		D	100	7	0				●47.72～52.81m ・破砕部である。カタクレサイトからなる。 ・灰白色の硬質粘土状～明褐色の粘土混じり層状を呈する。 ・灰白色硬質粘土状、累計厚10mm ・走向・傾斜はN15° E82° Eである。 ・傾斜は14°である。
	52.32		灰褐色		D	100	1	0				・上層境界の傾斜は56°、下層境界の傾斜は44°である。
	52.50		灰褐色		D	100	1	0				●53.11～53.22m ・破砕部である。 ・正断層センスである。
	52.72		灰褐色		D	100	2	0				・灰褐色の砂混じり粘土状～明褐色の粘土混じり層状を呈する。 ・灰褐色砂混じり粘土 累計厚3mm ・走向・傾斜はN27° E64° Eである。 ・傾斜は29°である。
	52.81		灰褐色		D	100	4	0				・上層境界の傾斜は29°、下層境界の傾斜は27°である。
	52.85		灰褐色		D	100	5	0				●52.82～52.85m ・破砕部である。(D-I破砕部) ・正断層センスである。
	52.88		灰褐色		D	100	2	0				・灰褐色～灰白色の粘土状～ぶい褐色の粘土
	52.92		灰褐色		D	100	6	0				
	52.96		灰褐色		D	100	4	0				

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
84	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示していることから削除。 ・岩組織や割れ目の残留状況については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・割れ目沿いに砂状化するが、周囲の岩盤に劣化が認められないため削除。 ・硬軟、風化や変質を伴う岩盤の劣化については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・割れ目の傾斜、割れ目の密着状況、色調、割れ目の挟在物の有無、鉱物脈、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・一部で粘土を挟在するが、連続性に乏しいことから削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深度 (m)	境界 ・角数 位置	地層 の 名称	細区分	最大 径 (mm)	破砕 区分	基盤岩コア観察カード	
						記事・破砕性状・詳細スケッチ等	
52.72					85	●52.72~52.81m: 破砕帯(主せん断面52.81m)	
52.81					86	52.72~52.80m: Hj 上端56°で直線的に、下端14°で波打って連続。φ5~10m/m岩片(硬さ「D」主体)と岩片間の幅1~2m/m脈状~φ2~5m/m斑点状粘土部からなる。全体的に「粘土混じり岩片状」を呈する。色調は明褐色(7.5YR7/2)、厚さ40~90m/m	
52.81					87	52.80~52.81m: Hc-2 14°で上端は波打って、下端は直線的に連続。φ1~2m/m石英粒、φ2~3m/m粘土化岩片を10~20%含む軟質粘土(ガウジ)。色調は灰白色(7.5YR8/2)、厚さ7~10m/m	
52.81					88	52.80~53.17m: D	
53.17					89	●53.17~53.22m: 破砕帯(主せん断面53.17m)	
53.17					90	53.17m: Hc-2 29°で上下端とも直線的に連続。φ1~2m/m石英粒を10%程度含む軟弱粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(7.5YR6/2)、厚さ2m/m 53.17~53.22m: Hj 上端29°、下端27°でいずれも直線的に連続。φ5m/m前後の粘土化岩片と岩片間の粘土~砂状部からなり全体に「粘土混じり岩片状」~「粘土質岩片状」を呈する。上端側と下端側はマンガン銹染部を伴ない黒褐色化する。色調は明褐色(7.5YR7/1)、厚さ40m/m。	

記事内容
85 ●52.72~52.81m: 破砕帯(主せん断面52.81m)
86 52.72~52.80m: Hj 上端56°で直線的に、下端14°で波打って連続。φ5~10m/m岩片(硬さ「D」主体)と岩片間の幅1~2m/m脈状~φ2~5m/m斑点状粘土部からなる。全体的に「粘土混じり岩片状」を呈する。色調は明褐色(7.5YR7/2)、厚さ40~90m/m
87 52.80~52.81m: Hc-2 14°で上端は波打って、下端は直線的に連続。φ1~2m/m石英粒、φ2~3m/m粘土化岩片を10~20%含む軟質粘土(ガウジ)。色調は灰白色(7.5YR8/2)、厚さ7~10m/m
88 52.80~53.17m: D
89 ●53.17~53.22m: 破砕帯(主せん断面53.17m)
90 53.17m: Hc-2 29°で上下端とも直線的に連続。φ1~2m/m石英粒を10%程度含む軟弱粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(7.5YR6/2)、厚さ2m/m 53.17~53.22m: Hj 上端29°、下端27°でいずれも直線的に連続。φ5m/m前後の粘土化岩片と岩片間の粘土~砂状部からなり全体に「粘土混じり岩片状」~「粘土質岩片状」を呈する。上端側と下端側はマンガン銹染部を伴ない黒褐色化する。色調は明褐色(7.5YR7/1)、厚さ40m/m。

標準 尺	深 度 (m)	柱 状 図	岩 種 区 分	色 調	岩 級 区 分	コ ア 採 取 率 (%)	最 大 コ ア 長 (cm)	R Q D (%)	コ ア 採 取 率 (%)	最 大 コ ア 長 (cm)	記 事
					CL	100	8	0			●52.72~52.81m ・破砕部である。カタクレーサイトからなる ・灰白色の硬質粘土状~明褐色の粘土混じり砂状を呈する。 ・灰白色硬質粘土、累計厚10mm ・走向・傾斜は「E2」である。 ・傾斜は14°である。 ・上層境界の傾斜は14°、下層境界の傾斜は14°である。
					D	100	2	0			85~87
					D	100	2	0			
					D	100	1	0			
					D	100	1	0			
					D	100	1	0			
					D	100	2	0			
					CL	100	1	0			89, 90
					D	100	4	0			
					D	100	6	0			
					D	100	5	0			
					D	100	2	0			
					D	100	4	0			
					D	100	3	0			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
85~87	<ul style="list-style-type: none"> カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) φ1~2mmの石英粒、φ2~3mm粘土化岩片を10~20%含むとの記載に基づき、礫混じり粘土状と記載。 粘土の累計幅については、最大値を記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
88	<ul style="list-style-type: none"> 岩級とその区間については「岩級区分」欄に示しているため削除。
89, 90	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 表現の見直し(粘土混じり岩片状~粘土質礫状~粘土混じり礫状) φ1~2mm石英粒を10%程度含むとの記載に基づき、砂混じり粘土状と記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	地層・地質 位置	地質 記号	細区分				R	Q	D	最大コア長 (cm)	R	Q	D	最大コア長 (cm)	記事
				割れ目 傾斜	鉱物脈	マンガン	その他									
91	53.22~53.45	CL														記事内容
92	55.25~56.66	C														記事内容

記事内容
53.22~53.45m: CL 20~30° の直線的な割れ目が多い。 53.45~53.54m: D 締った砂状を呈する。岩組織と一部の割れ目は残留。 53.54~56.66m: CL 53.87~54.10m 石英が多く晶出しφ10~20m/m斑点状~幅5~15m/m・45~65° の脈状で分布する。 54.00~54.60m 石英脈ないし割れ目ぞいに砂状化し、全体がやゝ脆くなる。また同区間ではマンガン鉱染も伴ない黒褐色を帯びる。 53.87~54.00m 珪質でレンズ状の石英も分布する。
55.25m 55° のシャープで直線的な割れ目を境とし55.25m~56.66mは硬さ「C」で硬質となる。 ただし、割れ目ぞいの一部では風化で砂状化を伴う。粘土は殆んどはさまない。
56.43~56.47m 35° ~40° 割れ目ぞいに軟化し、硬さ「D」を呈する。

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	D	最大コア長	R	Q	D	最大コア長	記事
m	m	m	図	調	分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(cm)	
					CL'	100	8	0								●52.72~52.81m ・硬結である。カタクレーサイトからなる。 ・灰白色の硬結しり粘土状~明褐色の粘土 混じり硬状を呈する。 ・灰白色硬結しり粘土、累計厚10mm ・走向・傾斜はN27° E32° Wである。 ・傾斜は14° である。 ・上盤境界の傾斜は56°、下盤境界の傾斜は14° である。 ●53.11~53.20m ・硬結部である。 ・正常層センスである。 ・灰白色の硬結しり粘土状~明褐色の粘土 混じり硬状を呈する。 ・灰褐色硬結しり粘土、累計厚3mm ・走向・傾斜はN27° E64° Wである。 ・傾斜は29° である。 ・上盤境界の傾斜は29°、下盤境界の傾斜は27° である。 ●53.52~53.55m ・硬結部である。(D-I硬結部) ・正常層センスである。 ・灰褐色~灰白色の粘土状~にぶい褐色の粘土 混じり硬状を呈する。 ・灰褐色~灰白色粘土、7mm ・走向・傾斜はN26° E30° Wである。 ・傾斜は23° である。 ・上盤境界の傾斜は22°、下盤境界の傾斜は28° である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
91, 92	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級とその区間については“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・割れ目の傾斜、鉱物脈、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・一部で締まった砂状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・一部割れ目沿いに砂状を呈するが、いずれも連続性に乏しいことから削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示していることから削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深度 (m)	岩種	色	傾斜	厚さ	細区分		備考
					主成分	付随成分	
56.66	D						93
56.84	CL						94
57.90	C						94
58.34	D						94
58.77	D						94
59.18							94
59.28							94
59.60							94
59.82	D-1						95
59.85	Hj						96
59.85	Hc-1						97

記事内容
56.66～56.84m: D 風化で締った砂状化呈する。φ10～20m/mの硬さ「D」の岩片が礫状に残留する。
56.84～57.77m: CL 56.84～57.90m 硬さ「D」岩片主体で、一部に硬さ「E」が残留する。 57.30m以浅では、割れ目ぞいに風化・砂状化が進む。
57.75～57.90mはコアチューブ引上時に礫状コア化したものと推定される。
57.90～58.34m 硬さ「C」岩片主体 2ヶ所に幅1～2m/m石英脈が密着して分布 各割れ目ぞいに軽微なマンガン鉱染を受ける
58.28m 割れ目交差部周辺で砂状化
58.34～58.77m 硬さ「D」岩片主体 一部の割れ目ぞいで砂状化が進み、割れ目が消滅しかかっているものもある。
58.77～59.82m: D 風化で著しく軟化し締った砂状化部が主体。 岩組織や割れ目は残留しており、一部では砂や粘土脈をはさんでいる。
59.18m 20°、厚さ5m/mの軟質な灰白色粘土はさむ
59.28～59.48mでは割れ目は消滅する。
29.60～29.65m間に3本のほぼ平行な割れ目が55°前後で分布、砂や粘土薄層(厚0.5～1m/m)はさむ
●59.82～59.85m: 破砕帯(主せん断面59.85m)D-1
59.82～59.85m: Hj 上端22° 一部不明瞭で波打って、下端28°で直線的に連続。 φ2～5m/m石英粒、φ5～10m/m粘土化岩片と岩片間は粘土化した「粘土混じり岩片状」を呈する。色調はにぶい褐(7.5YR6/3)、厚さ30mm
59.85m: Hc-1 28°で上下端とも直線的に連続。φ1～2m/m石英粒をわずかに(5%以下)含む軟弱な粘土(ガウジ)、色調は灰褐(7.5YR6/2)～灰白色(7.5YR8/1)で縞状模様を呈する。厚さ5～7m/m

標準	深度	柱状	岩種	色	傾斜	厚さ	最大コア長	R	Q	D	最大コア長	記事
尺	高	状	区	級	分	分	(cm)	(%)	(%)	(%)	(cm)	
50	56.66		D				100	1	0			●53.17～53.22m ・破砕帯である。 ・上部層センスである。 ・灰褐色の砂混じり粘土状～粥状灰色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰褐色砂混じり粘土・累計厚30mm ・走向・傾斜はN27°E84°である。 ・傾斜は29°である。 ・上層境界の傾斜は29°。下層境界の傾斜は27°である。 ●59.82～59.85m ・破砕帯である。(D-1破砕帯) ・上部層センスである。 ・灰褐～灰白色の粘土状～にぶい褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰褐～灰白色粘土・7mm ・走向・傾斜はN06°E97°である。 ・傾斜は28°である。 ・上層境界の傾斜は22°。下層境界の傾斜は28°である。 60.00～62.61m ・硬質であるが、割れ目が多い。 63.61～64.00m ・砂礫状を呈する。 64.04～66.07m ・硬質であるが、割れ目が多い。 67.80～67.93m
	56.84		CL				100	2	0			
	57.90		C				100	1	0			
	58.34		D				100	4	0			
	58.77		D				100	6	0			
	59.18		D				100	5	0			
	59.28		D				100	2	0			
	59.60		D				100	4	0			
	59.82		D-1				100	3	0			
	59.85		Hj				100	7	0			
	59.85		Hc-1				100	5	0			
	60.00		D				100	6	0			
	63.61		D				100	5	0			
	64.04		CL				100	8	0			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
93	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・砂状及び礫状を呈するが、直線性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
94	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級とその区間については“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・一部で砂や粘土を挟在するが、いずれも連続性に乏しいことから削除。 ・一部で礫状を呈するが、掘削時の機械割れによるものと判断し削除。 ・石英脈、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
95～97	<ul style="list-style-type: none"> ・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕帯の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・縞状模様については、色調で示していることから削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

Table with columns for depth (m), core number, and detailed geological observations in Japanese. Includes handwritten notes and symbols.

Table with columns for article number (e.g., 98, 99, 100) and article content (記事内容) describing geological findings.

Table for '申請書用柱状図' (Application Form Core Log) showing core details, rock classification, and notes.

Summary table mapping article numbers (記事) to core observation cards (コア観察カード) and application form core logs (申請書用柱状図), listing reasons for deletion.

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深度 (m)	岩種	色	割れ目	風化	実質	RQD	岩質	軟弱度	基盤岩コア観察カード	
									記事・破砕性状・脈組スケッチ等	備考
65.22	CL	100	8	0						65.22~65.30mは40°と70°割れ目が交差し、幅10~20m/mと風化砂状部が拡大している。またわずかながら白色粘土と微細な黄鉄鉱、セリサイトも伴っている。
65.90	CM	100	10	10						65.90m φ20m/mと大型な石英斑晶が晶出。
66.07	CL	100	10	10						66.07~66.62m: CL 風化したゆ着割れ目や密着度の低い割れ目が多くハンマーの軽打で細片化する。
66.62	CM	100	10	10						66.62~67.14m: D φ5~20m/m硬質岩片と風化による砂状部からなり、砂礫状を呈する。
66.85	CM	100	16	16						66.85m以深では岩組織や割れ目の一部も残留する。また、部分的に灰白~淡黄色粘土も点在する。
67.14	CL	100	9	0						67.14~67.27m: CL 50°割れ目ぞいに軟化が進む
67.27	CM	100	9	0						67.27~67.80m: CM 割れ目ぞいに砂状化するものが多い。
67.40	CL	100	3	0						67.40~67.47m間はφ5~10m/mに砕け角礫状化する。
67.80	D	100	13	13						67.80~67.93m: D 50~60°割れ目ぞいに砂状化し、φ10m/m硬質岩片を含む砂礫状を呈する。
67.93	CL	100	12	12						67.93~68.15m: CL 45°割れ目ぞいに薄い砂状化部をはさむ。
68.15	CM	100	12	12						68.15~68.60m: CM 割れ目に挟在物は分布しない
68.43	CM	100	3	0						68.43~68.49m、φ5~20m/m礫状~片状に砕けているが砂や粘土ははさまない。
68.60	D	100	3	0						68.60~69.05m: D 軟化著しい硬さ「E」であるが、岩組織や割れ目は明瞭に残留している。
68.65	CL	100	3	0						68.60~68.65mは砂状化を呈するが、これはコア上げ時で生じた可能性が高い。
69.05	CL	100	3	0						69.05~69.56m: CL 30~50°割れ目主体。密着度の低いゆ着割れ目も多く含む。
69.07	CM	100	3	0						69.07m厚さ2~3m/mマンガンが脈状に分布
69.56	D	100	3	0						69.56~69.70m: D 少量の白色粘土細脈を伴う。

記事内容
65.22~65.30mは40°と70°割れ目が交差し、幅10~20m/mと風化砂状部が拡大している。またわずかながら白色粘土と微細な黄鉄鉱、セリサイトも伴っている。
65.90m φ20m/mと大型な石英斑晶が晶出。
66.07~66.62m: CL 風化したゆ着割れ目や密着度の低い割れ目が多くハンマーの軽打で細片化する。
66.62~67.14m: D φ5~20m/m硬質岩片と風化による砂状部からなり、砂礫状を呈する。
66.85m以深では岩組織や割れ目の一部も残留する。また、部分的に灰白~淡黄色粘土も点在する。
67.14~67.27m: CL 50°割れ目ぞいに軟化が進む
67.27~67.80m: CM 割れ目ぞいに砂状化するものが多い。
67.40~67.47m間はφ5~10m/mに砕け角礫状化する。
67.80~67.93m: D 50~60°割れ目ぞいに砂状化し、φ10m/m硬質岩片を含む砂礫状を呈する。
67.93~68.15m: CL 45°割れ目ぞいに薄い砂状化部をはさむ。
68.15~68.60m: CM 割れ目に挟在物は分布しない
68.43~68.49m、φ5~20m/m礫状~片状に砕けているが砂や粘土ははさまない。
68.60~69.05m: D 軟化著しい硬さ「E」であるが、岩組織や割れ目は明瞭に残留している。
68.60~68.65mは砂状化を呈するが、これはコア上げ時で生じた可能性が高い。
69.05~69.56m: CL 30~50°割れ目主体。密着度の低いゆ着割れ目も多く含む。
69.07m厚さ2~3m/mマンガンが脈状に分布
69.56~69.70m: D 少量の白色粘土細脈を伴う。

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩級区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	最大コア長 (cm)	記事
60	65.22		CL		100	8	0					64.35~66.07m ・硬質であるが、割れ目が多い。 ●67.90~67.93m ・砂礫状を呈する。
	66.07		CM		100	10	10					●67.70~67.73m ・硬質部である。 ・右ずれセンスである。 ・にぶい黄褐色の粘土状~灰黄色の粘土層に り礫状を呈する。 ・にぶい黄褐色粘土・黒鉄砂1mm ・走向・傾斜はN25°E2°W ・傾斜は55°である。 ・上層境界の傾斜は55°、下層境界の傾斜は 67°である。 73.35~73.38m ・幅25~40mで纏まった砂状を呈する。 ●74.36~74.50m ・硬質部である。カタクレーサイトからなる。
	66.62		CM		100	10	10					
	66.85		CM		100	16	16					
	67.14		CL		100	9	0					
	67.27		CM		100	9	0					
	67.40		CL		100	3	0					
	67.80		D		100	13	13					
	67.93		CL		100	12	12					
	68.15		CM		100	12	12					
	68.43		CM		100	3	0					
	68.60		D		100	3	0					
	69.05		CL		100	3	0					
	69.07		CM		100	3	0					
	69.56		D		100	3	0					

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
103	<ul style="list-style-type: none"> 一部割れ目沿いに砂や粘土を挟在するが、いずれも周囲の岩盤に劣化が認められないため削除。 割れ目沿いの鉱物の晶出、割れ目の密着状況については、補足的なものであるため削除。 一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため、大型な石英斑晶が晶出との記載を削除。 岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 66.62~67.14mで砂礫状、67.40~67.47mで角礫状を呈するが、いずれも掘削時の機械割れと判断し削除。 岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
104	<ul style="list-style-type: none"> 岩級については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 割れ目の傾斜、岩片の粒径については、補足的なものであるため削除。
105	<ul style="list-style-type: none"> 岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 割れ目の傾斜、割れ目の挟在物の有無、割れ目の密着状況、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 68.43~68.49mで礫状~片状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 68.60~68.65mで砂状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 一部割れ目沿いで砂を挟在するが、いずれも周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 一部で粘土を挟在するが、いずれも連続性に乏しいことから削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	境界 番号	境界 名称	境界 理由	細区分				最大径 (mm)	RQD (%)	R (%)	Q (%)	D (%)	記事
					割れ目 の有無	割れ目 の長さ	割れ目 の形状	割れ目 の向き						
70	70.50													

71	71.00													
71	71.50													
71	72.00													

記事内容
106 ●69.70～69.73m: 破砕帯(主せん断面69.70m) 69.70m: Hc-1
107 55° で上下端とも直線的に連続。石英粒、岩片は殆んど含まない軟弱粘土(ガウジ)、色調はにぶい黄橙(10YR5/3)、厚さ1m/m。
108 69.70～69.73m: Hj 上端55° で、下端57° でいずれも直線的に連続。φ3～10m/m硬さE(粘土化)、Dの岩片で岩片間の一部は粘土化する。 全体として「粘土混じり岩片状」呈する。色調は灰黄色(2.7Y7/2)、厚さ1m/m
109 69.73～74.10m: CL 硬さ「D」と硬さ「C」の区間が交互に出現する。 硬さ「D」では割れ目に砂などの挟み物分布するが、硬さ「C」区間では挟み物は殆んど分布しない。
110 70.06～70.09m 45° 割れ目ぞいに風化で砂状化する。 70.43～71.27mの硬さ「C」のうち、70.49～70.59mではφ5m/mの白濁化した長石が多い。70.59m以下では少ない。
111 71.27～71.60m 45～60° 幅1m/m以下の軟弱な灰白色粘土が脈状に分布する。その一部は風化で褐色化する。
112 71.37～71.50m φ10m/m前後の大型の石英斑晶が点在。 岩片も硬さ「C」と周囲より硬質化している。
113 71.88m 0～10° 幅1m/m石英脈が密着して連続。

標尺 (m)	深度 (m)	柱状 区分	色調	岩 級 区 分	最大 コア 長 (cm)	R (%)	Q (%)	D (%)	記事
70	70.50								
71	71.00								
71	71.50								
71	72.00								

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
106～108	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類については、補足的なものであるため削除。 破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
109	<ul style="list-style-type: none"> 岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 一部割れ目扱いに砂状化するが、周囲の岩盤の劣化に系統性が認められないことから削除。 割れ目の挟み物の有無については、補足的なものであるため削除。
110	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目扱いに砂状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 長石の白濁化については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。
111	<ul style="list-style-type: none"> 色調については、補足的なものであるため削除。 一部に粘土を挟みするが、系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。
112	<ul style="list-style-type: none"> 一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。 局所的に挟まれる硬質な岩片の記載については、補足的なものであるため削除。
113	<ul style="list-style-type: none"> 鉱物脈については、補足的なものであるため削除。

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

層位 (m)	深度 (m)	境界位置 (m)	地質 記号	細区分					R %	Q %	D %	最大コア長 (cm)	コア採取率 (%)	記事
				崩れ	砂状	粘質	硬質	軟質						
72.00	72.00		G ₇											
72.90	72.90													
73.80	73.80													
74.70	74.70													
75.60	75.60													

記事内容
72.10~72.74mの硬さ「C」区間では割れ目挟在物は殆んど分布しない。長石の一部は白濁化する。
72.74~74.10m 硬さ「D」主体だが、硬さ「C」の岩片も含んでいる。割れ目ぞいに風化、砂状化することがある。
73.35~73.38m 厚さ25~40m/mで締った砂状化を呈する。岩組織は残留している。
73.65~73.76m 30°と60°の割れ目が交差しφ10~50m/mの岩片状コアを呈する。
74.10~74.36m: CM
●74.36~74.50m: 破砕帯(主せん断面74.40m)
74.36~74.40m: Hb
上端27°で直線的に、下端30°で不明瞭に湾曲して連続。φ2~3m/m石英粒、粘土化したφ5m/m岩片を約10%含む軟弱な「礫質粘土状」呈する。色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)、厚さ0~30m/m
74.40~74.41m: Hc-1
30°で上下端とも湾曲して連続。φ1m/m石英粒をわずかに(5%以下)含む軟弱粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(75YR5/2)厚さ7m/m
74.41~74.50m: Hb
上端30°で湾曲して連続。下端は74.50m以深が掘削時にバラけたコアのため位置不明。
φ2~3m/m石英粒、粘土化したφ5~30m/m岩片を10~20%含む軟弱な「礫質粘土状」呈する。色調はにぶい黄橙色(10YR7/2)、厚さ75m/m以上



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
114	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の挟在物の有無については、補足的なものであるため削除。 長石の白濁化については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。 硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 一部割れ目沿いで砂状を呈するが、いずれも周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
115	<ul style="list-style-type: none"> 岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
116	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 岩片状を呈するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。
117~120	<ul style="list-style-type: none"> カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 下盤境界の傾斜 記載無し→30° ※2 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hb区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

コア観察カード (H27年8月)

層番号	深度 (m)	地層区分	地層名	地質記号	細区分				最大径 (mm)	R	Q	D	備考
					粘土	シルト	砂	礫					
121	74.50												
122	75.00												
123	75.57												
124	75.71												
125	75.93												

基盤岩コア観察カード

記事・破砕性状・詳細スケッチ等

74.50~75.57m: D
74.50~75.00mは礫状コアで採取され、割れ目状況など不明
75.00~75.57m岩組織は残留しているが、多くの割れ目は消滅している。

●75.57~76.00m: 破砕帯(主せん断面75.73m)
75.57~75.71m: Hj
上端は不明瞭ながら25°で、下端68°で波打って連続。φ5~20m/m岩片からなり、岩片間は粘土化~砂状化する「粘土混じり岩片状」呈する。色調は灰黄褐色(10YR6/2)、厚さ90~120m/m

75.71~75.73m: Hc-2
68°で上端は波打って、下端は直線的に連続。φ1~3m/m石英粒とφ3m/m岩片を5~10%含む軟質粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(5YR6/2)、厚さ10~12m/m

75.73~75.93m: Hb
上端68°で直線的、下端64°で波打って連続。φ2~4m/m石英粒、φ5~10m/m岩片を10~15%含む半固結状の「礫質粘土状」呈する。石英粒は主せん断面方向に配列している。色調は明褐色(5YR7/2)~灰褐色(5YR5/2)、厚さ55m/m

75.93~76.00m: Hj
上端は64°で波打って、下端は不明瞭(30°?)に連続。φ5~10m/m岩片と岩片間の粘土からなり「粘土混じり~粘土質岩片状」呈する。色調は明褐色(7.5YR7/2)、厚さ60m/m以上。

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
121 74.50~75.57m: D 74.50~75.00mは礫状コアで採取され、割れ目状況など不明 75.00~75.57m岩組織は残留しているが、多くの割れ目は消滅している。
122 ●75.57~76.00m: 破砕帯(主せん断面75.73m) 75.57~75.71m: Hj 上端は不明瞭ながら25°で、下端68°で波打って連続。φ5~20m/m岩片からなり、岩片間は粘土化~砂状化する「粘土混じり岩片状」呈する。色調は灰黄褐色(10YR6/2)、厚さ90~120m/m
123 75.71~75.73m: Hc-2 68°で上端は波打って、下端は直線的に連続。φ1~3m/m石英粒とφ3m/m岩片を5~10%含む軟質粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(5YR6/2)、厚さ10~12m/m
124 75.73~75.93m: Hb 上端68°で直線的、下端64°で波打って連続。φ2~4m/m石英粒、φ5~10m/m岩片を10~15%含む半固結状の「礫質粘土状」呈する。石英粒は主せん断面方向に配列している。色調は明褐色(5YR7/2)~灰褐色(5YR5/2)、厚さ55m/m
125 75.93~76.00m: Hj 上端は64°で波打って、下端は不明瞭(30°?)に連続。φ5~10m/m岩片と岩片間の粘土からなり「粘土混じり~粘土質岩片状」呈する。色調は明褐色(7.5YR7/2)、厚さ60m/m以上。

申請書用柱状図

標準	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア	最大	R	コア	記事
尺	度	状	区分	調	区分	採取	コア	(%)	採取	
m	m	m	図			率	長	(%)	率	
						(%)	(cm)		(%)	
74.50						100	3	0		●74.36~74.50m 破砕部である。カタクレサイトからなる。灰褐色の粘土状~にふい黄褐色の礫質粘土状を呈する。 ・灰褐色粘土: 累計厚7mm ・走向・傾斜はN15° E87° W ・傾斜は23°である。 ・上層境界の傾斜は23°である。 ●75.57~76.00m 破砕部である。 ・わずかにセシスである。 ・灰褐色の礫質粘土状~明褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰褐色礫質粘土: 累計厚12mm ・傾斜は68°である。 ・上層境界の傾斜は25°である。 ●75.71~75.73m 破砕部である。 ・わずかにセシスである。 ・灰褐色の粘土状~にふい黄褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰褐色粘土: 累計厚2mm ・走向・傾斜はN17° E71° E ・傾斜は40°である。 ・上層境界の傾斜は21°である。 ●75.73~75.93m 破砕部である。 ・わずかにセシスである。 ・灰褐色の粘土状~にふい黄褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰褐色粘土: 累計厚2mm ・走向・傾斜はN17° E71° E ・傾斜は40°である。 ・上層境界の傾斜は21°である。
75.00						100	10	10		
75.57						100	9	0		
75.71						100	8	0		
75.73						100	6	0		
75.73						100	3	0		
75.73						100	4	0		
75.73						100	5	0		
75.73						100	5	0		
75.73						100	7	0		

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
121	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・一部で礫状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
122~125	<ul style="list-style-type: none"> ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・φ1~3mm石英粒とφ3mm岩片を5~10%含むとの記載に基づき、礫混じり粘土状と記載。 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書で記載しないこととしているため削除。

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

Table with columns for depth (m), lithology, and core observation details. Includes handwritten notes and labels like 126, 127, 128.

記事内容 (Article Content) table containing detailed descriptions of core samples at various depths (76.00m to 78.87m).

申請書用柱状図 (Application Columnar Diagram) table showing core data including depth, lithology, and sampling rates.

Table with 2 columns: 記事 (Article) and コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図 (Core Observation Card ⇒ Application Columnar Diagram). Contains removal reasons for items 126 and 127, 128.

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

層位	深度	層位番号	地質	地層	細区分				RQD	最大コア長	岩級区分	記事番号
					基岩	砂岩	泥岩	頁岩				
78.87	82.51										129	
80.30	80.40										130	
80.66	81.87										131	
81.17	81.82										132	
81.87	82.51										133	
82.51	82.62										134	
82.62	82.94										135	
82.94	84.09										136	
84.07	84.09										137	

記事内容
78.87～82.51m: CL 78.87～79.27m 硬さ「D」主体。長石の白濁化が多い。 79.02m 55° 厚さ3m/m褐色砂～φ2m/m細片化岩片はさむ 79.27～80.66m 硬さ「C」主体 上端側の79.27～79.59mは硬さ「B」を堅硬 79.69～79.95mは褐色化するが珪化のため硬さ「C」と硬質 79.96～80.23m 45° 前後の割れ目が多い。 これらの割れ目には褐色粘土やマンガン厚さ0.5～3 m/m ではさんでいる。
80.30～80.40m 割れ目ぞいに砂状化が進む。 80.30～80.35mはコアチューブ引き上げ時に発生した角礫状コア 80.66～81.87m 硬さ「D」中に硬さ「C」のφ2～3cm岩片が断片的に分布 80° 前後の高角度割れ目が多い。
81.17m 55° 割れ目に厚さ10～15m/m で砂と褐色粘土はさむ。 挟在物中と割れ目周辺にφ0.5 m/m 以下の微細な黄鉄鉱伴う。
81.82～81.87m間は風化で締った砂礫状呈する。
81.87～82.51m 割れ目ぞいに砂状化する部分も含まれる。
82.51～82.62m: D 風化で砂状化する。φ0.5～1cmのGp岩片が礫状に分布する
82.62～82.94: CL 割れ目沿いに砂状化進む。一部で幅1～2m/m白色粘土脈はさむ
82.94～84.09: CM ゆ着割れ目や密着度の低い割れ目を多く含んでいる 割れ目の挟雑物は少ない。 83.30～83.47m 長石の一部が白濁化する。
84.07～84.09m 上端45°、下端65° 割れ目で囲まれ、砂状化～細片状化する。 厚さ1～10m/mで厚さ3 m/mレンズ状の淡黄色軟質粘土とマンガン鉱染伴う。
84.09～84.92m: CH 60～80° の高角度の「ゆ着割れ目」を伴うが、密着度は高くハンマーの打撃でも分離しない。
84.50m 36° 割れ目の一部に厚さ2～3m/mのマンガンを伴う。 84.82～84.92m 割れ目交差部で一部片状コア、岩片自身は堅硬で劣化や挟在物は伴わない。 84.92～85.38m: CL

層位	深度	層位番号	地質	地層	細区分	RQD	最大コア長	岩級区分	記事
m	m	m	m	m	m	m	m	m	m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
129, 130	<ul style="list-style-type: none"> 岩級及びその区間については、「岩級区分」欄に示しているため削除。 長石の白濁化については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。 硬軟や割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 一部割れ目に砂や粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 変色、割れ目の傾斜、マンガン、割れ目沿いの鉱物晶出については、補足的なものであるため削除。 80.30～80.40mで割れ目沿いに砂状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
131～137	<ul style="list-style-type: none"> 記載漏れのため比較対象無し。※2

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深さ (m)	深度 (m)	採掘機 種別	地層 名	固相分				RQD	最大片径 (cm)	破砕 状況	記事 番号	記事 内容
				割れ目 径	割れ目 数	割れ目 長さ	割れ目 方向					
0.0	0.0									138	下位破砕帯の主せん断面と同方向の50~60° 割れ目やゆ着割れ目が多い。	
0.1	0.1									139	85.01m 幅1m/m以下 22° 石英脈が50° 割れ目と斜交して連続。	
0.2	0.2									140	●85.38~85.41m破砕帯(主せん断面85.41m) 85.38~85.41m:Hj 上端45~50° で1ヶ所屈曲するが、これ以外は直線的に、下端は47° で直線的に連続。φ2~3m/石英粒とφ3~5m/粘土化岩片と基質の砂状~粘土状部からなる軟質な「粘土・砂混じり岩片状」呈する。	
0.3	0.3									141	色調にばい黄橙色(10YR7/2)、厚さ20~25m/m上端の割れ目ぞいにマンガ ン鉱染受け黒褐色化する。 85.41m:Hc-1 47° で上下端とも直線的に連続、φ1m/石英粒をこくわずか(5%以下)含む 軟弱な粘土(ガウジ)。色調は灰黄褐色(10YR5/2)厚さ2m/m	
0.4	0.4									142	85.41~85.92m:CL 上位の破砕帯の主せん断面と同方向の40~60° 割れ目主体、砂や粘土をは さむ。 85.92~86.43m:D 割れ目ぞいに砂状化が拡大。φ10~30m/m硬さ「C」岩片を多量に混えた砂礫 状を呈する。	
0.5	0.5									143	86.43~86.86m:CM 堅硬であるが、割れ目が多い。挟在物は殆んど分布しない。 86.86~87.20m:CL 50~60° 割れ目ぞいを主体に軟化が進む。 断片的に硬さ「C」岩片も礫状に残留している。	
0.6	0.6									144	87.20~87.51m:D 風化で締った礫質砂状を呈する。 幅1~3m/mの橙色粘土も脈状に分布する。	
0.7	0.7									145	87.51~93.53m:CL 割れ目ぞいに風化が進んでいる。 全体に硬さ「C」の岩片が主体である。 割れ目には風化起源の締った砂、粘土脈、マンガンをはさむことが多い。	
0.8	0.8									146	88.51~88.69m 40~50° の割れ目1~2cm間隔で平行に分布。それと60° 斜 交~直交する割れ目や幅1m/m石英脈も分布。 89.25~89.56m 上下に比べやゝ割れ目が少なくなる。 89.56~89.86m 割れ目ぞいに風化が進み全体脆くなる。(硬さD)	

記事内容
138 下位破砕帯の主せん断面と同方向の50~60° 割れ目やゆ着割れ目が多い。
139 85.01m 幅1m/m以下 22° 石英脈が50° 割れ目と斜交して連続。
140 ●85.38~85.41m破砕帯(主せん断面85.41m) 85.38~85.41m:Hj 上端45~50° で1ヶ所屈曲するが、これ以外は直線的に、下端は47° で直線的に連続。φ2~3m/石英粒とφ3~5m/粘土化岩片と基質の砂状~粘土状部からなる軟質な「粘土・砂混じり岩片状」呈する。
141 色調にばい黄橙色(10YR7/2)、厚さ20~25m/m上端の割れ目ぞいにマンガ ン鉱染受け黒褐色化する。 85.41m:Hc-1 47° で上下端とも直線的に連続、φ1m/石英粒をこくわずか(5%以下)含む 軟弱な粘土(ガウジ)。色調は灰黄褐色(10YR5/2)厚さ2m/m
142 85.41~85.92m:CL 上位の破砕帯の主せん断面と同方向の40~60° 割れ目主体、砂や粘土をは さむ。 85.92~86.43m:D 割れ目ぞいに砂状化が拡大。φ10~30m/m硬さ「C」岩片を多量に混えた砂礫 状を呈する。
143 86.43~86.86m:CM 堅硬であるが、割れ目が多い。挟在物は殆んど分布しない。 86.86~87.20m:CL 50~60° 割れ目ぞいを主体に軟化が進む。 断片的に硬さ「C」岩片も礫状に残留している。
144 87.20~87.51m:D 風化で締った礫質砂状を呈する。 幅1~3m/mの橙色粘土も脈状に分布する。
145 87.51~93.53m:CL 割れ目ぞいに風化が進んでいる。 全体に硬さ「C」の岩片が主体である。 割れ目には風化起源の締った砂、粘土脈、マンガンをはさむことが多い。
146 88.51~88.69m 40~50° の割れ目1~2cm間隔で平行に分布。それと60° 斜 交~直交する割れ目や幅1m/m石英脈も分布。 89.25~89.56m 上下に比べやゝ割れ目が少なくなる。 89.56~89.86m 割れ目ぞいに風化が進み全体脆くなる。(硬さD)

標尺	深さ	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	RQD	最大コア径	記事
m	m	m	図	調	分	(%)	(cm)	(%)	(cm)	

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
138~146	・記載漏れのため比較対象無し。※2

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 φ(m)	深度 (m)	境界 位置 層	地 中 心 位置	地 質 記 号	相区分					基盤岩 相区分	記事 内容
					割れ 目の 形状	割れ 目の 長さ	割れ 目の 角度	風 化	変 質		
91	31.00			Gp	✓	✓	✓	✓	✓	147	91.16~91.25m 低角と高角割れ目が交差し、径10m/m前後の細岩片状に砕けている。 下端にマンガン鉱染伴う。
92	32.00				✓	✓	✓	✓	✓	148	92.32m 53° 割れ目ぞいにφ0.5m/m前後の雲母(セリサイト?)が晶出している。
93	33.00				✓	✓	✓	✓	✓	149	93.53~94.00m: D 割れ目ぞいに風化による砂状化が拡大し、一部で砂礫状を呈する。
94	34.00				✓	✓	✓	✓	✓	150	94.00~95.85m: CL
95	35.00				✓	✓	✓	✓	✓	151	94.07~94.88m 上下端65° で貫入するアプライト 上下端とも割れ目化し、破碎や変質粘土は伴わない。 貫入面(65°)に60° 斜交~直交する割れ目が発達するが密着しているものが多い。φ1~2m/mのカンラン石斑晶が多く、一部で流理構造(65~60°)をもつ。 直上と直下のGpに破碎や変質は与えていない。

記事内容
91.16~91.25m 低角と高角割れ目が交差し、径10m/m前後の細岩片状に砕けている。 下端にマンガン鉱染伴う。
92.32m 53° 割れ目ぞいにφ0.5m/m前後の雲母(セリサイト?)が晶出している。
93.53~94.00m: D 割れ目ぞいに風化による砂状化が拡大し、一部で砂礫状を呈する。
94.00~95.85m: CL
94.07~94.88m 上下端65° で貫入するアプライト 上下端とも割れ目化し、破碎や変質粘土は伴わない。 貫入面(65°)に60° 斜交~直交する割れ目が発達するが密着しているものが多い。φ1~2m/mのカンラン石斑晶が多く、一部で流理構造(65~60°)をもつ。 直上と直下のGpに破碎や変質は与えていない。

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	D	コア採取率	最大コア長	記事
m	m	m	図	調	分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(%)	(cm)	

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
147~151	・記載漏れのため比較対象無し。※2

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 74 (m)	深度 (m)	標準高位置	標高	細区分				岩種区分	軟硬度区分	基盤岩コア観察カード 記事・硬質性状・詳細スケッチ等
				割れ目性状	山崩性状	崩壊性状	崩壊性状			
95.22	95.25			✓	✓	✓	✓	CL	95.22~95.25m 割れ目ぞいに砂状化、マンガン伴う。 95.30~95.45m 緑色おびる	
95.85	96.58			✗	✗	✗	✗	CM	95.85~96.58m: CM 硬さ「B」と硬いが、密着度の低い割れ目が多く、一部で細片化する。	
96.00	96.10			✓	✓	✓	✓	CL	96.00~96.10m 割れ目ぞいに幅1~2m/m砂状化し、灰白色粘土脈もはさまむ。	
96.58	97.57			✓	✓	✓	✓	CL	96.58~97.57m CL 一部に硬さ「B」の硬質部も混える。 φ2~3m/m暗緑色鉱物(緑泥石?)が晶出・点在する。	
97.00	97.12			✓	✓	✓	✓	CL	97.00~97.12m 割れ目ぞいに砂状化し、全体が脆くなる。	
97.57	97.88			✓	✓	✓	✓	D	97.57~97.88m: D 硬さ「C」の岩片も残留するが、全体は締った土砂状	
97.85	97.85			✓	✓	✓	✓		97.85~97.85m 40° 幅1~5m/m赤褐色鉱物脈が分布	
97.88	100.51			✓	✓	✓	✓	CM	97.88~100.51m: CM 硬質で風化と変質も弱くなる 密着度が低い割れ目やゆ着割れ目が多く 10cm以上の柱状コアはごくわずか。 割れ目挟在物は殆んど認められない。	
99.03	99.03			✓	✓	✓	✓		99.03m 35° 割れ目に微細な黄鉱物が晶出している。	

記事内容
95.22~95.25m 割れ目ぞいに砂状化、マンガン伴う。 95.30~95.45m 緑色おびる
95.85~96.58m: CM 硬さ「B」と硬いが、密着度の低い割れ目が多く、一部で細片化する。
96.00~96.10m 割れ目ぞいに幅1~2m/m砂状化し、灰白色粘土脈もはさまむ。
96.58~97.57m CL 一部に硬さ「B」の硬質部も混える。 φ2~3m/m暗緑色鉱物(緑泥石?)が晶出・点在する。
97.00~97.12m 割れ目ぞいに砂状化し、全体が脆くなる。
97.57~97.88m: D 硬さ「C」の岩片も残留するが、全体は締った土砂状
97.85~97.85m 40° 幅1~5m/m赤褐色鉱物脈が分布
97.88~100.51m: CM 硬質で風化と変質も弱くなる 密着度が低い割れ目やゆ着割れ目が多く 10cm以上の柱状コアはごくわずか。 割れ目挟在物は殆んど認められない。
99.03m 35° 割れ目に微細な黄鉱物が晶出している。

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩種	コア	最大	R	コア	採取	率	記事
m	m	m	図	分	分	採取	コア	Q	最大	率	(%)	
						(%)	(cm)	(%)	R	Q	D	

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
152~156	・記載漏れのため比較対象無し。※2

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 1.00 (m)	深度 (m)	境界・地層位置	地層名	細区分				最大径 (mm)	崩壊 区分	破砕 区分	基盤岩コア観察カード 記事・破砕性状・詳細スケッチ等
				粗粒部 の割合	細粒部 の割合	風化	高角				
										157 100.00~100.01m ゆる割れ目や高角・低角の割れ目・片状・礫状の多い。	
										158 100.01~100.12m 風化で一部割れ目ぞいに砂状化しマンガン鉱染も受ける。	
										159 100.12~102.35m 割れ目には挟雑物は殆んど認められない。 一部でゆる割れ目や密着度の低い割れ目が分布し、ハンマーの強打で細片化し易い。	
										160 101.57~101.58mと102.00~102.05m間は割れ目ぞいに片状・礫状に砕けているが、粘土や軟化部は分布しない。	
										159 101.57~101.58mと102.00~102.05m間は割れ目ぞいに片状・礫状に砕けているが、粘土や軟化部は分布しない。	
										161 102.05~102.35m間では高角度で密着度の低い割れ目やゆる割れ目が多い。	
										162 102.35~107.40m 上下に比べ割れ目が少なくなる。 部分的に割れ目ぞいに薄く砂状化したり粘土脈やマンガンをはさむが全体では挟在物は殆んど含まない。	
										163 103.52~103.54m間、割れ目ぞいに薄く砂状化する。	

記事内容
157 100.00~100.51m ゆる割れ目や密着度の低い割れ目が多く細片化し易い。
158 100.51~100.72m:CL 風化で一部割れ目ぞいに砂状化しマンガン鉱染も受ける。
159 100.72~102.35m:CM 割れ目には挟雑物は殆んど認められない。 一部でゆる割れ目や密着度が低い割れ目が分布し、ハンマーの強打で細片化し易い。
160 101.57~101.58mと102.00~102.05m間は割れ目ぞいに片状・礫状に砕けているが、粘土や軟化部は分布しない。
159 101.57~101.58mと102.00~102.05m間は割れ目ぞいに片状・礫状に砕けているが、粘土や軟化部は分布しない。
161 102.05~102.35m間では高角度で密着度の低い割れ目やゆる割れ目が多い。
162 102.35~107.40m:CH 上下に比べ割れ目が少なくなる。 部分的に割れ目ぞいに薄く砂状化したり粘土脈やマンガンをはさむが全体では挟在物は殆んど含まない。
163 103.52~103.54m間、割れ目ぞいに薄く砂状化する。

標尺	標高	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	D	コア採取率	最大コア長	記事
m	m	m	区	分	調	分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(%)	(cm)	

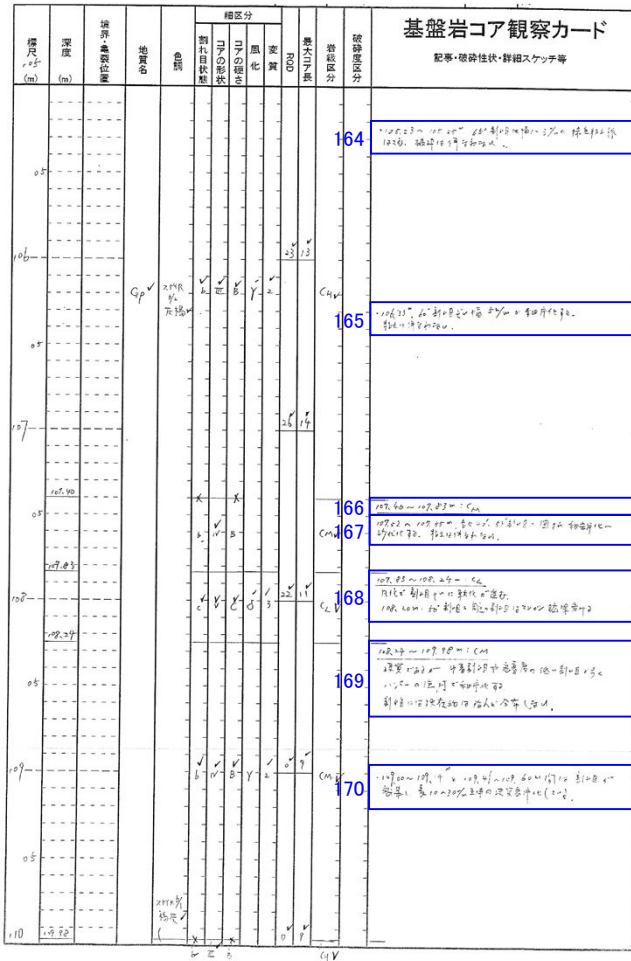
記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
157~163	・記載漏れのため比較対象無し。※2

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容
164 105.23～105.25m 65° 割れ目は幅1～3m/mの緑色粘土脈はさむ。破碎は伴わない。
165 106.33m 60° 割れ目ぞい幅5m/mが細片化する。粘土は伴わない。
166 107.40～107.83m: CM
167 107.52～107.55m 各々40°、53° 割れ目に囲まれ細岩片化～砂状化する。粘土は伴わない。
168 107.83～108.24m: CL 風化で割れ目ぞいに軟化が進む。 108.20m 50° 割れ目と周辺の割れ目はマンガン鉱染を受ける。
169 108.24～109.98m: CM 硬質であるがゆ着割れ目や密着度が低い割れ目が多くハンマーの強打で細片化する。 割れ目には挟在物は殆んど分布しない。
170 109.00～109.14mと109.41～109.60m間は割れ目が密集し、長10～30m/m主体の硬質岩片化している。

標準	深	柱	岩	色	岩	コア	最大	R	コア	記事
尺	度	状	種	調	級	採取	コア	Q	採取	
m	m	m	区	分	分	率	長	D	率	
						(%)	(cm)	(%)	(%)	

記事	コア観察カード (H27年8月) ⇒ 申請書用柱状図
164～170	・記載漏れのため比較対象無し。※2

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

掘尺 11.0 (m)	深度 (m)	境界 地層 位置	地層 名	色調	相区分				R Q D	最大 コア 長さ (cm)	採取 深度 区分	記事 番号
					割れ 目の 状態	土 質 の 状態	風 化	質 量				
0.5	110.98		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	171	
0.5	110.43		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	172	
0.5	110.74		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	173	
0.5	111.13		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	174	
0.5	111.37		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	175	
0.5	111.54		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	176	
0.5	111.74		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	177	
0.5	112.04		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	178	
0.5	112.83		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	179	
0.5	113.56		SPH 粘板	黄褐色	○	○	○	○	10	C1	180	

記事内容
171 109.98~110.43m: CH ゆ着割れ目や密着度の低い割れ目を含まない棒状コアからなる。
172 110.43~110.74m: CL 岩片は硬いが、割れ目の一部で砂状化する。
173 110.74~112.83m: CM 30~60°とこれに直交~斜交する50~70°割れ目が主体 割れ目交差部の一部では岩状化するが劣化は伴わない。 112.04m以浅は堅硬で割れ目挟み物は殆んど分布しない。
174 111.13~111.37mは暗緑色化、111.37~11.54mはにぶい橙色を割れ目方向と調和的に50~60°で示す。 前者は緑泥石化が進んだ区間、後者はカリ長石が多く晶出する区間である。 両色調境界部はよく密着し、破碎や変質は伴わない。 112.04m以深は硬さ「C」主体で、一部の割れ目ぞいには風化で薄く砂状化する。 粘土化や粘土脈は分布しない。全体にマンガン鉱染を軽微に受け、割れ目の面ぞいには薄く黒褐色化する。
175 ●113.51~113.60m: 破砕帯(主せん断面113.56m) 113.51~113.56m: HJ 上端55°で、下端66°でいずれも波打って連続。φ5~10m/m硬さDの岩片で、岩片間は薄く粘土化~砂状化し、「粘土混じり岩片状」呈する。 色調は灰褐色(7.5YR6/2)、厚さ20~35m/m
176 113.56m: Hc-1 66°で上下端とも小さく波打って連続。途中で厚さ1m/m粘土に分歧。 φ1m/m石英粒わずかに含む軟質粘土(ガウジ)。 色調は灰白色(7.5YR8/2)、厚さ1~2m/m。
177 113.56~113.60m: HJ 上端66°で小さく波打ち、下端63°、幅1m/m以下のにぶい橙色(7.5YR7/4)の直線的な軟弱粘土脈として連続。φ5~10m/m岩片と岩片間の粘土~砂状部からなり「粘土混じり岩片状」呈する。色調は灰褐色(7.5YR6/2)厚さ15~20m/m。
178 113.60~114.00m: D 硬さ「C」「D」岩片含むが全体として軟化著しい。
179 114.00~114.75m: CL 高角と低角度割れ目が交差し概ね30m/m以下に岩片化。 割れ目の一部は砂状化~マンガン鉱染を受ける
180 114.75~115.52m: D 風化著しく大半が砂状化し、砂礫状を呈する。

掘尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級	コア採取率	最大コア長さ	R	Q	D	記事
m	m	m	図	調	分	(%)	(cm)	(%)			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
171~180	・記載漏れのため比較対象無し。※2

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

層厚 1.5 (m)	深度 (m)	境界 位置 (m)	地質の 地層名	色 調	割れ 目 の 深 さ (cm)	割れ 目 の 間 隔 (cm)	割れ 目 の 傾 斜 角 (°)	割れ 目 の 形 状	割れ 目 の 粗 細	割れ 目 の 分 布	割れ 目 の 特 徴	層区分		最大 径 (mm)	最大 長 (mm)	破 砕 度 分	基盤岩コア観察カード 記事・破砕性状・詳細スケッチ等	
												層区分	層区分					
													181					115.28m以深では割れ目の一部が残留している。
	115.52												182					115.52~118.26:CL 60~70°の高角割れ目と30°前後の低角度割れ目が交差する割れ目ぞいの多くは砂状化するが粘土は分布しない。
	116.87												183					116.87~118.26m 割れ目ぞいに砂状化が進んでいる。岩片はφ10~30m/m硬さ「C」主体。116.87~117.00mはφ10m/m前後の礫状コア。これは掘削時に割れ目ぞいの砂状部分が流失したためと推定される。割れ目は60~70°とこれにほぼ直交する40°前後が多く、交差部ではφ5m/m前後に細片化するものもある。60~70°割れ目は40°割れ目を切っている部分がある。118.10~118.63m 割れ目の一部は軽微なマンガン鉱染を受ける。116.26m以深では上位よりも更に割れ目ぞいの砂状化が進んでいる。一部で厚1~2m/mの白色粘土脈をはさむ。118.63~118.94m:D 砂状化が著しくなり、締った砂礫状を呈するものが主だが硬さ「C」岩片のみからなる部分も残留
	118.94												184					●118.94~119.12m:破碎帯(主せん断面119.10m) 118.94~119.10m:Hj 上端32°、下端60°でいずれも直線的に連続。主せん断面に平行な割れ目とこれに60°前後で斜交する割れ目が多くφ5~10m/mに細片化した岩片と岩片間の一部に砂状化した「砂混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)、厚さ160m/m(コア長)。
	119.10												185					119.10~119.12m:Hc-2 60°で上端直線的に、下端は波打って連続。φ1~2m/m石英粒、φ3~10m/m粘土化~硬さ「D」岩片を10~20%含む軟弱粘土(ガウジ)色調は浅黄(5Y8/3)、厚さ13~15m/m 粘土中には、表面がマンガン化したφ1m/mの石英粒が多い。また下端~上端へ斜交する幅2m/mの軟弱な黒色粘土脈が分布。
	119.12												186					119.12~119.30m:CL 60~70°高角度割れ目とこれに斜交する40°割れ目が多く細片化するが挟雑物は殆んど分布しない

記事内容
181 115.28m以深では割れ目の一部が残留している。
182 115.52~118.26:CL 60~70°の高角割れ目と30°前後の低角度割れ目が交差する割れ目ぞいの多くは砂状化するが粘土は分布しない。
183 116.87~118.26m 割れ目ぞいに砂状化が進んでいる。岩片はφ10~30m/m硬さ「C」主体。116.87~117.00mはφ10m/m前後の礫状コア。これは掘削時に割れ目ぞいの砂状部分が流失したためと推定される。割れ目は60~70°とこれにほぼ直交する40°前後が多く、交差部ではφ5m/m前後に細片化するものもある。60~70°割れ目は40°割れ目を切っている部分がある。118.10~118.63m 割れ目の一部は軽微なマンガン鉱染を受ける。116.26m以深では上位よりも更に割れ目ぞいの砂状化が進んでいる。一部で厚1~2m/mの白色粘土脈をはさむ。118.63~118.94m:D 砂状化が著しくなり、締った砂礫状を呈するものが主だが硬さ「C」岩片のみからなる部分も残留
184 ●118.94~119.12m:破碎帯(主せん断面119.10m) 118.94~119.10m:Hj 上端32°、下端60°でいずれも直線的に連続。主せん断面に平行な割れ目とこれに60°前後で斜交する割れ目が多くφ5~10m/mに細片化した岩片と岩片間の一部に砂状化した「砂混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)、厚さ160m/m(コア長)。
185 119.10~119.12m:Hc-2 60°で上端直線的に、下端は波打って連続。φ1~2m/m石英粒、φ3~10m/m粘土化~硬さ「D」岩片を10~20%含む軟弱粘土(ガウジ)色調は浅黄(5Y8/3)、厚さ13~15m/m 粘土中には、表面がマンガン化したφ1m/mの石英粒が多い。また下端~上端へ斜交する幅2m/mの軟弱な黒色粘土脈が分布。
186 119.12~119.30m:CL 60~70°高角度割れ目とこれに斜交する40°割れ目が多く細片化するが挟雑物は殆んど分布しない

標尺	深	柱	岩	色	岩	コ	最	R	コ	最大	R	コ	最大	記	事
尺	度	状	種	調	級	ア	大	Q	ア	径	Q	ア	径	事	事
m	m	m	区	分	分	採取	径	D	採取	(%)	(%)	長	(cm)	事	事

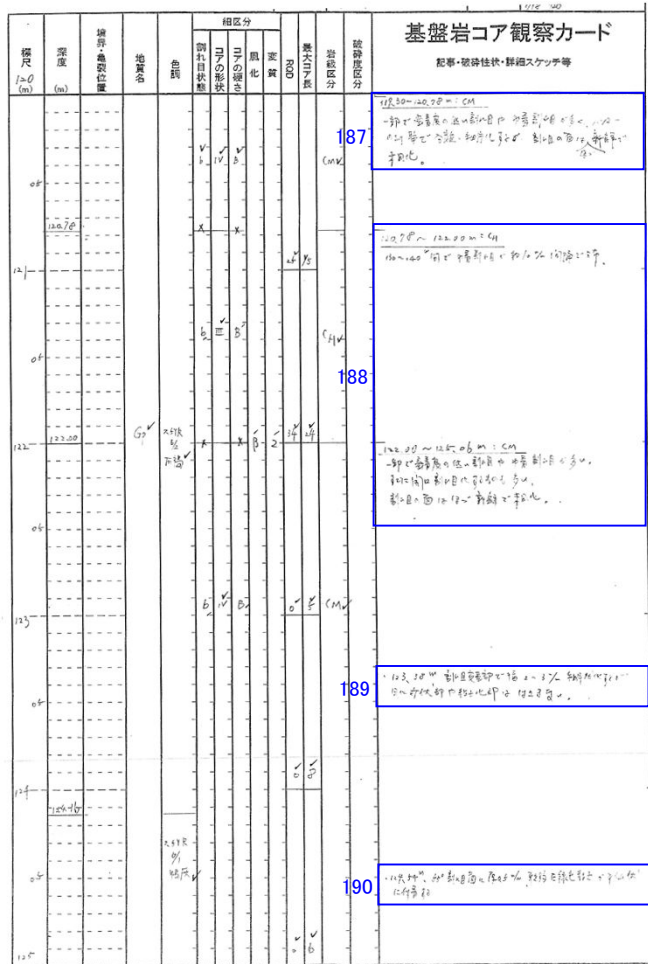
記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
181~186	・記載漏れのため比較対象無し。※2

H27-B-1

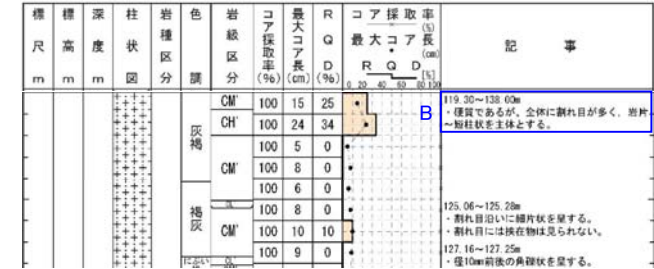
コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容
187 119.30~120.78m: CM 一部で密着度の低い割れ目やゆ着割れ目が多く、ハンマーの打撃で分離・細片化するが、割れ目の面はほぼ新鮮で未風化。
188 120.78~122.00m: CH 130~140m間でゆ着割れ目が約10m/m間隔で分布。
189 122.00~125.06m: CM 一部で密着度の低い割れ目やゆ着割れ目が多い。すでに開口割れ目化するものも多い。割れ目の面はほぼ新鮮で未風化。
190 124.54m 55° 割れ目面に厚0.5m/m、軟弱灰緑色粘土がフィルム状に付着する。



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
187	・記載漏れのため比較対象無し。※2
188	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目の密着状態・開口状況・風化状況については、補足的なものであるため削除。
189	・細片化が見られるが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
190	・粘土の挟在が見られるが、幅狭く、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
B	・“コアの硬さ”欄及び“コアの形状”欄に基づき、硬質である、岩片～短柱状を主体とすると記載。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	境界 曲線位置	地層名	色調	割れ目状況		開口状況	風化	高層	最大コア長	破砕区分	基盤岩コア観察カード	
					割れ目状況	開口状況						記事	破砕区分
125.06	125.06											191	記事内容
125.28	125.28											192	記事内容
127.16	127.16											193	記事内容
127.68	127.68											194	記事内容
128.08	128.08											195	記事内容
128.64	128.64											196	記事内容
128.88	128.88											197	記事内容

記事内容
125.06~125.28m: CL ゆ着割れ目などから分離・細片化している。砂や粘土ははさまない。
125.28~127.68m: CM 開口割れ目と平行方向のゆ着割れ目や密着度の低い割れ目を含んでいる。ハンマーの強打で一部は分離・細片化する。ごく一部(下記127.16~127.25m間)でごく薄く風化する以外はほとんど新鮮、未風化。
127.16~127.25m間はφ10m/前後で角礫化している。下端の45°割れ目面には幅10m/mがφ2~5m/mで細礫状化し、風化で淡褐色化する。
127.68~128.08m: CL 厚さ5~10m/m程度の片状コア主体で挟在物は下部の128.05~128.08mがφ3~5m/m硬質岩片を含む「礫質砂」状を呈する以外、砂、粘土などはさまない。
128.08~128.64m: CM 各割れ目面は薄く淡褐色化し直上よりも風化するが、砂や粘土など挟在物は認められない。
128.64~128.88m: CL φ10m/m前後に細かく砕けた角礫状コアで、各割れ目面には砂が付着することがある。割れ目ぞいに風化が進行していると推定される。
128.88~129.91m: CM 60~70°の高角度と30~40°の低角度割れ目の交差部ではφ10m/m前後に片状~角礫状するが、砂状部や粘土化部ははさまない。



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
191	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・割れ目の密着の程度については、補足的なものであるため削除。
192	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・割れ目の開口状況・密着状態については、補足的なものであるため削除。 ・風化の程度については、岩級区分に含めて示しているため削除。
193	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の傾斜、変色については、補足的なものであるため削除。 ・細礫状部の幅については、ばらつきがあるため削除。
194	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・片状コア主体で、一部で礫質砂状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
195	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・割れ目の変色、挟在物の有無については、補足的なものであるため削除。 ・風化の程度については、当該区間の周囲との差が明瞭ではないことから削除。
196	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・割れ目沿いの風化については、補足的なものであるため削除。 ・角礫状を呈し、一部で砂が付着するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
197	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示していることから削除。 ・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 ・一部割れ目沿いで細片化するが、周囲の岩盤が劣化が認められないことから削除。

コア観察カード (H27年8月)

標尺 (m)	深度 (m)	採掘位置	試料位置	細区分										岩級区分	記事	
				崩れ	崩れ	崩れ	崩れ	崩れ	崩れ	崩れ	崩れ	崩れ	崩れ			
130															198	
															199	
															200	
															201	
															202	
															203	

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
198 129.91~131.93m: CH
199 一部のコアにはゆ着割れ目や密着割れ目を含むが、ハンマーの強打でも密着し、分離・細片化しないものが多い。
200 131.40~131.52m間はφ20~30mの角礫状化しているが、これはロッド引上時に生じた人為的な現象と推定される。
201 131.93~138.07: CM ゆ着割れ目や密着度の低い割れ目を多く含んでいる。既に開口化しているものも多い。 割れ目の一部は風化で薄く砂状部をはさむことがあるが、挟雑物がない(b)割れ目が主体。
202 132.07~132.24m間φ10~20m/m角礫状化する。割れ面に砂が付着するものが多い。微細な黄鉄鉱も伴う。 同区間は珪質である。
203 133.40~134.00mはゆ着した密着割れ目ぞいに開口化し、φ10m/m前後に細かく砕けている。 133.82m 60° 割れ目ぞい幅20m/mがφ3~5m/mの細片状化しているが、風化に起因する砂や粘土ははさんでいない。

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	柱状	岩種区分	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	D	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	D	記事
130			花崗斑岩		CH	100	9	0								127.16~127.25m ・径10m前後の角礫状を呈する。
					CM	100	11	11								129.91~131.93m ・割れ目が少なく、柱状を呈する。
					CH	100	16	26								132.07~132.24m ・強質化している。 ・径10~20mの角礫状を呈する。 ・微細な黄鉄鉱が呈出している。
					CM	100	11	11								135.80~136.00m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
198, 199	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・“コアの形状”欄に基づき、割れ目が少なく、柱状を呈すると記載。 ・割れ目の密着状態については、補足的なものであるため削除。
200	<ul style="list-style-type: none"> ・角礫状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
201	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・割れ目の密着状態・開口状況、挟在物の有無については、補足的なものであるため削除。 ・一部割れ目沿いで砂状化するが幅狭く、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
202	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目に砂が付着するが、当該区間の周囲の割れ目との差異が認められないことから削除。
203	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の密着状態・開口状況・傾斜、挟在物の有無については、補足的なものであるため削除。 ・一部割れ目沿いで細片化しているが、掘削時の機械割れと判断し削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	境界位置 (m)	地質	色	割れ目の状況	割れ目の長さ	割れ目の角度	割れ目の形状	割れ目の方向	割れ目の密度	割れ目の開き	割れ目の充填	割れ目の観察	割れ目の評価	割れ目の備考	割れ目の写真	割れ目のスケッチ
130																	
135																	
136																	
137																	
138																	
139																	
140																	
141																	
142																	
143																	
144																	
145																	

記事内容
204 135.80~136.00m ゆ着割れ目ぞいに開口し、長さ10~30m/m程度に細片化している。
205 137.00~138.07m ゆ着割れ目が多いが密着度は高く、ハンマーの強打でも分離しない。すでに開口割れ目化しているものも多い φ2~3m/m暗緑灰色の緑泥石が斑点状に点在する。
206 138.07~138.44m: CM 密着度の低いゆ着割れ目を多く含み、全体として硬さ「C」である。 長石の白濁化や割れ目挟在物は殆んど認められない。 φ2~3m/m暗緑灰色の緑泥石斑点が多い。 138.44~138.80m: CH 堅硬、塊状。ゆ着割れ目が多いが密着度高くハンマー強打でも分離しない。 138.80~139.82m: CL 139.18m以浅は硬さ「C」、以深は軟化が進み「D」である。 全体に割れ目挟在物は殆んど含まない。 139.93m 60~70° 厚さ5~10m/mで湾曲しながら石英脈が密着~一部割れ目化して連続。 139.95~139.08m 30~40°と70°割れ目が交差。岩片状を呈する。劣化は伴わない
207 139.18m以深は上位より風化と変質が進む。
208 139.31m 72°割れ目ぞい厚さ2~3m/mマンガン鉱染を受ける

標尺 (m)	深度 (m)	柱状図	岩性区分	色調	岩級区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	最大コア長 (cm)	R	Q	D	記事
						100	7	0							135.80~136.00m ・割れ目ぞいに、径10~30mmの細片化している。 ●139.82~139.89m ・硬軟部である。カタクレサイトからなる ・暗緑灰~灰褐色の粘土状~暗緑灰色の砂泥り層状を呈する。 ・暗緑灰~灰褐色粘土、累計厚1mm ・定向・傾斜はN27° E88°とである。 ・傾斜は52°である。 ・上盤境界の傾斜は52°、下盤境界の傾斜は52°である。
						100	9	0							
						100	6	0							
						100	11	11							
						100	6	0							
						100	12	23							
						100	3	0							

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
204	・割れ目の密着状態・開口状況については、補足的なものであるため削除。
205	・ゆ着割れ目については、周囲の割れ目と差異が認められないため削除。 ・割れ目の開口状況、鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
206	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・割れ目の密着状態、挟在物の有無、鉱物の晶出、鉱物脈については、補足的なものであるため削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・長石の白濁化については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。 ・一部で岩片状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
207	・風化と変質の程度については、当該区間の周囲と明瞭な差が認められないため削除。
208	・割れ目の傾斜、割れ目沿いのマンガンについては、補足的なものであるため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

基礎岩コア観察カード										
記事・破砕性状・詳細スケッチ等										
深度 (m)	地層	地質	地質	地質	地質	地質	地質	地質	地質	記事
139.82										209
139.82										210
139.82										211
139.82										212

記事内容	
209	●139.82~139.88m破砕帯(主せん断面139.82m)
210	139.82m:Hc-1
211	52°で直線的に連続。肉眼的には石英粒、岩片を含まない軟弱粘土(ガウジ)。色調は暗緑灰(5G3/1)~灰褐色(7.5YR4/1)、厚さ0.5~1m/m 139.82~139.88m:Hj 52°で上下端とも直線的に連続。φ3~5m/mに細かく岩片化。岩片間には砂状化(粗粒砂主体)。岩片の多くは主せん断面方向に配列している。全体に「砂混じり岩片状」を呈する。色調は暗緑灰色(10G3/1)。厚さ40m/m 139.88~139.95m:D 主せん断面と平行に近い割れ目が多い。岩組織は残留する。 139.95~140.03m:CL 硬さ「C」岩片主体。 140.03~141.27m:CM 坚硬だが割れ目が多い。コア長10cm以下の短棒状コア主体 割れ目挟在物は分布しない。 141.27~142.31m:CL ゆ着割れ目や密着度の低い割れ目が多い 141.55m以浅では割れ目に風化起因の砂や暗緑灰色粘土など挟在物も多く全体に軟化する。 141.55m以深では挟雑物のない割れ目が主体。 142.31~144.0m:CM 岩片は硬くなる(硬さ「B」)。 143.36m以深では割れ目ぞいに暗緑灰色で幅1m/m程度の砂~粘土をフィルム状にはさむ割れ目が多い 143.93m以深では割れ目周辺が暗緑灰色帯びる。 (孔底)
212	

標尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	最大コア長	記事
m	m	m	区	調	分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(cm)	
						100	6	0			135.80~136.00m ・割れ目直に、径10~30mmの岩片化している。 ●139.82~139.88m ・破砕部である。カタクレーサイトからなる ・暗緑灰~灰褐色の粘土状~暗緑灰色の砂混じり層状を呈する。 ・暗緑灰~灰褐色粘土、累計厚1mm ・走向・傾斜はN27°E80°である。 ・傾斜は52°である。 ・上盤境界の傾斜は52°、下盤境界の傾斜は52°である。
						100	11	11			
						100	6	0			
						100	12	23			
						100	3	0			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
209~211	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・表現の見直し(砂混じり岩片状→砂混じり礫状) ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
212	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・割れ目の有無、割れ目の密着状態、色調については、補足的なものであるため削除。 ・一部割れ目に砂や粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないため削除。

余白

H27-B-2

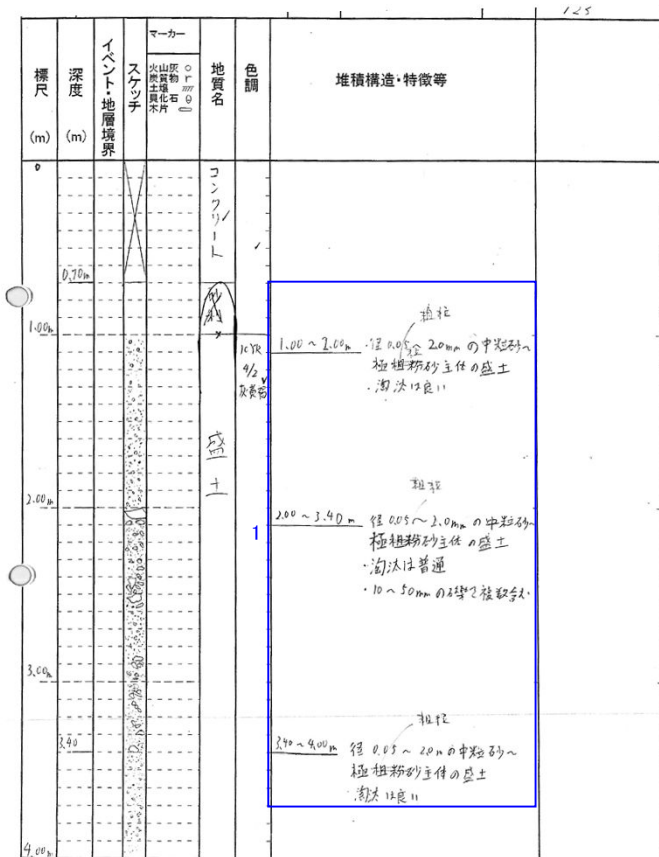
余白

H27-B-2

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



スケッチ: 疎はクサリ ● 半クサリ ○ 硬質 ○ 疎種は黒雲母花崗岩Gr, 花崗斑岩Gp, アブライトAp 等
境界 明瞭 — 不明瞭 - - - 亀裂は赤線, 角度, 条線等

記事内容
1.00~2.00m 径0.05~2.0mmの中粒砂~極粗粒砂主体の盛土 淘汰は良い
2.00~3.40m 径0.05~2.0mmの中粒砂~極粗粒砂主体の盛土 淘汰は普通 10~50mmの礫を複数含む
3.40~4.00m 径0.05~2.0mmの中粒砂~極粗粒砂主体の盛土 淘汰は良い

標尺 (m)	深度 (m)	柱状図	岩種区分	色調	岩級区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	記事
0.00	0.70		コンクリート			100					100					0.00~0.70m ・コンクリートである。
0.70	1.00		盛土			100					100					0.70~1.00m ・盛土である。
1.00	2.00		盛土			100					100					1.00~2.00m ・盛土である。 ・最上部300mmは砕石である。
2.00	3.40		盛土			100					100					
3.40	4.00		盛土			100					100					

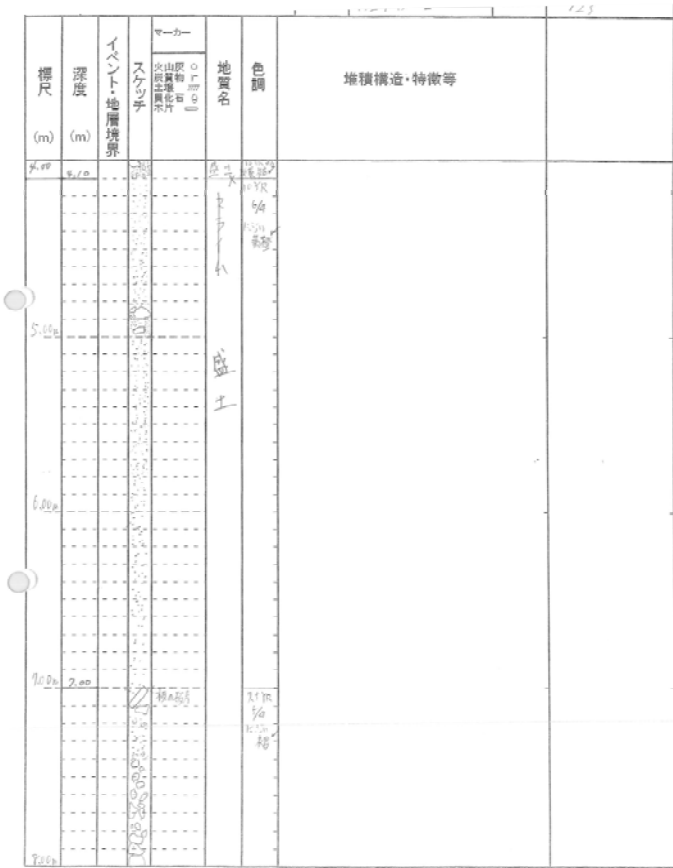
記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
A	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
1	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・“地質名”欄の砂利との記載に基づき砕石、“標尺”欄及び“深度”欄に基づき、最上部300mmと記載。なお、最上部300mmは300mmの誤り。※2

H27-B-2

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



スケッチ: 線はウサリ ● 半ウサリ ○ 硬質 ○ 礫は黒雲母花崗岩Gr, 花崗斑岩Gp, アプライトAp 等
境界 明線 --- 不明線 --- 亀裂は赤線, 角度, 泉線等

記事内容

標尺 m	標高 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色 調	岩級 区分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R Q D (%)				記事
									R	Q	D		
				灰 黄 粘 土			100						0.70~12.30m ・ 盛土である。 ・ 最上部300mmは砂石である。
				に ふ い 黄 粘 土			100						
				盛 土			100						
				に ふ い 黄 粘 土			100						
				灰 黄 粘 土			100						
				に ふ い 黄 粘 土			100						
				灰 黄 粘 土			100						
				に ふ い 黄 粘 土			100						
				灰 黄 粘 土			100						
				に ふ い 黄 粘 土			100						
				灰 黄 粘 土			100						12.33~13.75m ・ 砂礫である。 ・ 最大径200mmの礫を含む。

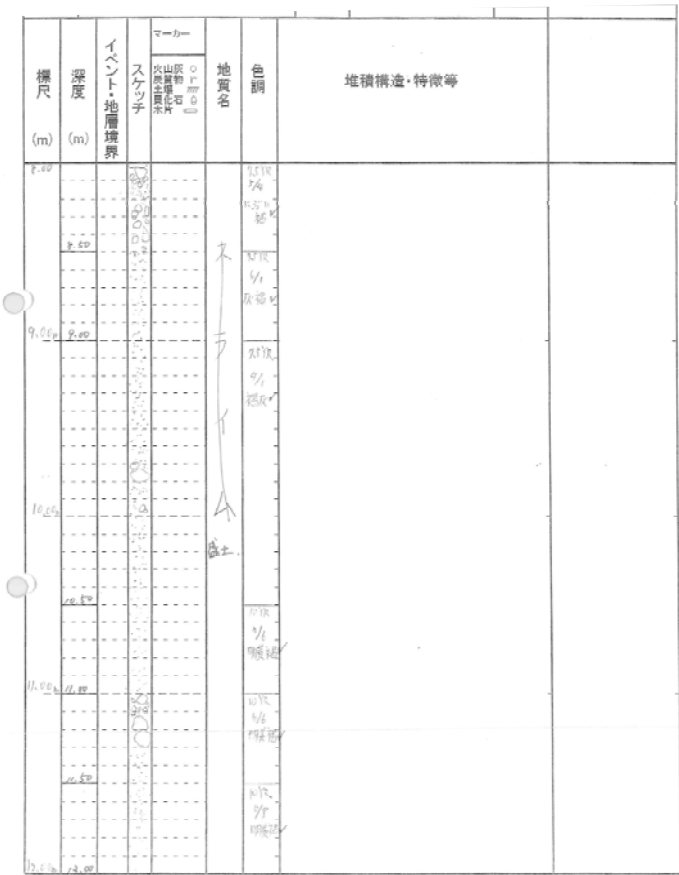
記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
-	-

H27-B-2

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容

標尺	標高	深度	柱状図	岩種区分	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	D	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	記事
m	m	m												
				灰黄粘		100						0.70	12.33	0.70~12.33m ・ 盛土である。 ・ 最上部200mmは砂石である。
				にふい黄粘		100								
				盛土		100								
				灰黄粘		100								
				にふい黄粘		100								
				灰黄粘		100								
				にふい黄粘		100								
				灰黄粘		100								
				にふい黄粘		100								
				灰黄粘		100								
				にふい黄粘		100								12.33~12.75m ・ 砂層である。 ・ 最大径200mmの礫を含む。

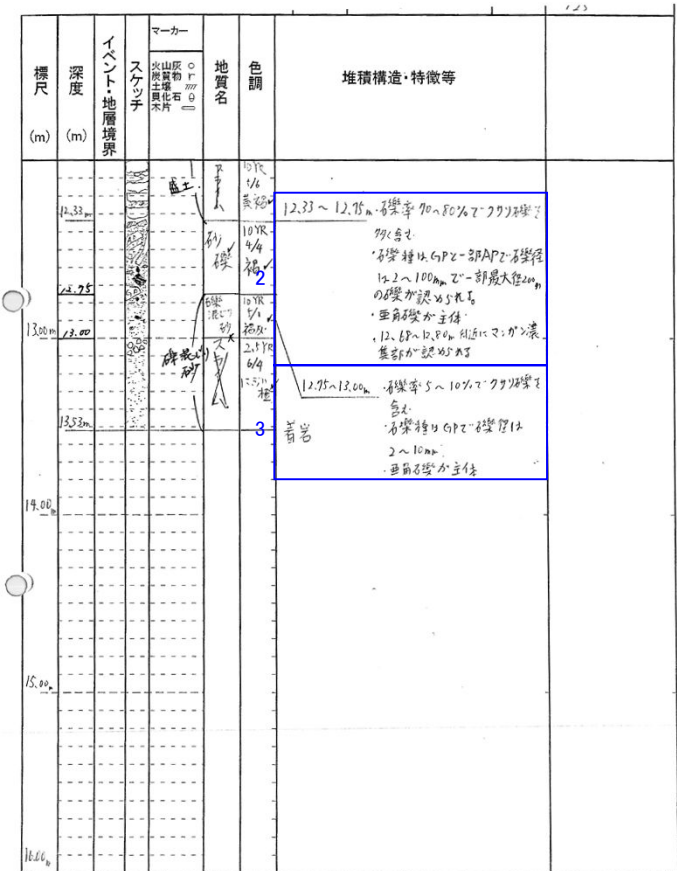
記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
-	-

H27-B-2

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容	
2	12.33～12.75m 礫率70～80%でクサリ礫を多く含む 礫種はGPと一部APで、礫径は2～100mmで、一部最大径200mmの礫が認められる。 垂角礫が主体 12.68～12.80m付近にマンガン濃集部が認められる
3	12.75～13.00m 礫率5～10%でクサリ礫を含む 礫種はGPで礫径は2～10mm 垂角礫が主体 着岩



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
2	<ul style="list-style-type: none"> ・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・周囲に比べ含まれる礫が大きく、目立つことから、礫の特徴として、最大径を記載。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。

H27-B-2

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	境界線位置	地質名	色	割れ目状態	細区分				最大コア長 RQD	岩級区分	破砕区分	基盤岩コア観察カード 記事・破砕性状・詳細スケッチ等
						コアの長さ	風化	変質	層状				
11.06													
12.00													
13.00													
14.55	14.55												14.55~14.63m 割れ目沿いにマンガン濃集部が認められ、一部(14.55~14.63m)で土砂化が生じている。
14.89	15.00												14.89~15.00m スライムのため判別不可

記事内容
13.53~29.88m: CL 硬さ「D」主体で、0~30° 割れ目が多い。全体に風化し、一部の割れ目ぞいには砂状化が進む。
14.91m 幅4mmで傾斜15° の石英脈が認められる。
14.55~14.68m 割れ目沿いにマンガン濃集部が認められ、一部(14.55m~14.63m)で土砂化が生じている。
14.89~15.00m スライムのため判別不可

標尺 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色 調	岩級 区分	最大 コア 長 (cm)	R (%)	Q (%)	D (%)	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	記事
10	11.33					100						12.33~12.75m ・砂状である。 ・最大径200mmの礫を含む。
	12.75					100						12.75~13.53m ・確認しり砂である。
	13.53					100						13.53~13.75m ・花崗斑岩である。
	19.59					100						19.59~19.88m ・10mm程度の範囲で、割れ目が分布する。 ・75~20.82m ・割れ目沿いに砂状化している部分が多い。
	20.82					100						20.82~20.88m ・割れ目が多く、岩片~層状を呈する。 ● 15~31.60m ・硬砂層である。
	20.88					100						・正断層センスである。 ・同色の砂質じり粘土状~明黄色の硬質粘土状~に富み黄緑~に富み黄色の粘土質じり層状を呈する。
	23.23					100						・同黄色砂質じり粘土、厚約厚10cm ・走向・傾斜は30°である。 ・傾斜は30°である。 ・上盤境界の傾斜は20°、下盤境界の傾斜は42°である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
B	・“地質名”欄に基づき、花崗斑岩とその深度区間を記載。
4	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 ・砂状化については、顕著な部分を個別に記載しているため削除。
5	・鉱物脈、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・14.55~14.63mで土砂状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・スライム区間については、ボアホールテレビによる観察結果から、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないため、コア写真で示すこととし削除。

H27-B-2

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	境界 番号	境界 位置	地層 名	色	細区分				割れ目 状況	コアの 形状	風化	RQD	最大 コア長	岩級 区分	記事
						割れ目 状況	コアの 形状	風化	RQD							
15.07																
15.09																
15.62																
15.50																
16.00																
16.51																
16.86																
16.92																
16.93																
17.10																
17.16																
17.57																
17.64																
17.70																
17.80																
17.90																
17.94																
19.59																
19.70																
19.70																

記事内容
15.00~15.09m スライムのため判別不可
15.62~15.66m 割れ目に沿ったマンガン濃集部あり
15.80~16.00m 割れ目に沿ったマンガン濃集部あり
16.50~16.51m 割れ目に沿って緑泥石が発達
16.76~16.86m マンガン濃集部が密集している
16.92~16.93m 割れ目に沿ったマンガン濃集部あり
17.10m 割れ目に沿ったマンガン濃集部あり
17.16m以深は上位に比べ割れ目がやゝ少なくなる
17.57~17.64m 割れ目に沿って緑泥石が発達
17.70~17.80m 割れ目に沿ったマンガン濃集部あり
17.90~17.94m 割れ目に沿ったマンガン濃集部あり
19.59~19.80m 10m/m程度間隔で割れ目あり。マンガンと石英を伴う。
19.70m以浅は風化が進み軟質化する

標尺 (m)	深度 (m)	柱状 図	岩種 区分	色	岩級 区分	最大 コア長 (cm)	R D	コア採取 率 (%)	最大コア 長 (cm)	記事
						100	3	0	13.53~13.75m	花崗閃岩である。
						100	3	0	19.59~19.80m	10m程度の間隔で、割れ目が分布する。
						100	4	0	28.02~28.83m	割れ目沿いに砂状化している部分が多い。
						100	4	0	28.02~28.83m	割れ目が多く、岩片一層状を呈する。
						100	10	10	28.12~31.40m	破砕部である。
						100	12	12		正断層センスである。
						100	8	0		実地色の砂質シリカ土状〜珪藻類の混入
						100	23	23		粘土状を呈する。
						100	15	27		灰黄色砂質シリカ土、累計厚10m
						100	7	0		走向・傾斜は7°/8°である。
										上盤境界の傾斜は20°、下盤境界の傾斜は42°である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
6	<ul style="list-style-type: none"> マンガン、割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。 スライム区間については、ボアホールテレビによる観察結果から、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないため、コア写真で示すこととし削除。 割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示していることから削除。
7	<ul style="list-style-type: none"> マンガン、割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
8	<ul style="list-style-type: none"> 風化を伴う硬軟については、岩級区分に含めて示していることから削除。

H27-B-2

コア観察カード (H27年8月)

標尺 深さ (m)	深度 (m)	境界 位置 (m)	地質 分類	地質 記号	相区分				取割 位置	取割 長さ	取割 角度	記事
					割れ目 性状	割れ目 長さ	割れ目 角度	割れ目 形状				

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
9 20.90m 0° 割れ目ぞい約10m/m砂状化
10 21.90m φ10m/m石英が80° 割れ目(sj)で切られる(右ズレ10m/m)
11 21.79~26.82m 硬さ「C」が主体であるが、硬さ「D」も含み両者が交互に出現する。割れ目ぞいに風化で砂状化する部分が多い。
12 22.18~22.49mは硬さ「B」で硬質
13 23.52m・30° と23.82m・20° の各割れ目に厚さ1m/m半固結状の灰褐色粘土脈はさむ

申請書用柱状図

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩級	最大	R	Q	コア採取	率	最大	コア	長さ	記事
m	m	m	図	記	別	コア	Q	D	率	(%)	長さ	(cm)	(%)	
						100	3	0						13.53~13.75m ・花崗岩である。
						100	3	0						19.59~19.80m ・10m厚の層状で、割れ目が多い。
						100	4	0						21.79~26.82m ・割れ目ぞいに砂状化している部分が多い。
						100	4	0						28.02~28.80m ・割れ目が多く、若干一層状を呈する。 ●21.18~31.40m ・硬砂である。
						100	12	12						・正断層センスである。 ・灰褐色の砂質じり粘土状~褐色の硬質粘土状~灰褐色の粘土質。
						100	8	0						・灰褐色砂質じり粘土、累計厚10m ・走向・傾斜は7・30°である。
						100	15	27						・傾斜は30°である。 ・上層境界の傾斜は20°、下層境界の傾斜は42°である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
9	・割れ目ぞいに砂状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
10	・石英を切る箇所が不明であり、割れ目は直線性や連続性に乏しいことから削除。
11	・硬軟については、岩級区分で示しているため削除。 ・風化の程度については、当該区間の周囲と明瞭な差が認められないことから削除。
12	・硬軟については、岩級区分に含めて示していることから削除。
13	・一部に粘土を挟在するが、連続性や直線性に乏しいことから削除。

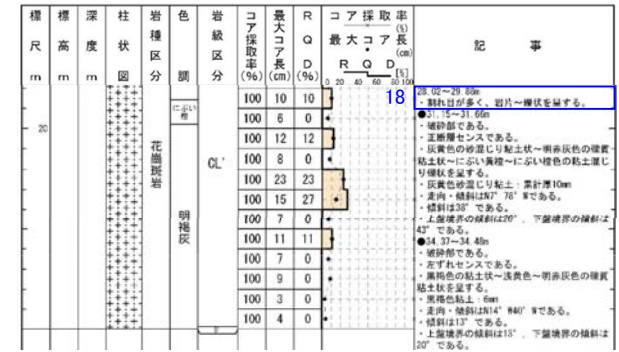
コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標高 m	深度 m	採取 番号	地質名	調色	細区分					備考
					割れ目 形状	割れ目 長さ	割れ目 間隔	割れ目 角度	割れ目 変位	
26.00	0.00									
26.00	0.00									14
26.00	0.00									15
26.00	0.00									16
26.00	0.00									17
26.00	0.00									18

記事内容
14 25.31m 20° 割れ目ぞいにφ0.5m/m~1m/mと微細な雲母(セリサイト?)が晶出している。
15 25.84m 74° の割れ目(sj)は交差する5~10° 割れ目を切っている(右ズレ、変位量1~3m/m)。
16 26.82m以降は硬さ「D」が主体となる。 27.15m 65° 割れ目に幅2~3m/m軟質淡黄~灰白色粘土脈はさむ。
17 27.91m 20° 幅1m/m石英脈が交差する85° せん断割れ目(sj)で右ズレ1m/mで引きつられるように変形している(切られてはいない)
18 28.02m以深、10m/m間隔の風化割れ目が発達し、片状~礫状化している。割れ目ぞいに風化砂状化することが多い。



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
14	・割れ目に晶出した鉱物については、補足的なものであるため削除。
15	・低角度割れ目に変位がないため削除。
16	・硬軟については、岩級区分に含めて示していることから削除。 ・一部で粘土を挟み込むが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
17	・石英脈の変形が不明瞭であり、割れ目は連続性に乏しいことから削除。
18	・“コアの形状”欄に基づき、29.88mと記載。 ・一部割れ目沿いに砂状化するが、いずれも連続性や直線性に乏しいことから削除。

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深度 (m)	境界位置	地層名	色調	割れ目	備考	基盤岩コア観察カード 記事・破砕状況・詳細スケッチ等
3.0						19 29.88~30.82m:D 概ねφ10m/m以下に砕けている
3.5						20 30.82~31.15m:CL 風化で割れ目ぞいに砂状化が拡大している。
3.7						21 31.15~31.66m:破砕帯(主せん断面31.29m)
3.8						22 31.66~31.82m:Hj 上端20°で直線的、下端15~28°で湾曲して連続。
3.9						23 31.82~31.28m:Hc-2 38°で上端波打って、下端は直線的に連続。
4.0						24 31.28~31.66m:Hj 上端38°で直線的に、下端43°で波打って連続。
4.1						25 31.66~31.82m:Hc-2 38°で上端波打って、下端は直線的に連続。

記事内容
19 29.88~30.82m:D 概ねφ10m/m以下に砕けている
20 30.82~31.15m:CL 風化で割れ目ぞいに砂状化が拡大している。 φ5~30m/mの硬さ「D」「C」岩片が多く残留し、縮った「砂礫状」を呈する。 基質は砂状部が主体であるが、灰白色粘土化部も散在している。 岩組織や上部の割れ目は残留している。
21 31.15~31.66m:破砕帯(主せん断面31.29m)
22 31.66~31.82m:Hj 上端20°で直線的、下端15~28°で湾曲して連続。一部粘土化したφ5~10m/m岩片と岩片間の粘土〜幅1~2m/m粘土細脈からなり「粘土混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄橙(10YR 7/2)、厚さ80~90m/m
23 31.82~31.28m:Hc-2 上端15~28°で湾曲して、下端38°で波打って連続。φ2~3m/m石英粒、φ5~10m/mの大半が粘土化した岩片計20~30%を含む固結状の「礫質粘土」状呈する。色調は明赤灰(2.54R 7/2)、厚さ20~30m/m
24 31.28~31.66m:Hj 上端38°で直線的に、下端43°で波打って連続。φ5~20m/m硬さ「C」主体(他に粘土化、硬さ「D」「E」含む)と岩片間の粘土からなり「粘土混じり岩片状」呈する。色調はにぶい橙(7.5YR 7/3)、厚さ350m/m(コア長)。
25 31.66~31.82m:Hc-2 38°で上端波打って、下端は直線的に連続。

標尺	高さ	柱状	岩種	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	記事
20	100	10	10	CL	100	5	0	100	12	12	22~25	割れ目が多く、岩片一種状を呈する。 ●31.15~31.66m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰黄色の粘土〜灰白色の硬質粘土状〜にぶい黄橙〜にぶい橙色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰黄色粘土〜厚さ約10mm ・走向・傾斜は33°である。 ・傾斜は33°である。 ・上層境界の傾斜は20°、下層境界の傾斜は47°である。
	100	8	0		100	23	23	100	15	27		●31.37~31.48m ・破砕部である。 ・歪みセンスである。 ・黄褐色の粘土〜灰黄色〜明赤灰色の硬質粘土状を呈する。 ・厚さ約10mm ・走向・傾斜は33°である。 ・傾斜は33°である。 ・上層境界の傾斜は15°、下層境界の傾斜は20°である。
	100	11	11		100	7	0	100	9	0		●31.36~31.48m ・破砕部である。 ・歪みセンスである。 ・黄褐色の粘土〜灰黄色〜明赤灰色の硬質粘土状を呈する。 ・厚さ約10mm ・走向・傾斜は33°である。 ・傾斜は33°である。 ・上層境界の傾斜は15°、下層境界の傾斜は20°である。
	100	3	0		100	3	0	100	3	0		●31.66~31.73m ・破砕部である。 ・灰黄色の粘土〜灰白色の硬質粘土状〜明赤灰色の粘土質礫状を呈する。 ・灰黄色粘土 2mm ・傾斜は17°である。 ・上層境界の傾斜は12°、下層境界の傾斜は12°である。
	100	11	11		100	3	0	100	3	0		●31.92~31.95m ・破砕部である。 ・灰オリーブ色の粘土〜灰白色の硬質粘土状を呈する。 ・灰オリーブ色粘土 5mm ・走向・傾斜は33°である。 ・傾斜は33°である。 ・上層境界の傾斜は35°、下層境界の傾斜は45°である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
19, 20	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・縮まった砂礫状を呈し、一部で粘土を含むが、岩盤の劣化に系統性が認められないことから削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
21	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・割れ目沿いに砂状化するが、周囲の岩盤の劣化に系統性が認められないことから削除。
22~25	<ul style="list-style-type: none"> ・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・φ2~3mm石英粒を10~20%含むとの記載に基づき、砂混じり粘土状と記載。 ・灰黄褐色→灰黄色※1 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

Table with columns for core observation data including depth (m), lithology, and handwritten notes. The title is '基盤岩コア観察カード' (Basement Rock Core Observation Card).

Table with columns for '記事内容' (Article Content) and '記事' (Article). It contains numbered entries (26-29) describing geological observations and core characteristics.

Table for '申請書用柱状図' (Application Form Columnar Diagram). It includes columns for core depth (m), diameter (cm), and lithological descriptions, with handwritten annotations and a scale.

Table with columns for '記事' (Article) and 'コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図' (Core Observation Card (H27 August) ⇒ Application Form Columnar Diagram). It provides detailed commentary and corrections for entries 26 and 27-29.

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

基盤岩コア観察カード. 記事・破砕性状・詳細スケッチ等. 表: 深度 (m), 岩級区分, 破砕区分, 観察記述.

記事内容. 30 34.48~35.13m: CL. 31 35.36~35.46m: 破砕帯(主せん断面35.40m). 32 35.39~35.40m: Hc-1. 33 35.40~35.46m: Hj. 34 35.46~35.68m: D. 35 35.68~35.68m: D.

申請書用柱状図. 表: 深度 (m), 柱状区分, 岩級区分, コア採取率 (%), R, Q, D, 記事.

記事. コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図. 30: 岩級及びその区間については... 31~34: 表現の見直し(粘土混じり岩片状~粘土質岩片状)... 35: 岩級及びその深度区間については...

H27-B-2

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カード		基盤岩コア観察カード	
観察者: 藤田 誠		観察場所: 観音崎断崖	
36	35.68~35.73m: Hj	37	35.72~35.73m: Hb
37	35.72~35.73m: Hb	38	35.73m: Hc-1
38	35.73m: Hc-1	39	35.92m: D
39	35.92m: D	40	35.92m: Hc-1
40	35.92m: Hc-1	41	35.92~35.95m: Hb

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
36 ●35.68~35.73m: 破砕帯(主せん断面35.73m) 35.68~35.72m: Hj 上端27°の褐色軟質粘土で波打って、下端20°で不明瞭ながら波打って連続。φ3~φ5m/m。粘土化岩片主体で「粘土質岩片状」呈する。色調は明褐色(7.5YR 7/2)、厚さ35~50m/m
37 35.72~35.73m: Hb 上端20°で波打って、下端12°で直線的に連続。φ1~2m/m石英粒を20%程度含む半固結状の「礫質粘土状」呈する。色調は淡黄色(2.5Y 8/3)、厚さ10m/m
38 35.73m: Hc-1 12°で上下端とも直線的に連続。石英粒、岩片を殆んど含まない(5%以下)軟質粘土(ガウジ)。色調は灰黄褐(10YR 6/2)、厚さ1~2m/m
39 35.68~35.92m: D 上下を破砕帯に囲まれ、粘土化が進んでいる。
40 ●35.92~35.95m: 破砕帯(主せん断面35.92m) 35.92m: Hc-1 35°で上下端とも小さく波打って膨縮しながら連続。石英粒、岩片は殆んど含まない(5%以下)半固結状の粘土(ガウジ)。色調は灰オリープ(4.5Y 6/2)、厚さ1~5m/m
41 35.92~35.95m: Hb 上端35°、下端45°でいずれも小さく波打って連続。φ1~2m/m石英粒、φ2~5m/m粘土化岩片を20~30%含む半固結状の「礫質粘土状」呈する。主せん断面と平行方向に幅1m/m以下の灰赤色粘土細脈が数条分布。色調は灰白色(2.5Y 8/2)、厚さ20m/m

申請書用柱状図

標高	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	コア採取率	最大コア長	記事
m	m	m	図	調	区分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(cm)	
37.40	35.68				Hj	100	11	11				●34.37~34.40m ・破砕帯である。 ・左ずれセリスである。 ・黄褐色の粘土状~淡黄色~明褐色の礫質粘土状を呈する。 ・黒褐色粘土、6mm ・走向・傾斜は31°、40°である。 ・傾斜は17°である。 ・上層境界の傾斜は15°、下層境界の傾斜は20°である。 ●35.36~35.40m ・破砕帯である。 ・灰白~灰褐色の粘土状~灰黄~褐色の粘土状を呈する。 ・灰白~灰褐色粘土、15mm ・走向・傾斜は20°、27°である。 ・傾斜は17°である。 ・上層境界の傾斜は17°、下層境界の傾斜は20°である。
37.40	35.72				Hb	100	7	0			●35.68~35.73m ・破砕帯である。 ・淡黄色の粘土状~淡黄色の礫質粘土状~明褐色の粘土質岩片を呈する。 ・灰黄色粘土、2mm ・傾斜は17°である。 ・上層境界の傾斜は27°、下層境界の傾斜は12°である。	
37.40	35.73				Hc-1	100	9	0				
37.40	35.92				D	100	3	0				
37.40	35.92				Hc-1	100	2	0				
37.40	35.92				D	100	1	0				
37.40	35.92				Hb	100	2	0				
37.40	35.92				CL	100	3	0				
37.40	35.92				D	100	5	0				
37.40	35.92				D	100	7	0				
37.40	35.92				CL	100	10	10				
37.40	35.92				D	100	8	0				
37.40	35.92				CL	100	8	0				
37.40	35.92				D	100	2	0				

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
36~38	<ul style="list-style-type: none"> ・表現の見直し(粘土質岩片状→粘土質礫状) ・灰黄褐色→灰黄色※1 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
39	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその深度区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・粘土化が進行しているが、劣化に系統性が認められないことから削除。
40, 41	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hb区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粘土細脈が分布するが、いずれも連続性や直線性に乏しいことから削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	岩種区分	色	柱状	岩	色	岩	色	コア採取率 (%)		最大コア長 (cm)	R	Q	D	最大コア径 (cm)	記事
									R	Q						
37	37.00								100	11	11					●34.37~34.40m ・硬結部である。 ・左ずれセリスである。 ・黄褐色の粘土状～淡黄色～明茶灰色の硬質粘土状を呈する。 ・黒褐色粘土、6mm ・走向・傾斜は34°、44°である。 ・傾斜は17°である。 ・上層境界の傾斜は15°、下層境界の傾斜は20°である。 ●35.36~35.40m ・硬結部である。 ・灰白～灰褐色の粘土状～灰黄～黄褐色の粘土層じり硬質～粘土質硬結を呈する。 ・灰白～灰褐色粘土、15mm ・走向・傾斜は30°、37°である。 ・傾斜は47°である。 ・上層境界の傾斜は47°、下層境界の傾斜は20°～25°である。 ●35.66~35.73m ・硬結部である。 ・灰黄色の粘土状～淡黄色の硬質粘土状～明茶灰色の粘土質硬結を呈する。 ・灰黄色粘土、2mm ・傾斜は17°である。 ・走向・傾斜は34°、44°である。 ・傾斜は35°である。 ・上層境界の傾斜は35°、下層境界の傾斜は45°である。
38	38.00								100	7	0					
39	39.00								100	9	0					
40	40.00								100	3	0					
									100	4	0					

記事内容
<p>記事内容</p> <p>35.95～36.76m: D 36.05m以下は粘土化済み岩組織が消滅している。 36.05m以下、割れ目、岩組織ともに残留。36.60～36.70mマンガン鉱染が著しい。 36.76～37.12m: CL 割れ目ぞいに砂状化する部分もある。 37.12～37.60m: CM 岩片は硬いが(硬さ「B」)、一部の割れ目で幅1～3m/mと薄く砂状化する。 37.60～38.05m: CL 割れ目ぞいに幅10m/m程度と風化が進行している。 38.05～38.46m: CM 岩片は硬質で割れ目少なく、割れ目には挟雑物ははさまない。 38.46～39.78m: CL 39.60～39.69mは硬さ「D」ない「E」で、上端側辺りは砂状化している。</p>

標尺 (m)	深度 (m)	岩種区分	色	柱状	岩	色	岩	色	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	最大コア径 (cm)	記事
									100	11	11				●34.37~34.40m ・硬結部である。 ・左ずれセリスである。 ・黄褐色の粘土状～淡黄色～明茶灰色の硬質粘土状を呈する。 ・黒褐色粘土、6mm ・走向・傾斜は34°、44°である。 ・傾斜は17°である。 ・上層境界の傾斜は15°、下層境界の傾斜は20°である。 ●35.36~35.40m ・硬結部である。 ・灰白～灰褐色の粘土状～灰黄～黄褐色の粘土層じり硬質～粘土質硬結を呈する。 ・灰白～灰褐色粘土、15mm ・走向・傾斜は30°、37°である。 ・傾斜は47°である。 ・上層境界の傾斜は47°、下層境界の傾斜は20°～25°である。 ●35.66~35.73m ・硬結部である。 ・灰黄色の粘土状～淡黄色の硬質粘土状～明茶灰色の粘土質硬結を呈する。 ・灰黄色粘土、2mm ・傾斜は17°である。 ・走向・傾斜は34°、44°である。 ・傾斜は35°である。 ・上層境界の傾斜は35°、下層境界の傾斜は45°である。
									100	7	0				
									100	9	0				
									100	3	0				
									100	4	0				
									100	3	0				
									100	2	0				
									100	1	0				
									100	2	0				
									100	3	0				
									100	5	0				
									100	7	0				
									100	10	10				
									100	8	0				
									100	8	0				
									100	2	0				

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
42	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級区分及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・マンガン、割れ目の挟在物の有無については補足的なものであるため削除。 ・一部割れ目沿いに砂状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・37.60～38.05mの風化の程度については、当該区間の周囲と明瞭な差が認められないことから削除。

H27-B-2

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 4.0 (m)	深度 (m)	地質名	地質記号	細区分				岩級区分	破砕度区分	記事
				割れ目の形状	割れ目の長さ	風化	変質			
	40.23			Y	Y			CL	43	39.78~40.23m: D 岩組織と割れ目は残留。一部で割れ目ぞいに厚さ5~10m/mで砂状化。 40.23~41.90m: CL 20~40°割れ目が主体。一部の割れ目は消滅しかかっているものもある。 割れ目には薄く砂、粘土、マンガンをはさむことが多い。
	41.90								44	41.90~43.94m: D 強風化により割れ目ぞいの砂状化が拡大。 締った砂状部と硬さDのφ10~20m/mが岩片からなる「砂礫状を呈する部分」が主体。 岩組織や割れ目の一部は残留している。 部分的に粘土化部やマンガン鉱染部も伴う。

記事内容
39.78~40.23m: D 岩組織と割れ目は残留。一部で割れ目ぞいに厚さ5~10m/mで砂状化。 40.23~41.90m: CL 20~40°割れ目が主体。一部の割れ目は消滅しかかっているものもある。 割れ目には薄く砂、粘土、マンガンをはさむことが多い。
41.70~41.81m間はφ5~10m/mに礫状化するが、これはコアチューブ引き上げ時に砕けたものである
41.90~43.94m: D 強風化により割れ目ぞいの砂状化が拡大。 締った砂状部と硬さDのφ10~20m/mが岩片からなる「砂礫状を呈する部分」が主体。 岩組織や割れ目の一部は残留している。 部分的に粘土化部やマンガン鉱染部も伴う。

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	記事
40						100	2	0				
					CL	100	5	0				
					D	100	3	0			44	41.70~41.81m 砂~砂礫状を呈する。
						100	3	0				
						100	3	0				

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
43	<ul style="list-style-type: none"> 岩級区分及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 マンガン、割れ目の挟在物の有無については補足的なものであるため削除。 一部割れ目扱いに砂状化・礫状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 一部割れ目に粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 コアチューブ引き上げ時に砕けたものとの記載については、機械割れを示したものであり、ロッド昇降深度をコア写真で示していることから削除。
44	<ul style="list-style-type: none"> 岩級については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 原岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 一部に粘土を含むが、直線性や連続性に乏しいことから削除。 マンガンについては、補足的なものであるため削除。